

夜も早子に過るならんと思へば。明日又夙立ちぬべきを。などし云て臥しぬ。

廿六日。霧從ニ朝晷ニ散るる所に。武庫の水に蹤をぬらし。笱を曳いて。小松と云村居を過るに。秋風渡る小田の原に。いかめしき森の木立。未だ紅葉には日數經ぬべく見えて。朱の瑞籬は雨に洗はれ。華表は風の吹歪めたる社。誰守る景色もなく。御湯花まるらする釜は。幾歳の木葉吹溜りて。半は土に埋れたり。其邊に古來稀なる尉婆。稻束ねなどし居けるに近づきて。如何なる神を崇め置たるぞと問へば。答へて。宮の名はおかしの神と申し。諸神の中より選除かれたる神にて。おかしき神と言傳へたり。是より四五丁を過ぎて。田の中に小瓦葺の室あるべし。此神の御饌焚く所也。一歳に一度。此村として耕作の最華を備ふる。其日も定まらずと語る。聞きも及ばざる神名。身不才なれば。何れの書に出たるも識らず。實におかしき神名なれば。達人の教を聽かんと書留めぬ。

やき米を幾年かんで諸しらが

日比心に浮みしとは違ひて。西の宮は家居立續きて。蛭子の社殊に愛たかり。

三ツ柏庭の葉もいたいかん

六甲山は。常に難波より見遣りては。山中何處有。隴上多ニ白雲と。遙なる事に思ひしに。今日其麓を巡る。草は樵路に踏枯し。木は杣鉞にあせたり。山六七分に大きな石の鳥居ありて。目も高く眺めやる。此所の景色。山城や淀の渡りの舟を登るに。寶寺山崎の姿に思ひ寄せたり。

はげ山や鳴き力なき鳩の聲

蘆屋の里は人居疎也。此間にて因幡鳥取の太守。武江に打て通らせ給ふを見る。

武藏野の尾花に入るか大白熊

いはら住吉は。宮造尊く。斯る田舎にては。目覺むる程にこそ覺えつれ。

敷島の道につくば草の花

摩耶嶽聳を立て。登る事五十餘丁。時々木の間に洩る一塔は。層々落々として雲を銷るに似たり。杜甫慈恩寺の雁塔に登りし一詩を思ひ出で。

飛ぶ雁や上へ并びて塔やらん

生田の森は遙に興あり。湊川三四丁此方に坂本と云は。楠正成討死の所とこそ聞ゆれ。此頃新に墓石建ちて。田と思しき所を削り。石壇高く築きて。里人鉞を取り坊僧箒を携へて。芝を伏せ砂を蒔く。最結構也。如何なる方より。斯は有りけるぞと問ふに。更に言聞かせず。墓石も未だ打包みあれば。其銘も見えず。奇なる哉。正成命を延元の擾亂に没し。名を元祿の靜謐に著す。

はし鷹や跡も尋ぬる智仁勇

湊川を渡り。兵庫の津を出で。たゞび山。峭釣山。此邊同じ様なる奇峰。幾らも并びて。青帳錦屏の粧ひを爲せり。須磨へも早纜に成りて。鐵柵が峰。鐘懸松。間近う見ゆる。聞きしよりは險しく。古松幾重にも重りて。姿猶凄まじし。須磨の人家は。今も疎に。松の柱。竹編める垣。板の庇は山嵐に破れ。關守る影もなく。汐焼く業も見えず。邂逅釣垂るゝ泉郎の子の。まどをの衣。肌寒くこそ着なしたれ。

あら古や露に千鳥を須磨の躰

行平松磯に立ちて。月見の松山に添ふたり。波は雲井に續きたる様に覺えぬ。

幾かへり須磨の浦人わがための秋とはなしに月を見るらん

斯る所の姿を詠めるならん。年比の願ひも此所にこそと。浦に眺め山に望み。其處を問ひ彼處を尋ぬるに。

月なうて悲しかりけり松の風

仲の秋。下の六日の空なりけり。松風村雨が舊草とて。人の教へけるに。

小車は不便なる花のかつら哉

句二つ三つ言出るに。爰の姿あるかには想ひ取られざりけり。須磨寺と云は。道細くつきて。

尾花葛花の便りに添ふて遙に行くに。寺門斜也。取傳へたる寶物の昔を。さまざま乞出て見けるに。辨慶が筆とて。此花江南所無也の制札あり。年號は壽永三年二月二日。

松茸に制札はなし寺の入り

日は既に午の貝吹過ぐる頃に移れば。施物など調へて立去り。山を右にし海を左に沿ひて行けるに。

冷しさや吹出る風も一の谷

敦盛の石塔。

儂のばうく眉や花薄

仲哀天皇の廟は。思ひも掛けぬ所にこそ有れ。鹽屋の里過ぎて。其國播磨の境川。歩み苦しき高砂子哉。

柿かぶる身ぞ津の國を出離れて

海端に立ちて。暫く休みけるに。大和島根も手のゆくばかりに近く見遣りしに。波もなき夕霧も立たぬ空の。布を引きたる如く。幾重も白う物の重りたるを。何かはと人に問ひければ。蕎麥を蒔置きしにこそと云。此島などにて有るべきとは思ひも寄らで。

蕎麥の花大和島根のくもり哉

旅の涙とは土御門院の御製と。此眺めに恐入りて感情す。沖には鱸釣る舟やらん。秋風に遠く走るは。鵜の一階の餘波こそおもはるれ。又磯近く拷寄する網は。ゑいや聲に勇みて引蹙むるに。魚は波より高きまでに重り。頼尾あり。傾鱈ありて。幾千万と云ふ數を知らず。水を離れんとしては跳上り。潑瀾として舷を鳴らし。錦鱗銀梭を擲ちて。砂をかつき藻を翻へし。波に酔ひ聲に恐れ。水術を失ふ有様。目もあやに悲し。
はねる程哀れ也けり秋鯉

松原を續きに歩むに。日は、や海に隠れて。山の端も見えぬ明石の泊に入りぬ。先人磨の尊像を崇め置たる一字を尋ね登り。年月の望足りて。今此岡に詣でける事よと。後生の併心を凝らすに。感涙頻りなり。
ほのくと御粧ひや草の香
朝霧の高吟を。黄昏の空に寫して。左見右見立亘り。爰去りぬべき心地もなく暮深くなるに。沖の漁火は影赤う燃えて。行く方遠き友舟に聲打交すなど。遙に聞えて。覺束なくこそ思はるれ。此宵此空。月あらば何をか思ひ事にせん。人毎に月は須磨明石などいふに。葉月末の夜。秋の風打濕り。而も露時雨身に浸渡りて。星さへ疎く打闇みたり。斯ても住着くべき身ならねば。又尊像を遙拜し奉り。岡を下り宿を定めぬ。睡まで獨り明石瀉。鴈千鳥の聲遠く。夜の更

くる儘に風落ち雨歇まず。螢の小舟は苦吹返すらん。波の音そこともなく枕を揺れば。海の景色さぞと想ひやりぬ。
身の衾海のおもての夜寒哉
明れば廿七日。空晴れ雲ちぎれたり。須磨赤石の秋のあはれは。荒増にも眺果てたり。思ひ立つ折こそあれ。書寫山に詣で。序能くば。備前備中の案内も尋ねんと思ふ心起りて。赤石出る。昨日遙の道に倦みて。今日は猶草鞋重し。
明石が九一夜かぎりか朝霧歟
高師の芳吟を思ひ出て。
宗 因

明石が九一夜夜寒や朝寒や
嘉吉年中に。赤松滿祐軍を發して。都の猛勢を防ぎ支えたる蟹が坂と云は。明石を離れて一里には足らぬ處也。昔は山聳え立て。坂も急なりけるよし。今は嶮しくもなく平地に均し。少し山の形取残したる所に。高野道場とて寺造りあり。世換り年移りては。兵革奮怒の地も。菩提結縁の雨に潤ふ事。有難き時にこそ思へ。
閑伽呑みて秋の蛙のちから哉
田家所々に見渡し行くに。稻打赤らみ。穂くみつつみ餘るまでに賑ひ。木綿は時と吹白みて。賤

が解衣の翻るゝばかりに取はやし。秋の盛などのめき。農業暇なき有様に見ゆる。道より左に續いて。鷗居るなど詠みし藤江の浦也。徒に打過ぐべきにもあらで。細道をつたひに行て見れば。漁する業もなく。濱田の晩稻打靡き。刈しほの時を窺ひ。常は炮礮を作る事を手業とする也。其浦續きに二見の浦といふは。兼輔が但馬の湯へまかるとて。二見の浦と云所にてと書きし所也。

わさ鍋のいつ干ざらんや稻の露

案内もなき道を。此處彼處とさまよひ歩き。漸くに人居ある藪蔭に出たり。是こそ加古の渡りへの道筋と教へける。暫く其所に足を容れ。茶飲みなどしけるに。軒近き吳竹の中に。大きな五輪あり。彼はと問へば。和泉式部の塚なりと語る。夫に續きて少し下る所こそ折居坂と申す也。懃ごろに教へける。かゝる所に式部の廟あらむ事。いぶかしき事に思ひけるが。式部往昔書寫山に詣でし事。峯相記と云ふ物にて見たりしを思ひ出ける。もし斯る時。大悲の縁を結ばんとて建置きけるにや。

芙蓉の香苔のみづらに醜れけり

印南野と云は。加古のわたり迄の間を指していふとぞ。道行く人教へける。野中の清水も。彼方にこそと遙に見遣りて過ぎぬ。

るなみ野や笠の蠅追ふ秋の風

松原に稻を干したり鶴の聲

阿彌陀と云ふ在名は。最尊かりけり。我日比心に浮み忘れぬ一念を。

澁柿も頼みある身ぞ澤清水

節磨川を渡りて。姫路の町に入る。此處の高松氏空我は。度々浪速江に船さし入れて。俳契睦ましかりし故。彼家に尋ね行きけるに。思ひつきなき事なれば。斯る旅姿。何處の志しか。兎まれ角まれ。暫く此所に逗留せよなど云わたりて。俳談狂語を取交へたる中に。

何處へか月に馴れたる蘆の杖

螺螺鳴く夜を先づ二夜三夜

浪枕の冷むかりしに代りて。寝も安かりけるに。

秋風におどしひ昨日吹かれけり

明れば廿八日。空我を偕ふて書寫山に詣づる。當國の一宮伊和大明神に參る。書寫は城の西北に立ちて。麓まで一里には超えたり。登る事十八丁。半腹に攝待の小室を建てし。參詣の人の渴を扶く。

うそ寒や不斷ふすぼる釜の下

松茸の香をかる山の紅葉哉
山深く木々古く圍みて。最物寂たり。七堂伽藍の靈場。今も其形遺れり。毘首羯磨の造り安置したる如意輪の本堂に入て。敬禮誓首して念を留む。有難き哉。近曾頃さる舊記を閲する中に。此圓教寺の事見えたり。永延年中に。此山の樹頭に異鳥來囀曰。奈咸不厭山木草庭阿耨菩提乃花應發云々。性空是を和け見給ふに。

何もみな厭はぬ山の草木にはあのかほだいの花ぞ咲くべき

と云歌也けりと有りし。斯る不思議。高天の寺の事など思ひ合せ居けるが。斯く詣で來べき縁也けると。隨喜淺からず。寔に一乘圓頓の峯。雲は華童廻雪の袂を離へし。風は衆僧梵鼓の聲を出す様に思はれ。坐に無苦の世界に入るかと疑ふ。然れば大悲の應身。三十三所に立たせ給ふ廿七番也。

啄木鳥も札打つやうに聞えけり

山のなだれを見遣るに貝石とて有り。是は或時性空。山寒くなるまゝに都に便せまほしく。石座に立て貝を吹き給ふ。其聲都に傳へて。施檀より衣調め參らせたと語り留めぬ。

秋の風都に吹くか貝の聲

彼是と徘徊。日は浪に沈む。海原を見下して下向しぬ。

廿九日。頭痛み。瘧疾のやうに寒くなり打臥し居ぬ。四五日は其惱み快からず。藥など煎じ扱うて月を經ぬ。廣瀬氏水猿は。互に東武に在て膠漆の友たり。今は此所の太守に仕へて。武儀彌と堅し。一日彼宅に逍遙せられて。

弓の木の久しき柱のかつら哉

旅館空我亭へ。一夜彼是の俳士入來まして興行。

露草に染めて通らん古油單

重九の日は。飾磨津天満宮の祭禮とて。角力など有るを見に誘はれ。様々祭事のもてなしに逢ふて。

匂ふてふ菊にみがける今年米

露霜に老ぬ飾磨の稻雀

其日。津田の細江と云を尋ね見にけり。赤人が旅寐の浦隠れせし瀉も畑に翻かれ。五月雨頃の溼標は桔槔の棹に残る。此所に。詩かずして必ず青蓼の二葉に出るよりはや穂を顯すなり。

見ぬ人は津田の穂蓼を秋にせん

秋時雨今や田を守る小屋がくれ

一日。増位山と云に登る。藥師如來の堂あり。此山の眺望言語に絶たり。南を見晴して。眼界

空 我

空 我

才 磨 我

及ぶ所數十程。遠き山は指の如く並び。近き島は拳の様に立てり。往來の風波百千船。

秋日影眼花の行くか帆かけ船

手水井に没るか八日の月の破れ

空 我

此山の邊に並びて廣峯と云あり。吉備大臣此處に旅寐の時。靈夢ありて崇め置かれたるとて。牛頭天王の鎮社上久たり。今の洛陽祇園も。此處より移したりしと。所の神官いかめしく語りぬ。

葛の道都に似ぬをうらみかな

空 我

山菊はあらそふ色もなかりけり

曾根高砂の方を見残したるを。本意なき事に思ひ。空我と倡て行きける。残更曾根は。菅家筑紫へ遷らせ給ふ時。楫保の湊に船泊りまし〜て。此所に上らせ給ひ。小松を挿置かせ給ふに。今は其枝葉繁く偃して。恰も青天の垂るゝに等く。誤りては蒼江の涌出るかと思はるゝ。尊むべし。一株辱なくも。菅家以三信爲根たるならん。

かしこまる膝に松子ぞこぼれける

石の寶殿と云は。聞きふれ世に言囃す所なれば。今日の幸ありて立寄りける。何様其大なる事。人力の易くは及ぶべくも見えず。所謂區々に取傳へたり。前に生石子大明神とて社ありける。村の名も生石子と云。静窟と聞きしも此所の事にや。万葉第三生石村真人の歌。

チ、ナムチスクナホコナノ非マシケン。シヅノイハヤハイクヨヘヌラン

又或舊記を見侍りし中に。日向大明神は養老年中に。大きな石船に乗りて。播磨の國に飛來り。加古の湊に座しけると有りし。若し此時の石船などかとも思合せ侍る。今の石の寶殿も。加古の後の山寄なり。爰に言出づべき事に侍らねども。年頃傳へ聞き怪しみ思ひけるを。今正に見るまゝ書付侍る。惣じて播磨面の山並。多くは岩聳え立ちたり。石匠ども又山の腹に座し。或は巔に登り谷合に入て。水鉢を彫り臼を拵へ。塔石を造り。疊の四方したる石は。幾等も切出す所あり。廣峰に登りし時。白國の窟と云を見けり。其中にも石輿と名付けて。居置きたり。彼是いぶかしき事也。高砂は町並立續きて。繁華の粧ひ。尾上の鹿の鳴くべき秋とも見え。世に響きたる霜の松は。遙に枯失せて。取残す株さへもなく。曉の鐘ばかり淋しく動き止まり。只松生立ちて。風のみ昔の音を聞渡りける。

妹が手は尾上松露に荒れにけり

空 我

釣鐘のいぼの落ちたる松露哉

空 我

夕暮かけて立歸りけるに。阿武の松原こそ見ゆれ。

打むれて霧に這入るや夕鳥

空 我

又やあの霧から出でん朝鳥

空 我

斯く狂し以て來る程こそあれ。鳥も霧も見えずなりたり。
東坡は羈旅に瘦せて鼠の如しと泣く。余は草枕に醉ふて蚤の如くに飛ぶ。
旅人となりけるより新酒哉

いまだ蠅ある秋風の宿

月長し紙帳衾にもみかへて

筆持ちながら寝入りこそすれ

年の緒や金の袋を詰めつらん

めんどり羽にも重ねたる絹

落武者を認めまるる主人妻

夕立の來てせまき餅店

鉢松のこびたる形も哀れ也

居つけた人の見えぬ物寂

打向ふ膳に涙ぞこぼれける

約束をすてゝ縁むすぶらむ

世間をしやれや鏡のうら面

仙空才

磨櫻我磨櫻我磨櫻我磨櫻我磨

萩や薄に名をかくし住

感狀を引さくばかりきりくす

うらかへる身を月も照るらん

邪な宗旨の門を華に出で

火かどあやまる三昧の木瓜

朝雉子何に追はれてどがり聲

女房に髪を結へと居直り

みぞのなき針を怨の捨所

鬮の溝のへだて勝ちなる

お流れと來る土器に手をつきて

商ひしても猿樂の孫

三笠山代々の餅りに古う成り

鍛冶番匠も素袍ぬきかけ

小屏風は色紙交りに張ちらし

宵のうつりを覗く寝すがた

磨櫻我磨櫻我磨櫻我磨櫻我磨

月の闇鬼となりたる物妬み

釘ふみ立つる燈籠の影

秋風に浴の背中ながし合ひ

一際見ゆる關取の體

かたくまに乘てぞ花は折らせける

汐干の舟をあがる松ばら

鶏はどこで鳴くらん春日影

煙霞に紛れ入る空

或日赤松が籠居せし。白旗の古城を見んとて。攀登りける。俳勇の誰彼馳來り。草を敷き打圓居て。

あの窪に角とぐ鹿や籠りけん

七里ながれて秋に成る鮎

槓支梁朝月かけて伐出すに

嵐にもるゝ貝靜かなり

鷹それて一先君にかくすらん

才 磨 思 可 鷗

磨 昔 計 嘯 昔

櫻 我 磨 櫻 我 磨 櫻 我

雪のあしたか大瓶を酌む

濱の賀は鹽吹く波にもりいれて

夕日をのぞく家のならはし

遊雲堂の主人。面壁の達磨に讚せよと。望まれ書付く。

壁土を喰ふに味ありきりくす

余が逗留も廿日に近き程なれば。又是より西の秋に打入らんと思ふ。暫くの間聞きふれたる

發句ども。今の餘波の後の因みに書付くる事。次第を分たず。(校者曰。俳諧の句最多し。道の

記の上にあづからねば畧す)

今日は長月十八日。明日こそ爰立ちぬべく言へば。主人猶留めて。室の泊を見遣すべきやと諫

むるに。是より下向の便宜くば。立寄らなんものをと云て止みぬ。

室見ぬもたのみ有りけり青楓

所々にて心覺にしける反古。一つに取輯めて。孤燈燃客夢。寒杼搗郷愁。於ニ于旅館ニ費ニ麥光。

殘 賀

面白や千秋樂をいとま乞

于時歳玄默澗灘律中無射居待之夜

才 磨 記

椎の葉終

（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 山, 道, 霧, 馬, 餅, 津, 山, 小夜, 道役, 紅葉, 小夜, 山, 秋葉）

甲戌紀行

寶井其角

箱根にて。

杉の上に馬ぞ見え来る村楨もみぢ

秋の空尾上の杉をはなれたりといふ吟。こゝにもかなふべし。三島にて旅中佳節を。

門酒かどさけや馬屋のわきに菊を折る

原回頭。

朝霧あさぎりや空飛ぶ夢を不二嵐ふじあらし

うつ山。

うら枯がれや馬も餅くふ宇津の山

小夜中山。

道役みちやくに紅葉はくなり小夜の山

秋葉。

合羽着て鹿にすがるや秋葉道
かし鳥に杖を投げたるふもと哉
二股川。

打つ櫂に鱸はねたり淵の色
十三夜。濱松にて。いづれも故郷を語るに。

後の月松やさながら江戸の庭
熱田奉幣。芭蕉翁甲子の紀行には。社大に破れ。築地は倒れ草村にかくる。かしこに繩を張り
て小社の跡をみるし。爰に石をすえてその神と名のる。蓬しのふ心のまゝに生たるぞ。目出た
きよりも心どまりて。と書かれたり。興廢時あり。甲戌の今は造營あらたに又めでたし。

更くと禰宜の軒や杉の月
雲津川にて。

花すゝき祭主の輿をおくりけり
外宮。近く拜まれたまへば。

日は晴れて古殿はきりの鏡かな
内宮。浮屠の屬にたゝへて心へだちたる。五十鈴川より遙に拜す。

寶共其貞

身の秋や赤子もまるる神路山
廿日。御神樂謹上再拜。

太々や小判ならべて菊の花
廿一日。二見。朝熊。

岩の上に神風さむし花すゝき
紅葉して朝熊の柘と言はれけり

宮川の上に酒送りせらるゝに。此花を肴にめでとありければ。
重箱に花なきときの野菊かな

廿三日。伊勢より長谷路へ出づる田丸越して。
山畑の芋ほるあとに臥猪かな

川苜の香に流るゝや谷の水
莫レ噴野店無ニ肴核。薄酒堪レ沽豆莢肥ど。周南峰が句を感ず。

足あぶる亭主にきけば新酒かな
初瀬。

紅葉見る公家の子たちぞ初瀬山

大和柿とて主よりもてなす。

はつせ女に柿の澁さを忍びけり

三輪。

むら時雨三わの近道たづねたり

僧ワキの去づかに向ふ薄かな

春日。四所の宮人達。夜毎にどのみして。戌の刻を限りとして侍るなり。

今幾日秋の夜詰をかすが山

二月堂に七日斷食の行者あり。屏風引廻らして無一人聲。

日の目見ぬ紙帳もてらす紅葉かな

當麻寺。奥院にとまりて。

小夜しぐれ人を身にする山居哉

當院に靈寶什物さまざまあり。中にも小松殿。法然上人へまゐらせられし松陰の硯あり。箱の上

上に馬蹄と書て野馬を畫けり。硯の形が蹄に似たるゆゑなるべし。

松陰のすゝりに息をしぐれ哉

廿九日。吉野の山踏す。白雲峰に重り。煙雨谷を埋みて。山賤の家處々に小く。西に木を伐る

音東にひいき。院々の鐘の聲。心の底にこたふ。寒雲繡盤石といふ句に思ひよせて。

高取の城のさむさに吉野やま

世尊寺。今宵たれすふく風とよまれたる所といふに。月ならばなど思ひやられ。

頼政の月見どころや九月盡

西河の瀧にて。

三尺の身をにじかうの時雨かな

十月二日。高野山。

卵塔の鳥居やげにも神無月

紀の川幾瀬もあり。三日月の流るゝを。

たつか弓矢をつく船や三日の月

玉津島にまゐりて。

御留守居に申し置くなり和歌の浦

歸望。

和歌はみつふけるの月を夜道かな

ふけるの浦に出たれば大綱引く。馬夫駕籠のもの。従者まじりに走りつきて。力を添へてとよ

みけるに。
鰯ひとつ捉へかねたる網引哉
住吉奉納。

蘆の葉を手より流すや冬の海

十月十一日。芭蕉翁難波に逗留のよし聞えければ。人々にもれて彼旅宅にたづねまゐるゆゑ。吟行半ばに止む

甲戌紀行終

富士一覽記

梅月堂宣阿

應無所住而生其心といへれば。たとひ市朝の間に徘徊せんも。何かはとは思へど。それも上根聖者の上にもこそあらめ。かゝる下愚鈍根の身には。見る物きく物につけて。心の塵の立るやむ時なければ。かりそめにだに旅立て。天を衾にし地を席として。雲水に心を遊ばしめ。行どまるを宿と定めて。桑下にも三宿せざるぞ。修行の功德ならむ。正に今四海一家の世なれば。舟車のいたらん所。尋ねゆかんに難き時かは。まして近きあたりをやと思ふに。本より東の方に心ざす事もあり。空の景色も清く和く名におひて。風雨こゝろにかなふ折なれば。昨日今日にし國より歸り上りし。つかれをだに息みもあへず。麻衣のやつれたるを。そのまゝの旅よそひにて。思ひたつ。青葉まじりの花さへ散はてし。賀茂の祭もや、近付頃ほひ。秋野道場の嚴阿法師。井上隨入禪門をいざなひて。九重の都を立出るに。大比叡や小比叡の山も。なほ明ぼの、雲はれやらす。賀茂川の水の面や、しらみ。瀬々の聲も晴をむかへたり。白川をわたるとて。先思ひつゝけぬ。

都いでしまづこえ行くか東路の關の名に立つ白河の浪
粟田山にかゝり。松坂にて。

出てこし都もおなし旅衣かへるを誰かまつさかの山
逢坂山の走井。いつの頃よりか流れいさ清くかきはらひ。岩のたゞすまひ。松の木立など。い
どやうありて見ゆ。

花の陰青葉になりぬ折ふしの移るも早き走井の水
關の明神によみて奉る歌。

みしめなは神もうけひけ立歸りまた逢坂と祈る心を

大津に打出るほど。湖水のうら／＼えもいはぬ風色は。受三方之灌漑。爲百川之巨都。とい
ひけん。大湖五百里のいきほひをなしければ。氣蒸雲夢澤。波撼岳陽城と嘯きて。松本に至る
に。浦人ども。あのがし／＼さへつりかはして舟よそひし。これ乗り給へといふに。風も眞帆な
り。時のまにこそとすむ人もあれば。一人は勢田の橋にと争ひて。いかいばかりといふに。
もとより捨る身のならひ。まひて存亡の二つを選ぶべきにあらねど。張猛が。船に乗れば危
し。橋につけば安しといへる前言をや。追待らんといへば。皆笑ひて。膳所の方にゆく。粟津
野の松原をすぎ。勢田にいたりて。大友皇子のむかしを思ひ。藤太秀郷が跡を訪ふ。この頃作

り改められし長橋をわたるとて。

志るや人あらため作る勢田の橋渡るも安き御代の恵を

野路の玉川。今も細きながれ絶やらず。

萩が枝の若葉の露も秋の色にかねて涼しき野路の玉川

草津の野に分入るほど。草花咲きつゞきて面白し。

かりよらんさゆり撫子咲く花の草津の野への露の舎りを

まがりの村を過るに。住る人の心直からぬにや。吳隱之が貪泉の詩に。古人云此水。一飲懷二千
金。試使夷齊飲。終當不_レ易_レ心。といへるも理りなれど。地に獄屋をゑがけば。人入る事をきら
ふたぐひ。又勝母のさどに車をかへし／＼むかしを思へば。今此里の名を聞くも。いとうたてし
や。石部やま。小松ちひそひて。陰涼しく見ゆ。

契るとも逢ひみん事やかたからん石部の山の松の千年は

まだ日は暮れざれども。うらふれぬとて。今夜はこゝにやどりぬ。夕月のおかしきにむかひて。
あの一採題して。旅宿時鳥を。

ともなへよ草の枕を夕ぐれにきけば都の山郭公

初夜うち過るほど。あやしきをのこどもの。入來りて相舎りまけるに。せはしきやどりなれば。

隔つるほどなくて。物いひさわぐ。いとらうがはし。

旅のやはあられずあられぬ人にさへ心の外の枕ならべて

十二日。よべよりふる雨なほ晴やらず。かねてかゝる折は。道もゆきたらし。やどりも出むと思ひまうけたれば。同じやどりに有て出たらず。

晴ぬへき空まつ程も長閑しな人やりならぬ旅の舎りは

十三日。石部を出て。田川といふ所の茶店に。藤花いと多く咲けるを見て。

道のべに匂へる藤の花かつらはひまつはれて誰とむらん

横田川。雨の名残に水たかければ。舟にて渡りぬ。

年へたる松もきしぬに横田川枝こす浪にそふみどり哉

土山を過ぎて。鈴鹿山をこゆるに。峰巒嵯峨として。雲をふみ抄を渡るありさま。蜀の九折坂。奏の百二重と言はんに遠からむ。馬子どもの。馬つかうまつらんとて。またひ來るまゝ。かゝるさかしき道を。馬にやは乗る。王尊が忠臣といひし道にあらねば。王陽が孝子の心をあそれ思ひて。かちよりこそゆかめといへば。何事にかとて。腹たししげに。つぶくといひて去りぬるもおかし。此所齋宮群行ありし昔の。頓宮のあとはいづくにや。通良卿の。今日はとまらんとよみ給ひしも。ゆかしくこそとて。人に問へど。おろく知れるだになし。

思ふにも幾世になりぬ鈴鹿山跡だにわかぬ假の宮居は
いつの世よりか。此の谷そこの道をかへて。今は八十瀬もわたらずしてゆく。

鈴鹿山ふかき車や八十瀬河わたらぬ袖も浪はかくらん
雨のふり出たれば。關といふ所にやどりぬ。

こへやらでやどる鈴鹿の山陰は降くる雨や關のせき守

十四日。この曉あらしはげしくて。いと寒かりけるに。あるむをやとちこしけれど。いぎたな
くて音もせず。辛うじてちき出しが。よろづになさけなかりければ。

人心あらし嵐に鈴鹿山ふりすて行く名残さへなき

鶏聲茅店につたへ。殘星北にむかひて。明方ちかきころ。東の方より松どもとぼしつれ。のゝ
しり來るは。京師に上る城頭守衛の武士になん。龜山にいたりて。

松に見ん千歳のみかは萬代の陰をもたのむ龜山の里

まやう野石薬師などを過ぎて。つゑつきの里にて。

つかるゝは我のみならむ旅の道さきだつ人も杖つきの里

日永のさどにて。

行やらで猶やすらへる旅人は日永の里の名や頼むらん

四日市を経て桑名につくほど。伊勢尾張の海づらまぢかく見えて。在五中將の。うら山しくも
歸ると詠ぜし浦波を見るに。げに過行く方の戀しくて。桑名より船に乗りけるに。風いと荒く
かた帆ひきたれば。横浪袖に吹きこし。船こそりて酔ぬ。三人は一つ所に頭さしよせ居たる
が。いざ歌よまんとて。題かくべきやうもなければ。鬪をさぐりて定めたり。浦郭公をえて。

あま衣いくよ重ねて時鳥まつにあかしの恨みやまる。

暮行くまゝ。月さし出て白浪に映じたる。いとあかし。風はいやましに力をそへて。帆むしろ
も三つが一つにおろして走りゆく程。寒き事。たへがたし。

夕月よさしてこぎ行くあつた瀉こは名にも似ず寒き嵐か

宵過るころ熱田につきて。野崎圓翁のがり尋ねてやどりぬ。年ごろ下りなん事を催されしか
ば。心まうけ此彼いとねもごろ也。抑此翁は。深く思ひ高く譽れる心ざし。誠に市中の佳遁に
して。閻閻の内にありと雖も。念慮を巖栖谷飲にはせたり。さるから住なせる庭にも。岩ほを
たゝみ水草をうゑたる也。白雲のおこる山陰。魚鳥に伴ふ野水の趣をなして。亭を蝸と號せり。
年久しく和歌の道に思ひをよせ。わきて今俗にもてあそぶ和歌。風儀の頽廢せる事をなげき。
もとより正道の有る方に心ざして。けいこの功をつめり。いと風雅のうばそくになん。
十五日。同じ舎にあり。浄清寺の静心とふらへり。

十六日。正覺寺矩範和尚の清招によりて會有り。兼日古寺郭公。當座夏草露。寄舟戀。

なれもその花をすゝめし類ひとやみ山の寺になく郭公

秋を待つ露もやわきて萩すゝきひとつ夏の草の茂みに

白波のかけてもまらむ逢ふ事はかたわれ舟の浮きしづむ身を

十七日。雨ふりぬ。矩範和尚靜心來訪せらる。當座の會あり。野時鳥。澗底古松。

さぞな世のさが野とやしる聞くたびに鳴く音恨むる山郭公

いつの世の岡べの小松己れのみかはらぬ谷の深き縁は

暮つがた熱田の宮にまうでぬ。此御神はかけまくもかしこき。三十一文字の遠きみなもとなれ
ば。かりにもこの道に志をよせん人。あゆみをはこばざらめや。八劍の宮と聞ゆるは。日本武
尊のをさめ給ひし。草薙の劍におはしますとなん。

迹たるし神の心のあつたがた爰も八雲の道はたへせず

十八日。名古屋に東てる大神の御祭。昨日その日なりしかど。雨にさへられて。けふなん行はる
るを。あるじの翁いざと誘はれけるに。かねてこゝかしこの寺社などにも。詣でん心ざしあれ
ば。夜をこめて行いたりぬ。祭のさま。まことに目もあやに。心言葉も及び難くなん。引つら
なれる山は。七寶の光をかゝやかし。ねり出る人のさうぞくは。三國のすがたをまじふ。春の

林秋の野の草木も。花を一つ場に匂はしむるは。生る御佛の境に入るかと疑はれ。神仙の丘に
來るかど怪しまる。或はあら海のいかれる魚の。はたをそばだて、悠揚たる。又は蓬萊の山の
あやしき鳥の。身をちどらしめて蹠蹠たるなど。總ていひつゞけば。虚言する罪をぞ受くべき。
それより歸るさに。野村氏の許に立より。とばかり休らひ歸らんとする期にいたりて。あるじ
此幽水軒のめいほくなるべし。あやしき垣ねの内。見所なき山の作りざまながら。あのく池
の心を水くきにうつして給ひなん。たゞに歸り給は。松の思はんこともと。あながちに言は
れて。とみにとり出るうた。

そなれ立つ岩根の松の千世の陰池の鏡に移してもみん

十九日。昨日より三州刈谷の人。大岡了純來りてむかへ。ものせらるゝに伴ひて出づ。空こゝ
ろよく晴れたり。山崎を過ぎて鳴海にかゝるに。むかしの干潟と言ひしは。みな塘つきわたさ
れて。東海に塵を揚ぐる世となりぬ。

思へ人世は皆かくぞなるみ瀉みるめかはれる小田の若苗

なるみ寺といへるは。今の瑞仙寺なりといへり。さて大濱の茶屋を通り。捷徑をへて刈谷に至
り。了純の宅にやどりぬ。此翁もどより富さかへけるが。寶財どもは皆あまたの子どもに分ち
與へ。みづからは佛の道に身をなげうち。朝夕に後世のいとなみたゆむ事なく。法師まさりま

たる清信男になんありける。そのうへ和歌は狂言綺語に似たりと雖も。人の心の正しきいろを。
よろづの言のはに顯しぬれば。是柳のみどりに花の紅なる。即ち諸法實相のことわりをのぶる
の道也。さるから此道をまねぶ時は。佛の一切種智の深きによぢ上るべき。道種智をきはむる也
とて。人をもすゝめ。みづからの切蹉年月をつめり。夜に入りしかば。十念寺の住侶了來り
謁せられぬ。當座の會有り。山殘花。待空戀。

名にたてる花園山のかひもあれや梢あまたに残る櫻は

待わびて返す衣のうらみあれや夢さへ絶て明る此よは

二十日。池鯉鮒に赴き。樋口正次の宿に暫し休らひて。八橋にいたる。此所今は蛛手に渡せし
あども。そこはかどなく。圪の四五間ばかりなる。里人の往復をたよりして。何のいたり深き
くまはなけれど。たゞはるくど。野らのおもて見渡したるほどなん。あやしきこと所に似ず。
川の流れば北より南へ行めぐりて。水縁に砂白く。川ぞひ柳のおきふすも涼しげなり。

遠く來て渡るも安き八橋や七つの道の治まれる世に

八橋山無量寺といへるは。中古に造れると見えたり。八橋のあたりの里とよめる所の。小松
生たる岡山にありて。澤邊よりは。東北七八町許もや隔たるべき。此寺に入てかかれいひ食ひけ
るに。池にかきつばたをうゑたるが。盛りなれば。折からうれしくて。ながめつゝ思へば。此

花澤べにこそあるべきにと。かつは情なくも見ゆ。

八橋の澤べ隔てゝさくかたは思はぬ寺のかきつばたかな
花の瀧はいづこなりけん。知れる人もなし。

くり返し春の色みん咲く花の名にながれたる瀧の白糸

そこを立さらんとするに。靜心法師圓翁は。こゝより歸られぬ。了純を道知れる人にて。それより岡崎のかたにゆく。志かすがのわたりは。矢矧川の橋より七八町水上といへるは。昔の往還の道なるべし。其むかし能因法師の。思ふ人有るとなけれど故郷は志かすがにこそ戀しかりけれ。とよめりしを吟むて。まことに情有りける法師かなとぞ覺ゆめる。そもくふる里の忘れ難きならひは。いにしへ今。さかしあろかのけぢめなく。白雲の遠き望みに母をこひ。月に向ひて籠の内の鳥を放ち。あるは大伴のみつの濱松待戀ひぬらんとながめ。うらやましくも歸る浪哉とかちし類ひ。時鳥の歸るに志かすがと血の涙をそそぎ。狐のつかに枕するを思へば。鳥獸すら志か也。いはんや人は萬物の靈ならんをや。本を忘れぬ心ざし。あになからめや。

うき世とて出こし身さへ志かすがに戀こそ渡れ故郷の空

衣の里といへるも。同じ川上なる村墨山の麓にありて。栖ども多く賑へる所となん。
かりよらんやつれし旅の麻の袖衣の里は道とほくとも

岡崎につきぬ。了純のうまご太田彦右衛門の館にあり。

二十一日。岡崎を朝立て藤川を過ぎ。山中といふ所を行くに。此法藏寺の上なる山を。二村山といへり。さるから此寺の山號に用ふといへり。小堀遠州道の記をみしにも。法藏寺の上とあり。然れど阿佛の十六夜日記には。熱田鳴海の歌をかくれて次に。二村山をこえてゆくに。山も野もいと遠くて日くれぬ。はるくくと二村山を行過ぎて猶未たどる野邊の夕闇。八橋にまらんといふ。暗きに橋も見えずなりぬ。さゝがにのくもであやふき入はしを夕暮かけて渡りぬる哉。又世に長明海道記といへるは。作者はたしかならず覺ゆれど。記する所をとりて考ふるに。鳴海の歌に。故郷は日へて遠くなるみ瀉急ぐ潮ぢの道ぞ過ぎうき。やがて此夜のうちに二村山にかゝりて。山中など越ける程に。ひんがしの方やうく白みて。海のおもて遙かにあらはれ渡れり。波も空も一つにて。山路に續きたるやうに見ゆ。玉くしげ二村山のほくくと明行く末は波路也けり。ゆきくして三河の國八橋のわたりを見れば云々。この二の書の如きは。鳴海と八橋の間にありと見ゆ。又永享四年九月。堯孝法印富士紀行の面には。大岩の歌をあるされて。次に二村山を越侍るとて。けふこゆる二村山のむら紅葉まだ色薄し歸るさに見ん。飛鳥井雅康卿明應八年關東紀行に。六月一日今橋の里を立侍るに。二村山の麓をどほりけるに。くれはどりあやに戀しく。とよめりし事など戀しく思出て。遅くとも植おく苗も二むらに山

の名うつす小田の面かな。と侍るを思へば。大岩は吉田の東にあり。今橋も二川につゞけり。いづれか是ならんとも知らず。

玉くしげ二村山もみつがきの久しき世にやうつり行く覽

長澤赤坂を過ぎ。ぶゆの東よりほん坂へゆく道あり。昔のかいどうにて。さきは三河遠江のさかひ。高師山を越て。橋本へ出るとなん。惣じて昔の道は。十六夜日記にも見ゆるやうに。鳴海より八橋へかゝりて。今の道より北の方を通り。此ほん坂道に續けるとなん。吉田を経て大岩山のふもとをとほり。二川にて雨ふり出しかば。こゝに宿りぬ。

玉手箱あくろぞ遅き二川の身を置くばかりせばき舎りは
終夜雨志のつくばかり降りぬ。

二十二日。空のけしき猶晴れずといへど。白菅まで出立つ。猿が馬場といふ所にて。

旅人に聲な聞かせそさるがばいさらでも露にまぼる袂を
此所に柏餅とて。柏の葉にもりてあきなふを。たうべもあへず腹の痛みければ。

さるがばいにたつやはらわた柏木のはもりの餅の神のたゝりか
鹽見坂に上りて見おろすに。遠江の海洋々浩々として。洪波天にひたしけ。雲をかぎりに渺茫

たるは。大鵬も渡らん事をあやふみなん。松の木の間より見渡しつゝ。白菅まで來たるに。浦

人ども雲の如くにおこりつらなり。足をそらにて濱の方へ走り出るを。なそかうは立さわぐと問へば。より船の侍るなりといふ。その家のまりへなる細道を。傳ひ行て見るに。さきの坂の上にて見し。片帆かけたる舟の。此磯近く寄り來る也けり。汀に近くなるまゝに。皆はし舟にどり乗て岸に向ふ。あるは浪にたゞよはされて。浮ぬ沈みぬ危き命助かりぬるを見ては。誠に心きも消るやうに覺えて。杜工部が。丹砂同隕石。翠羽共沉舟。篙工幸不溺。俄頃逐輕鷗。といへる覆舟の句を。誦しつゝ見るがうちに。やがて沖より。白浪連れる山の如くに寄せ來て。此大舟を右にゆすり左に傾けて。とかくする程に。垣といふ物早くわれ離れけるまゝ。つめる材木ども皆海に入り。風に吹かれて濱べにたゆたひ寄るを。浦人どもかつぎあげ引きよせなど。相きそひ運びゆくさま。螻蟻の聚散するに似たり。左傳にも災を幸とするは不仁也と記せり。兵の偽道なるも。不加喪不困凶と戒めたるは。司馬法に見えたり。されば窮鳥來りて懷に入るをば。獵夫の心なきすら是を憐む。いはんや同じく人として。その患ひをすくひ助くべき事をば思はず。却てこれを幸ひとして。財を奪ひとり身のうるほひとするをや。獸の相はむにいくらもまさらずぞ覺ゆる。あゝ此ともがら。未來世には業鏡火珠の影さり所なく。牛頭馬頭に呵責せられ。戴高山履巨海の苦しみをうけ。今ぬすみとる竹木どもは。忽ち兵刃槍稍と成て。身を破り骨を碎かれなんこそあはれなれ。水よく舟を浮べ水よく舟を覆すといへる法

言。げに左也けりと思ふにも。我等が明暮になすわざ。喜び悲しび往かふほども。またこれ風波の間にたゞよふものを。人の上へのみ思ふこそ愚かなれ。

ぬしや誰いざあらずげによる舟の碎けて心いかにくるしき
白菅の浦浪あらくわれ舟の我さへよそに身を去ぼりつゝ

此日は終日曇り晴れやらず。不二山もいづこなるらむ。心の外に隔たりぬれば。白菅の浦に舎りして。はれなん時をえて遠望せんとて。蟹の磯屋に身をよせて待つほどに。浦風いよゝ烈しく。浪たゝ爰許に響きて。天の原ふみとらるかす鳴神の音に異ならず。曉がた時鳥のほのかに鳴きわたるを聞て。

郭公なき行く方もあらずげの浪のまぎれのよはの一聲

二十三日。よべよりふりたる雨。曉近くなり行くまゝ。月の光さうじの紙よりすきたる。いと嬉しくて。朝ぼらけの晴れたる程に。富士の高ね望みてん。日たけなば又曇りもぞするどて。また夜をこめて。鹽見坂に上りて見るに。空心よく晴れて。良の方に物にも似ず半天にさし出たり。天台の四方八千丈も麓の雲に埋もれ。すみの山も肩をや比すらん。諸峯羅列似兒孫。とも是をぞいふべき。すべて此山の美景。前賢舊哲の錦心繡口に述べられたれば。かたくななる言ひ出ば。玉に交れるさゝれ。花のほとりのみ山木ならんと思ひながら。志のゆく所をとなへて。

浅間の神明に手向るならし。

山々はまだ明ぬよの雲の上に白きをみれば雪の不二のね

氷雪成堆千萬丈。當頭深洞住仙妃。負天肩背雲烟外。疑是白鵬息未飛。

此旅や此山見んの催しなれば。麓までと思ひまうけしに。伴ひける中に。さはる事出で來たりければ。せん方なくて。樂をば極むべからずと言ひやり。名残つきずながら是れより歸りぬ。こゝにも見ゆ。かしこにもなど言ふほどに。二川のあたりまでも。人を追くるやうに。山の面なほ明らかに見ゆ。吉田の西の野までも。いたゞきは見ゆめり。此日岡崎につきて。了純の聲なる寺部孫兵衛の所にあり。暮ぬれば主人短冊もて出て歌をこふ。探題して柳風を。

春きては松に音せぬ風もまづ柳が枝に見えて長閑き

二十四日。けふは池鯉鮒までと心ざしゝかば。日たけて此館を出て。神谷直家ぬしの所に。かりそめのやうにて立寄り。急ぎ歸らんとするに。栗田玄察鈴木三折杉田光晨來られて相見しぬ。やがて題の事申されしかば。やむ事をえず題を出して詠せる歌。採早苗。

露深み取る手になびく若苗に秋のたのみやかけて待つらん
こゝを出て。暮過るほどちりふに歸る。正次亭にあり。

二十五日。あるじ正次出て。けふは雨も降ぬ。心のどかにおはしませとて。まなぐの果物な

ど。心ざし深き谷の底まで掘出して。いとなみ聞え給ふ。晝間のほど浴室に入ぬ。やがて囃の
亂舞あり。笛鼓つかうまつれる人々。名古屋の方より招き迎へられたれば。物の音など都に聞
きしにをさく劣らず。正次の長子それがし。きひはなるが小鼓を搦ける。いとあいきやうあ
りて。らうくし。暮ぬれば會あり。卯花邊家。

あかずみん邊の垣に咲そひてまじる色なき宿の卯花

二十六日。此所の市はその名高きをとて。行て見るに。近き國遠き邑より。市女あき人ども來
つどひ。假屋の軒を并べて。酒は平原より求め。茶は翟山より集め。漢宮の紈素。鄴殿の鳳御。
みちのくの忍ぶ摺。つくしの綿を蓄へかざれり。此東なる野らには。甲斐信濃の牧の荒駒を引
つらね。渥涯の種大宛の産など街ひのしり。侏儒俳優傀儡師の類ひまで集まり來りたれば。
紅の塵空にみちて素衣も緇となれる。長安の街に異ならず。ひるつ方より。ちりふを出て刈
谷にゆく。了純の令子之義。今朝より來て迎へられたりけるが。つげて曰く。刈谷の東の野に。
わづかなる別業いとなみ侍らんとす。其地に景色の品をさだめて。諸先生の詩歌こひ申さん。
多く行廻る所にも侍らず。立より給ひなんやとて。導かるまゝ。まりにたちて行て見るに。
其地の形象。東に吉良山横折ふせり。西にちた山あり。南に入海遠く見えて。鹽屋の烟夕日を
ふくみ。北に花園山の末に。信濃の山々雲を帯て重なりぬ。日朗らかに天晴たる時は。士望の

雪手にとるばかり也となん。けふは了純の菟裘にあり。

二十七日。之義亭にて會あり。禁中花。

風もさぞよきて吹くらん百敷や近きまもりの花の梢は

夕かけて熱田に歸りなんとす。鳴海より日暮ぬ。笠寺を過るとて。

たれこゝに草の枕を笠寺の木がくれ深く暮るゝのべ哉

夜半近づく頃。熱田につきて圓翁の亭にふしぬ。

二十八日。圓翁の亭に在り。浦近く出て吟行するに。水遠く山長き眺望。張志和李將軍も筆を

投つべし。白鳥山法持寺に詣づ。むかし日本武尊の御魂白鳥と成て。升天し給ひし所となん。

立よれば白鳥山も此頃は青葉になれるかけの涼しさ

二十九日。同じ所にあり。會あり。矩範勝敏末延正敬等列座せらる。兼日浦夏月。當座首夏風。

空やいつ秋になるみの浦風も夏なき浪の月の涼しさ

なれしその春は昨日の花の香を尋ねて風も袖に吹らん

晦日。快晴なり。若原勝敏の亭に招かれて會あり。竹不改色。當座寢覺時鳥。

此君のなほき心の末もみん千尋あるかけのよゝのみどりに

さめて後面影またふ一聲もおなじ夢路の時鳥かな

五月朔日。圓翁の亭にあり。江崎末延來れり。もてなすべき物など齎しめて。會もよほされぬ。是はかかるべき事ある頃なればなるべし。冬戀をさぐりて。

契りこそあだし小篠の玉壺かけずはぬれん袖の上かは

二日。雨ふりぬ。けふは立歸るべき心なりしかど。あるじ頼に留められしかば。いなみがたくて何くれの物語しける。いざ當國に名ある所々を題にて。歌よむべしとて。熱田瀨。呼續濱。星崎。松風里。阿波手森。年魚市方。内海浦。

浪の上に残る夕日のあつた瀉夏をわする、貝や拾はん

たち歸る家路や迷ふ夕やみに友呼びつぎの濱のあま入

時間えていつほし崎のあま衣ふるや浪ちの五月雨の頃

誰きして心すむらん月影も更行くよはのまつ風のさど

ふかみどり染ける露をみても思ふ秋にあはでの杜の紅葉

あゆち瀉鹽干にけりな袖はへてあさりに出るちたの浦人

いかにせん浦吹く風のだまの窓雨もうつみの波のまくらは

萬葉集仙覺抄に。あゆちがたちたの浦を。紀州と記されたれども。彼國に此名所なし。近き比紀州の太守より。兒玉氏其外におほせて。國中名勝の地ども點檢せしめ給ひしかども。此名あ

る所なしと。兒玉氏の物語にて侍りし。

三日。蝸亭をたちて歸るに。さやの方に廻りなんとて。二里ばかり行きしに。万番と云川を渡

り。かもりなど云所を過ぎて。津島の宮に詣でぬ。こしも亦すさのをの神をいはへり。それよ

り堤づたひをさやに行至りて。是より舟にて桑名につく。四日市にて日暮ぬれば宿りぬ。

四日。此やどりを出て。追分より神戸に越くに。高岡川をわたる。鈴鹿川のながれなり。玉垣

の里にて。

荒果て、内外もわかぬ夏草の露ぞ名におふ玉垣の里

若松原を過て白子の浦に出るに。伊勢の海はるくと見渡されて。天の原なる海士の釣舟とい

へる。僧正行意の口ずさみも目のまへ也。

いせ島や夕鹽かけてよせかへる波も白子の浦風ぞ吹く

先づ年よめりしわが詩歌をさへ思ひ出づめり。

鴈がねも馴れて住むらしいせの海や常世の浪も清き渚に

浩蕩勢州海。潮聲百里聞。舟船如粟散。島嶼似碁分。影盡遙天雁。黛明萬岳雲。在中未

歸恨。歌詠自冠群。

上野を通り過て津の町に入りぬれば。こゝより筏輿岐にみち。馬足の塵眼をけがせり。誠に太

神宮の聖徳いちじるきが故也けらし。雨ふりぬれば此町に宿しぬ。昔慶長の兵革に。富田信濃守こゝに守城せしを。西國の猛將銳卒是を圍んで攻うちし時。予が祖父香川景家。其父春繼。搦手より一番に堀の手につき。助六景家十六歳先途の功をたて。又左衛門春繼も一陣の士卒をひきゐて。相繼ぎて攻入りし事を思ひ出るに。いづこの方なりけんと思ひ見まほしく。且なつかしくおぼえて。

武士のむかしおぼへて今もその戀しき方やあの、松原

五日。雲は猶はれねど。雨間の空なれば立出たりしに。やがて又ふり出ぬ。けふは急ぐべき事ありければ。やどりも取らでゆく。泪川のほとりにて。

なみだ川水かさ増りぬうき旅の身を志る雨の此頃の空。

宮川にて盪漱し。六根清淨の祓など稱へぬ。山田原打過て妙見町といふ所とほる頃。圓翁かねて約せし事なれば。追ひつき來あひて。日も暮ぬとて先づ此所にやどりぬ。

六日。古市大林寺の前なる助真庵に入て。つかれを息ふ。ひるつ方嚴阿誘ひて外宮に詣でし。頼むぞよ五百枝の杉の事志げき人の願ひを豊受の神

豊受靈宮松檜間。驚聞鈴鼓動雲山。太邦常立神明徳。寄語王侯莫等閑。

七日。雨を志のぎて内宮にまうづとて。みもすそ川にて手あらひなどして。

袖になほ志き波よせてぬれそふやみもすそ川の五月雨の頃

神路の峯は仰ぐにつけて。いよ／＼たか山短山も。一つ緑に茂りそひ。天の八重雲常にいゆきたなびき。麓に朝霧ありてかをりみてり。垂仁の御宇に宮柱太しく建りしよりこの方。幾そばくの星霜移り變ると雖も。岩戸いでし光はとこしへに輝き。四方の海にあらわれ及び。常世の波のより／＼に。祭祀おこたらず。棗盛籩豆にしへの姿をかへず。事そぎけるこそ有がたけれ。神拜しけるついでに。心にどなへける歌。

照らせなほ光あまねき神路山詞の林下枝もらさで

靈光赫々乾坤際。三尺土階供滄蘋。外史謾書姬氏國。不知開闢自天神。

いすゞ川のこなたより。遙拜しける心を。

かりの世のへだてやみするいすゞ川神も佛も同じ流れを

鼓が岳は。内宮のむかひなる山にして。五十鈴川を隔てたり。はやし崎も麓にあり。

いすゞ川水のひいきや通ふらん鼓が嶽の風の志らべに

立かへりて後。かくれの山に上りぬ。倭姫を葬り奉りしよりの名也。常明寺此山にあり。

茂りあひて道こそ見えね昔きく名やは隠れの山の下芝

歸るさの道や迷はむ夕月夜光かくれの山のした陰

八日。曇天なり。つら石にまうでぬ。庵室あんしつに遠からぬ所也。此石の形なりつやち葛籠かごに似たればいへるなるべし。

祈るぞよ分入る道もつら石世につまづかぬ跡を守れど
九日。杉木正珍の催しにて會あり。首夏待空戀。

夏のきて朝露すし空の色もまたゝる山の深き緑に
頼めてもいくよ空しき床の塵又あらましに拂ふさへうき

中西信慶杉村光淳も來り給へり。

十日。西行さいぎやうたけ谷神照寺たにがみてるうぢに尋ねゆく。こは西行さいぎやうの圓位えんゐと云ひし時住すめるとなん。瀧の水清く岩根いはねに
おち。松古まゆりて軒のきにそふ。

山陰やまかげの古ふるりぬる跡も尋ねみつ詞の花をくちぬ枝折しをりに
月讀つきよみのもりにて。

木間このまもる光もすし五月雨の空に待ちえし月よみの杜もり
夕かけて大林寺退耕和尚たいこうしやうまねかれて會あり。樹陰蟬。

木隠れて鳴くや空行く雲をさへといめてひしく蟬せみのもろ聲
十一日。隨入すゐいりとかいつらねて外宮うへみやにまゐり。岩戸山いわどやまに登る。

石戸強開手力雄。神光再仰出に天宮。萬年猶見山頭鏡。四海雲收日月濃。

天孫岩戸あまの孫にこもり給ひし時。なが鳴なの鳥の鳴きしことを思ひいでし。

こゝに來てなれもながなけ雲深き天の岩戸の山郭公

そこをかへり來る道。外宮の神庫を一覽しぬ。庵室あんしつに歸り來て。題をさぐりて。近きあたりの
名所をよむに。神路山の春。大淀の冬の心を。

神路山光を分る恵みや月と花との春にみすらん

大淀の松はつらしと恨みても鳴くや千鳥の妻戀る聲

此夕堤刑部盛尹つひみぎやぶらふもりた。久保倉右近盛僚くぼくらうこん。山田大路藏人元親やまだおほぢくちんぞもとちか。足代庄大夫弘次來り謁えつせられて。和歌
の事など問はる。猶まばし留まりなんや。和歌の會なども催さまほしきにと。まきりに申されし
ども。遊行上人心こゝちわづらひ給ひけるが。重おもくならせ給ふよし告來りしかば。さり所なくて。

此所を立歸るべきになりぬ。此よしき給ひて。大林寺退耕長老のもとより。

捨すてて雲うすてに行くとも時鳥忘れず來なけいせの神垣

されし返事に。

又も來鳴かんほどしぎす山田の原の杉の木末こせまに

夜をこめて古市の庵いはりを立出で。宮川渡るとして二宮を拜し奉り。あけの明星めうせうなどいふ

所を經るに。大淀浦は此あたりより。今一里餘もあなれば行ても見ず。そのかみ行たりしが。浦の名を俗傳には。あいつとぞ言ふなる。

大淀の浪や恨みんよそにのみみち遠しとて立歸る身を齋宮村いなき川を過ぎて櫛田川にて。

青柳のみどりの髪や亂らん風の吹きとく櫛田河原に雲津川をわたるとて。

分來しやいづれの岑の雲津川たきりて遠き水のみな上阿漕があまの古墳なりとて。津の南の海近きとこにあり。

罪とがも我心から引く網に誰をあこぎが恨みとか見ん同所に國府の阿彌陀あり。一身田に參詣して。くぼ田にやどりぬ。

十三日。長野とよく野をへて。鈴鹿の驛にいづ。もろくの國守郡令などの往かひも賑はし。かにが坂にて。小さき塔婆の有けるは。是なん昔かにと言ひし山賊の。まるし也けるといふ。

名を聞くもはかなや蟹の横にゆかばいづれの世にか身をば立つべき水口にて夕立すべきけしきなれば。

此里に舍りやとらん水口の蛙も空にあめをしるこゑ

横田川を渡る。夕月おぼつかなく波にうつれり。けふ水あちて。さいつころの舟渡しもなし。石部村にさきのやどりを尋ねてふしぬ。

ねぬ夜はも心ぞやすき枕とて引むすぶ草のもとの宿りは

梅木村是齋といへる。近き年より藥をあきなひけるに。効驗世にかたり繼て。西より東よりみちくる人。立よらぬもなし。局方發揮の旨を思へば。信用するにかたしといへど。たうべて心の快ければ。われも寄りて買ふ。屋の前に藥師如來の像を安置して。堂のさまもあろそかならず。

醫王芳徳本無邊。誰識神方夢裡傳。梅樹村中來服藥。蓬萊山上去爲仙。

草津より瀬田にまはりぬ。かねては石山にもなど思ひしかど。けふ急ぎて京に入るべしとて。橋の上より遙かにふし拜み奉りぬ。打出の濱なる茶店に立より。晝間のつかれをたすく。水の上に臨める苦ひさしのさまいと涼しく言はんばかりなし。

大たけやあろす嵐も荒波の打出の濱によせて涼しきまだ暮れぬほど京に來つきぬ。

右行脚のついで其所々の風景にたへず。

元祿八年五月

梅月堂宣阿しるす

富士一覽記終

裝 遊 稿

雪中庵嵐雪

星翻れ鳥快ほしころば どりこころよき晨あした鐵鞋てつあひを踏んで躍り出たり。掛羅けいらを肩にやすめ。拂子はらすを後ろにわがぬ。長明ちやうめいが海道記一帖は。荷にふに重しとせず。意馬いばに鞭むちをかなで。獨歩たつぽの伊達者いたてものとなれり。彼一帖かのを見るに。便たよりの人の芳縁ほうえんに乗じて。俄にに獨身の遠行くはたを企てり。貞應二年ていおう卯月上旬うづき。五更ごげいに都を出て。一朝いちやうに旅立つと書けり。折節せりふしの能く似たれば。先達せんたつに頼みて所々の指南しなんとせんが爲ためなり。足柄山あしがらやまに手をあてしと云へるを。我俳諧わはいかいの葛藤かつどうにして。箱根路はこねちを辿り。岐ちまたの蟻ありに沓くつを止めて。蘆間あしまの蟹かにの哀あはれを觀くわんず。古郷こきやうを箱根はこねに隔へてられて。三島の宿しゆに寝いねたる夜。人々の餞はなむけせる句くどもを取出たり。百里氷花ひゃくりひやうかは志二つならざれども。各自おのれの根性こんせうあり。一人ひとりは萬よろづわさくとして。餞せん別の句くも趣おもむきなしとて。放棄ほうちにして。旅たびで死しねよと突放つきはなせり。一人ひとりは行先後ゆくさきのちの事取ことまかなひて。孤みなしを捨すつるおもひや花の山はなと勞いたはり出しぬ。車くるまを推おすあり車くるまを曳ひくあり。彼も親おやしく是も不疎ふそ。大道無門だうだうむもん。千著有レ道ちやくありちみち。かへる雁關飛せせきとびこゆる勢いきほなり

原通る日は。勅使の歸京ましますとて。海道も塵を拂ひ。山も恥かし氣に。今日を晴と繕ひ立たり。右の簾跳上られたるに。烏帽子の用意なんと燦爛と見ゆ。恐らくは未だ聞かず。富士に雲井の客人を見る人は。仕合なる旅に参り會たり。

富士を見ぬ歌人もあらん花の山

大井河近き島田の宿に。年頃漂ひ遊ぶ僧の侍りけり。世の中を用なき物に思ひ取りて。宿へ行くにも戸を打明て出歩ける。一日如舟に誘はれて。留守の程伺ひ入て。晝寝して歸りて後。申遣しける。

やすき瀬を人にをしへよ杜若

吉田の宿に日暮れたり。橋の許まで行たれば。舟よくと呼ぶ。何方へ乗る事ぞと聞けば。参宮の同者。爰より乗れば白子川崎と云所へ着て。陸には三日早しと云。身を持つ者の。危き海路はいぶかしとて。行過るもあり。元より繋がぬ舟の。斯る便宜に知らぬ國里も見ばやと思ふ心つきて。苦の中さし覗きたれば。三四十人乗込たり。多くは出羽の新庄。仙臺の扱参り。遠州山梨貝塚の籠作り鑄物師。大阪の商人など。春正が詩繪の如く押合ふたり。夜すがら牖に頭持たせて。明六ツの汐合善しとて。艤して一時許走るに。風悪きと云程こそあれ。十反帆をくるくると。地ざりの様に押巻き。舟は茶磨に成て。横雨骨を絞る。斯而は如何し侍らんと

て。島山を見掛て辛々船を寄せたり。所は伊勢の沖中にて。尾張より所知せる代官なり。志の島と云所なりけり。纔か一里許の丸島にて。人家百軒許あり。何様港めきたれば。漁家に入て伺ふ。家主の老婆いと深切に。旅は憂きものにこそ侍る。姥も去年の頃。白子の渡海に便船して。西國をうち侍ると云。斯る離れ小島迄も。大悲の恵みの行渡りけるよと。尊く覺え侍りける。島の風俗は八丈に似たりとかや。伊勢の志の島は尾張八丈と。所の諺に申し侍る。此處に三日を経て。扱参りの勞れたるに。精を求めて扶け合ひぬ。北風の風待ち得たりとて。我先に争ひ乗りて。二見の沖立岩を見掛たるに。又西風強く出て。楫取直せば。南に揉め北に變る。神鳴どろくと海底に響き。各の顔夕暮立ちて。電光髻に燃つく。左に倒れ右に呻く。船中夜の如くに。只磁石を便に伊勢の方を祈るばかりぞ。暫くの人々の命なりけり。此時生涯の浮める事を思ふに。人々の首に懸け肌包める黄金は。身を沈むるにあだなるべし。板子一枚には劣りたりける。兎角して物の見えたるは。山にてこそ侍らめとて。其方を便りに走る。伊良古崎にてぞ侍りける。此島前を吹放れて。遠江灘へ出たらば。津輕の方へ流され侍らん。心憂き人々を乗せ合たりとて。水主も潮搔掬ひ。大被はりくと押揉む。沖に漂ふこと半日許。程を考ふるに五十里も侍らんと云。漸く空静まりて皆息出たり。鷹一つ見付けてと。芭蕉翁の申されたる所なれば。懐かしく立上りて。

藤浪に鵜は得たりいらこ崎
今日は二見の御鹽を運ぶ日なりとて。内外の神垣も殊に澄渡りおはしたるに。山田が原の郭公。襟の許に落ちかゝりたり。

こゝろには松杉ばかり時鳥

義仲寺の師父の廟は。芭蕉しげり芭蕉破れて。七とせの露霜を送り迎へ。苔生ひ給へり。

色としもなかりけるかな青嵐

加茂の御蔭葵の神事と忙がしければ。日吉の社の後の祭に参り。坂本の宿に泊りぬ。樵木積みたる火焚く家の隅に。具足と太刀の埃に混りて侍りけるを。持傳へたる故やあると尋ねければ。爰の習慣にて。斯計の兵具持たぬ家は侍らずと申しける。心憎かりければ。

なめくじり這ふて光るや古具足

加茂の足揃は。神人淨衣に奴袴して。駒の足を試さる。帳の屋に着て疾遲きを定め。赤方黒方を分てるなり。今日は唯眞白にて馬上見分ず。

落ちたるが殊に目立つやあし揃

五日の競馬はて。森に謠ひ芝生に酔へる。今日の名残も暮かゝりたり。

菅蒲草加茂のかり橋今幾日

十五日は今宮殿。七日より御旅所の御出なり。當日小川を南へ神輿を渡し奉る。十八日まで夜宮に詣づ。

埋火を涼しどあふぐ夜の哉

一種賞翫にとて。皆川中に交はり侍りて。

味噌摺るに涼しき鮎の游かな

伏見にて。

明けてのく家に伏見や夏の月

炬松振て野邊を行くも。爰もどの古風なるべし。

行燈で来る夜送る夜五月雨

祇園會の七日の鉢。十四日の山。綾より錦より見物なるは。荻野五十嵐松尾松村。素袍に太刀佩きて。四條高倉の辻に床几を居られば。下の雑色同じ様にて。紅の房下げたる鐵棒抱込み。襦の上下着たる男等。黒漆の棒手にく持ちて粧をつくろひ。非常を警む。兼て定められたる一二の鬘を改めかへす。威儀嚴重なる中に。階子と白と車に積みて町毎に曳くは。何の用に侍りけん。

たて白もともに踊るや祇園の會

河原の納涼。

來る水のゆく水洗ふ納涼かな
千本を南へ。四塚の邊へ行くとして。

島原の外も染るや藍ばたけ

京より唐崎へ詣づとして。志賀の山越はする事なり。

志賀越とありし被や菊の花

七夕。

七夕や加茂川わたる牛車

飛鳥井難波殿の蹴鞠。池の坊の立花。

都の田夫。田舎の風流。立て見るあり居て見るあり。

秋風のうしろをのぞく立花哉

九日の六道参り。小野の篋の冥途に通へる道なりとして。洛中の貴賤詣で。槇の葉求めて。魂を迎ふるしとし侍る。

打てば響く物と知りつゝ迎へ鐘

今年は爰に盆を迎へり。亡者の志し深く。京へくと言ひける程に。舊跡を見る度毎に。手向草にもと思ひ寄りたるなり。彼は遊び者の果ながら。二十年來見しものなり。常に己が罪さへ

懺悔して歎きける程に。物識れる人に見えさせて。公案と云物を捨くりけるが。如何に省ありけん。人に名のなき時は。如何呼び侍るらんと云を。口を開かず問ひ來らば。耳を塞ぎて聞くべけれど答へたれば。不審き顔して。猶ひねくりたり。尼になるべき望益々止まざりければ。受戒せさせて雪山淨白と改名して。頭くりくど成りぬ。爰に乞食し彼處に行脚せんも心安しとて。悦び合へり。菴室も別にしつらひてんとて。其事となく用意せしに。病切に迫て。其本意計りは遂げず終れり。けふは何となく思ひ出て。供經わりぎやうなど云物調へ。都心の魂迎へして。

魂祭こゝがねがひの都なり

十六日は山々の送り火。如意が嶽の大文字。松が崎の妙法河原にも。麻殻に火點して。魂送りし侍りぬ。

經を焼く火の尊さや秋の風

大文字の句を求めたれば。雪の心の出けるまゝに。

山の端を雪にも見ばや大文字

里右が娘失ひけるに遣はす。

鬼燈の擦すればつぶす歎きかな

野の宮に参りて。

嵯峨中の淋しきくゆる薄かな

荆に袖を引かれては其日を暮し。道の街に尻を居ては。二夜三夜と明す。都の家の棟も數多算へぬ。

洛外の辻堂いくつ秋のかぜ

歸菴。

瘦る身をさするに似たり秋の風

濟雲方丈へ行脚の暇申し入れたる時。途中受用の一句を問ふに。隨て答へ申しければ。千牛曳けども歸らずと。名殘捨て給へり。この秋歸り罷りて。

野に寐たる牛の黒さを秋の月

師問云。去春望別送乙片語。今秋歸來相見了也。即今如何是行脚眼。其答云。觀音境裏古松樹。師云。松無古今色。乍麼生無古今色的一句。某進云。春色無高下。花枝自短長。師頷之休去。某拜退參堂去。

裝遊稿終

こし地紀行

磯 一 峰

比は何時なるらん。秋の暑さは頼むべからずとかや。太平老人も言ひし様に。何時しか朝露白く道芝に置渡し。夕風冷やかに軒端の萩を吹く。折しもあほやけの仰せに依り。幼主の君所領の地を越の國に替へさせ給ふ事あり。家司の人々は更なり。いやくの我人に至るまで。劣らじと旅立つあらしせり。抑も前拾遺忠國君いまそかり給ひし時。御慈み深く。年來仕へ奉りし人は更なり。しめさせ給ふ境の賤山賤に至るまで。御惠みに洩るゝものなく。御名殘のみぞ悲しみ惜み奉りける。今は彼の甘棠の思ひ深く。召公の昔も斯やと。一つく言ひ出れば其恐れあり。又は筆も及びがたし。播磨より越後までは。國の數八を列ね。道は二百里に餘れり。山高くして車を碎き。海深くして船を覆へせり。唐の劔山も斯や有りけむ。巫峽にも危きを競ぶべし。白居易が作りし詩の意。山谷が夫人を携へて黔南に下りしも。想ひやらる。やつがれも兄なる人に伴ひ。妻をも俱して。晝は乗物を並べ。夜は嵐の底に宿り。又は柁枕鹽屋の浦。いぶせきにも淋しきにも談らひ。憂き事つらき事。旅の習はしさまく。折に觸れ。徒然わ

ぶるふし。詩に作り歌に著して。彼此書集むる事に成りぬ。前途程遠けれども。君より賜物厚くして。ほどに就けて糧を齎むの計に苦む事なく。馬乗物も心のまゝにして。悦び合へり。年來好みある人も。睦まじき限りも。かゝる時にこそ心の底もあらはれて。恥かしき事ならずや。初めと中比と末とに。旅立つ日次定めて。先づ立出る人の馬の驢けに。おそくどくたち別れてもあふ坂の關のあなたにめぐりあはまし。都に住みし比。敷島の道の物語など聞きし。宣阿法師の許に消息して。都をば餘所に隔てしら雲のいくへこし地にわかれむぞうき消息の返し。いと慙ごろにて其末に。

今よりは鴈の使にこどつてよみこしち遠き旅の住るも。詩賦文章の道尋ねし翁の許に遣はしける。

君住京城。我播陽。遭逢難得寄詩章。儻下塞北移家去。須附飛鴻寫繡腸。此翁もみまかりし由にて。和韻はなし。在るは亡き世のためし。いと果敢なし。其外杏林の師友數多消息ありしかど。例の洩しつ。又ひとつ國の近き郡の並び。宍粟と云る所に。風雅を好みて絶えず消息せし人あり。官務の事ありて武藏國に行きけり。便のついでに。おもひたつこしの山路や白雲のこなたかなたにわかるゝぞうき

はるかなるこゑのしら山しらずとも夢にや君がこえんとすらむ返し。

思ひやれ老は行くへもあら雲のかゝるこし地の旅のわかれを

はるくと思ふ心も夢ならでこえむ物かはこしの白山

龍野といへる所に女翁ありけり。我妻稚なかりし比より睦まじかりけるが。此別れ何にたぐふべきなど歎き聞えければ。

別れなばたのむの鴈のそれならでつてもあらめやこしの山里

返し。

をりくは猶かきかはせ春秋の鴈のつばさの便ならずど。はるかなるこし地の旅もつらからむつばさならぶる中の契は。文の返し最慙ろに聞えて名殘惜しめり。既に立立つべき日も近くなりぬれば。先づ書寫山に登り。亡君の御墓に詣でぬ。新たに莊嚴ありて清らかなり。謹みひれ伏して涙落しぬ。

書寫山中玉樹清。先君獨止在佳城。群臣別去行鴻塞。天末當長望舊營。仕へこし人はわかれてあらし吹くみやまの奥にきみのみぞすむ。石の燈籠に。近侍の人々の姓名彫付てあり。素飴のやつがれが名もありければ。いと耻かしく

覺えて。

何をもちて君に仕へし身の程をもちへば残るわが名はづかし
跡顧みがちにて。泣くく立歸りぬ。旅立つあらし何彼と言罵るうちにて。私ならぬ事にて貴
介に陪從して法華山に登りぬ。此山は古へ法道とかや聞えし仙人。西天竺より來り住にし由。
縁起などもあるにや。

法華山裡數峰連。來住西方擲鉢仙。不計偶陪從貴介。駕風今日凌高巔。

八月廿九日。高砂の民家まで行く。市郷荒井など云所。川ありて船にて渡りぬ。人争ひ乗りて
翻るばかり也。危き事限りなし。

皆人の身のあやふさも若ら浪やまづむばかりにみゆる浮船

高砂に着きて追手を待ちて船出せり。此所の民家軒を比べ。稻の倉町潔らかに甍を連ね。賑へ
る浦半。又こと田舎にも有るべきや。東は河内攝津の國の山々見え渡り。西は牛窓かけて潮平
かにして眺望限りなし。鹽屋の煙隠々として。遠近の島々雲の立居など静にして。船は早や赤
石の泊門を越ゆ。沖の方より小き船の來るを見れば。海津物などあり。やがて調へ調じて船道
の慰めとせり。鹿が瀬といふ所は。淡路島に牡鹿の磯邊より渡りて通ひけるが。今は波荒くし

て然る事なしと聞きて。

赤石瀉浪のたぢるの隙なくて男鹿のかよふ道は絶えけり

夕陽西に傾き。遠寺の鐘の聲幽かに船の裏に聞ゆ。瀟湘の夜の泊りも斯やと哀れに心細し。秋
の空の景色定まらず。俄に浪荒く風烈しければ。暫し碇卸して追手を待つ。枕枕いと物侘し。
或人の口吟める。

こえがたき明石の迫門の船なれどもふ中には浪風もなし
返し。

波風もなきを心のたのみにていく日かこえむこしの海山

など言ひて慰む。波風いと静かに成り。追手なれば船いとよく走れり。

棹レ舩爲ニ渡海。任レ運只皇天。雨歇高砂浦。風生赤石邊。夫妻雙枕寢。昆季隔窓眠。二十
餘程路。既到浪速前。

船より上りて。所縁なる人の許尋ね。住吉の社に詣でぬ。妻をも相具しければ。

祈りこし志るしも見えぬ我も人もどもに詣でぬすみよしの宮

昔見しに變り。神垣露霜に古りて。橋は板なくして池は水草のみ繁れり。千木かたそぎも朽て
霜は心のまゝなるべし。神慮如何におはすらん測りがたし。見る者袂を絞らぬはなし。

神慮いかゝあるらんかたそぎのゆきあひの間も朽まさりぬる
六日の夕。難波堀江の蘆分小船に棹して。終夜河風冷かに吹くを。衣襲ね着て。曉方に伏見の
里に着く。朝餉とりくにて。やがて都に行き。花園の法皇の御寺に詣で。隣花院といへる
坊中に相識れる人の亡跡の標を尋ね吊ひて。詩を作れり。

訪_レ塵拜_ニ脇坂閑居士墳墓_一

空記_ニ姓名_一不_レ對_レ顔。遙尋_ニ碑碣_一訪_ニ丘山_一。人身一結姻家好。神鬼何欺明暗間。

ある人の口すさめる

儻やわすれもやらで年月をふるき跡とふ袖の露けさ

其外昔語りし法師の。齡たけぬるが。猶浮世に在るよしなどいひて。暫し物語して。山の井の
飽かて立別れぬ。竹田の稻葉露繁く。夕風いと冷やかに袂を吹き。日もくれ竹の伏見に歸りて
泊りぬ。

くれ竹の伏見の里の草まくらむすぶもながし秋の夜の夢

鳥山氏なりける隱士の許に。詩の和韻など贈り遣はしける。夜をこめて宿を出ぬれば。あはず
して打過ぬ。山科の里に行き。かの遍昭が住みし華山も。招月庵などの跡も。いつくにや見え
く欲しけれど。然る事仕歩く旅ならねば。空しく打過ぬ。音羽河を渡るとて。

音羽河淺き瀬なれど所から名に聞えたる流なるらん

音羽山を巡り。相坂の關を越えて大津の里にゆく。世に關の清水と云ふは。蹴揚の水なるべし。
まことは追分の東に有るを云ふなるべし。近つ淡海の湖。波に似たる物なく。いと平かにして
蒼々たり。見るが中に。山嵐波を起して秋の景色定まらず。つくぐと眺めて打過ぬ。

夫琵琶湖。南北十九里。東西七八里。里俗稱_ニ九十九浦名_一。是日域大湖也。若狹三方。越中
布施。信州諏訪。雲州松江。奥州磐梯。誰_レ有_ニ諸湖_一。豈較_ニ其廣狹_一。况地接_ニ京城_一。風人雅
士多來_レ此留題。真奇觀也。其藻臥。東鯽等湖中美産也。

渺々琵琶湖徑。北南十九程。烟波船出沒。砂岬鳥縱橫。瀟湘曾同_レ景。龍宮長閼_レ城。魚蝦
皆美物。吟咏古人情。

又

行盡近江湖水頭。浪聲日夜響_ニ蘆洲_一。旅鴻新見報_ニ消息_一。先問天涯紫塞秋。
鏡の宿までは程遠ければ。人々守山に泊りぬ。

秋ふかき露も時雨ももり山の夜寒になりぬ木々の下蔭
明れば重陽なりけり。

手折るべき菊さへ見えず山里のまがさがもとに立ぞわづらふ

雨ちと降りぬれど。やがて晴て野洲の河を渡る。三上山霧晴ていとよく見えたり。
いづくぞと心あてなるみかみやま晴てぞ見ゆるやすの川霧
野路篠原にて。

分迷ふ野路の篠原露ちりて袂に寒き萩のうはかせ
鏡山を見て。

心もてゑがきうつさばかやみ山いかに見にくき姿ならまし
或人のよめる。

旅衣たちし日よりもやつれきてむかふ鏡の山もはづかし

篠原山とて。道の南に見ゆるは。小松うつくしく生列なり。碧の石の間。赤色なる巖こゝかし
こに交はりて。心を盡して繪師の疊み成せるが如し。愛智川幾瀬にか成りぬ。淺くして衣裏ぐ
る折から。下部も喜び渡りぬ。高宮といふ所は。常に麻衣のみ織りて。紡績の窓暇なく。見え
ぬ。

賤の女が織も隙なく夏引の手引の糸の絶やらすして

世を渡る業。哀れに覺え侍りぬ。一里餘りも行過ぬらん。日暮れて鳥本に泊りぬ。

十日の朝。道芝の露分けて袂いと冷かなり。右の方に高く峙ちたるは膽吹山なり。高橋と云所

に出づれば。山下風烈しく吹落て。波の聲いと冷し。鴉照海の半に當りて。竹生島見え渡れり。
右の方の端山を隔て、志津が嶽見ゆる。

按二軍記。太閤秀吉公。討三柴田勝家二時。志津嶽先登七人。手執二短兵。震二勇敢於天下。加
藤清正。加藤嘉明。平野長泰。脇坂安治。糟谷内膳。片桐直盛。石川氏。以上七人也。予
告レ妻云。脇坂安治君則稱二古中書君二是也。傳聞君祖先也。今過二祖先功業跡。可レ謂レ奇也。

白雲曳々志津嵩。傳聞先登七將雄。陣跡百年爭戰後。無レ功安枕太平風。

志津嶽の麓に。徑三里許も有らん湖あるは。爲家卿の。さえ増る膽吹の嶽の山風に氷りは
てたる餘吾の海水。と詠む給ひし湖也。膽吹山影うつるばかり向合ひたり。柳が瀬と云所に來
にけり。都の方遠ざかりて。萬清らかならず。いぶせき所なり。

十一日。柳が瀬を出て。中の河内といへる所に休み。此處彼處見渡せば。越の白根東の方に見
ゆる。雪いと白く降積れり。香爐峰にはあらねど。竹輿の簾をかへげて詠め居たり。一一の句。
問答の體を設けて絶句を作れり。

問レ山此景所ニ何似。山曰岐陽真耐レ比。九月年々雪既堆。玲瓏白玉危峰峙。

我をのみ思ひつるがの道も。左の方也と。石に彫付てあり。

餘所にもおもひつるがのこしちをもけふはこえ行く峯の白雲

一二町過て國境となんいふは。近江と越前の境なり。猶行過れば。燧が城の古跡見ゆる。

按舊記。壽永二年。木曾義仲自信州遣兵令守燧城。巖時河廻。地利不可言。雖然城中有通志於敵軍平氏者。終至陷矣。

天時地利人和。往聖格言豈磨。來見燧城要地。一朝敗走如何。

左の方七八町もあるらん。西の方に高き山見ゆるは歸る山也。

未つひに都の方に歸る山まさしかるべき名をたのむなり

水海を廻り。山より西の方の道を過れば。矢田野。有乳山。管飯の海も見ゆれど。至て峻しく

遠き道なれば。皆人通る事なし。山より東の道をなん越えぬ。唐には春の花に如く物なしと言

ひ。大和言の葉には秋の哀れを取立て想へるとかや。源氏の物語にも見え侍れど。小倉山。嵯

峨野などの像似るべくもあらず。錦花緑草の美しくさゝやかなる姿はなくて。只濶き海嶮き

山。いたづらなる秋の野原のみ。行先に列りて。波の聲風の響きあらしく。耳を驚かし目

を覺ますのみ也。初雪降りぬる後は道も絶えて。往かふ旅人も稀なるよし聞て。彼忠房卿の。

初み雪ふりにけらしなあらち山こしの旅人そりにのるまで。と詠み給ひしも思ひ出らる。駕籠

乗物も便あしくて。櫓とかやいふ物に乗りて行通ふよしなり。櫓は唐土にても禹王とかや云し

聖人の。洪水を治めさせ給ふ時に。泥行に乘らせ給へるよし。古き書にも見え侍りぬ。同じ旅

行の人々惱める者多し。やつがれ。藥を用いて大形快くなりて。皆々打連れ通りぬ。今庄と云所に泊りぬ。此國の風俗すなほにして。いとよく賑へる所也。國の守惠み深くましますよし。里人語るを聞て感思へり。

我曾爲浪士時。東經五十三驛。南極河攝泉紀。及至中國無不閱。然未見美如越

前州。入境野無餓莩。道少乞兒。土民着禮服。送迎旅客。行路磊落杜朽敗。刺史命

小吏僕隸令修之。不勞民力。路平行人無苦。又一鄉有破產者。同輩相救。有故

告官吏。則鑿其細巨。令安之手足。戲於太守是民父母歟。土民聞語國政不覺淚下。

執筆記其梗概。

聞説昔年虞芮民。路遺不捨禮容新。扶桑三越前州俗。還淳流風感此仁。

賑ひ豊なる事鄙には珍らかなり。きみども數多街に歌ひ行交ふ。遊山遊興の旅ならねば。聊か

心留らず覺えぬ。

十二日。つとめて宿を出づ。程なく峠に登りぬ。茶店二三あり。是なん湯尾峠なりと云。蘇

民將來といふ文字ある符を。往來の旅人に勸め求めしむ。疱瘡を免るよしなり。つらく思

ふに。年代の程いといふかし。夫れ疱瘡は上れる代には無きにや。唐にも黃帝岐伯の書にも載

せず。天竺維摩の四百四病の説にも洩れて。晋の葛洪。隋の巢氏など云へる名醫の書に。漸く

是を論ぜり。夫より此方。膚瘡聖瘡豌豆瘡など。さまざまの名を記せり。我日の本にては。聖
武天皇の御時。筑紫の國より此病傳りぬるよし。舊記に見えたり。千早振神代に此病あるべ
き事とも覺えず。又一つ思ひ出たる事あり。山城國祇園に蘇民を合せ祀れり。是はそのかみ素
盞烏尊南海に赴かせ給ふ時。宿かり給ひけるに。巨旦は心淺ましくして。貸まるらせず。蘇民
は志優しくして。粟其を御座とし。粟の飲を供御とせり。尊も家の貧を憐み給へり。其報恩
の爲に。蘇民が子孫たる者には。疫癘の病を免れしめ給ふべき由仰せありて。今に至りて茅の
輪をかけて祭を設け。蘇民將來と唱ふる時は。煩ひを免るよし縁起などにも有るにや。何れも
天行の病なる故に。彼れ此れまぬかるし由謂ならはしけるにや。又は神慮の遠き御惠みの。未
世に此病あらんを示させ給へるにや。賤しき口にて妄りに辨へがたし。峠を下れば。右の方に
谷川の流れ遙かに連れり。日野河とかや云ふめる。筏の數多棹下すを見て。
山賤のうきをこりつむほど見えてくだす筏のかずもあまたに
いと嶮しき九折なる通ひ路也。桂嶺瘴來雲墨色とかや。柳詩にも言ひけん景色なり。
關塞凌烟瘴。羊腸感道通。險難嘗易飮。氣象見無窮。地僻南風斷。時秋北露濃。雁行
兄及婦。辛苦共濛々。
鯖波今宿など過て府中に行く。此所執事の私領とかや。民戸千軒にもあまりて。人の往來繁く

いと賑へり。猶淺水の里を過て。玉江など聞きし所。橋を渡りて福井と云所に宿かりぬ。主の
男語りて言ひけるは。國の守文にも武にも暗からず。其道に長ぬる者を召して。聖の道をも説
かせ給ひ。又は敷島の道も好かせ給ふ故に。下々の賤しき民すらも。物學ふことを心に掛けぬ。
五箇と云所是より程近し。色紙形短冊などの紙を出せるよしにて。美しき限りを見せぬ。墨流
しとかや云ふ山を聞て。古今集物の名の。すみながしは。何なるらんも知らねど。文字の通ひ
たれば句の上にするて。
すなほなるみよのためしやなか／＼にかゝるひなにもまきしまの道
夜明て宿を出つ。市の板底作り重ねて。豊かなる御世の志るし。めてたき限りなく覺えぬ。船
橋河といへるは。四十餘艘の船を鐵の鎖にて繋ぎ。其上に板を並べて。渡るに危ふからず。
船橋や今ぞふみぬとりはなす人しあらねば妹とわたりて
東の山の端に。城の見ゆるは丸岡なり。當時道元和尙とかや。唐より歸りて曹洞の宗旨を廣め
し。永平寺なども此あたりや。長崎金津細呂木など過て又坂あり。越前ど加賀どの境なりと
いふ。坂を下れば入海見ゆる。山めぐり島々水の上に浮たる様にて幽也。海士の住む里軒傾き
ていと佳し。蓮が浦とかやいふよし。空時雨めきていと淋しく哀れなり。大聖寺など云所に行
て泊りぬ。今夜は十三夜なり。旅の床徒然なり。夜更空晴けり。

ふしわびぬ旅のやどりも後の名の月にはをしむ明方の空
雨又頻りに降り。風はしたなく吹く。兎角する中に雨風静かに成ければ。宿を出づ。篠原と云
所。道より左の方なりといふ。

壽永争亂時。齋藤實盛。屬平氏。終不變志。向希古齡。屠戰死。可謂義士也。今載
軍記。及入諷曲。兒童走卒亦詳其事實。

齋藤實盛石碑存。古戰場中屬廣原。致仕高齡還殞命。至今義氣易傷魂。

猶行過て五里餘りも經ぬべし。道の左の方一里許りも隔て。洲崎に松原見ゆるは高濱也。安
宅の浦とかや云ふめる。古へは濱邊を行通ひけるが。今は山路を通りぬ。

源義經遇姦佞毀積。得罪於賴朝。遁東奥。忠臣義士陪從。過北陸至險。臨安宅關。容

易難得過。偽爲山伏修驗道僧。欲過之。關吏深怪之。欲見其證。時辨慶執和邦書。

高捧之。腹藁勸進文誦之。終得免虎口。軍志所載。諷曲所傳。有大同小異矣。

關戸得開豈孟嘗。相傳辨慶頓機詳。高濱陣跡是安宅。五百年來松樹蒼。

大國のふるしにや。道廣くして車を並べつべし。周道如礪とかやいひけん。毛詩の詞まで思ひ
出らる。雙木の松嚴しく列なりて。枝をつらね蔭を重ねたり。往來の民長き草にて蓑をぬんご
ろに造りて目馴れぬ姿なり。唐の仙人の圖を見るが如し。雪深き所の證なるべし。

道經北陸往來徒。長艸制蓑風俗殊。未着鶴裳一如羽客。偶然似對列仙圖。

猶行方に大河あり。此比は日數を経てさのみ雨降らざりし故に。幾瀬にも成りて。大形真砂を

踏みて渡りぬ。水増したらん時の餘。推量られて。水の早き勢ひまで類なく覺ゆ。南の方白山

の麓の谷々より打出る水の。一つに流れ合て。斯く大なる河と成れる由を聞て。珉江始めは觴

を濫ぶる例も。斯やあらんと覺ゆ。又は湯尾峠より此方。谷川北に流れて海に入る。水は潤下

とかや尙書にも見え侍れば。唐大和同じ道理なるべし。唐の崑崙と云へる山天下最高とかや。

其麓の流。唐は東に漲り落ち。天竺は西の方に流れて海に入り。南は南の方に注ぎ。北は北に

赴くよし。王充論衡にも記し。近き世の草木子など云へる書にも見え侍りぬ。萬古水東流と作

れる詩も。唐人の目の前の眺めなるべし。水島などいへる所を過て小松に泊りぬ。

十五日。宿を出づ。此國も古へより餓季なく。乞兒稀なり。國の守より小屋を作らせ給ひて。

疲療殘疾の民を養はせ給ひて。病癒えぬれば又原の住家に返して。産業を勤めしめ給へる由を

聞て。古へ施藥院置かせ給ひ。天下の癘疾の者を救はせ給ひし。聖武天皇の御政まで思ひ出

られて。深き御いづくしみ感じ合り。誠に民の父母たるの道なるべし。境内の民あしを用ふる

に。數を全くして省く事なし。

凡銅錢其制久矣。古者貫千百皆足。梁武帝時。有破嶺以東八十爲佰名東錢。江郢以西

七十名_二西錢_一。京師九十爲_二長錢_一。歐陽修飯田錄云。自_二五代_一以來以_二七十七_一爲_二百_一。謂_二之_一省百_二云々_一。日本國以_二九十六_一爲_二省百_一通用。今加賀俗。不_レ用_二省數全足_一矣。

銅錢數足古風存。省佰不_レ庸市井門。一諾楚人如_レ貴信。青蚨道術可_レ羞言。

小野市松任など過て金澤に着きぬ。國の守あはす所なれば。わきて賑へり。商家軒を比べて。朝餐夕餉の煙一二里にも立續くべし。犀河淺川などいふ橋は。淀伏見にも劣るまじ。人馬の足音絶る間もなし。暫し人家に立寄りて休息しぬ。國の名物なりとて。菊酒など出してもてなす。

系にしあれば遠くもきぬる千年をも手にとりぬべき菊のさかづき。男の立つ市と。女の立つ市と。二所に別れて物を交へていと賑へり。かの目ならはすと聞えし。西東の市も斯やありけんなど。古きためしも思ひ出らる。

にぎはへる國のあるしやたつ市の場につらなる袖のかずく。津幡竹の橋など過て。俱利迦羅峠に登り不動堂の前を過ぎぬ。巖峩々として高く峙ち。道回り回りにいと細し。千尋の谷寂々として底深く。越の海北を回りに。浪の音高くして鳴神の驚かすが如く。巖も崩るばかり響きて。玉鉾の道も動きゆるぎて。嶮しき事言葉にも言盡しがたし。老木の松の梢高く。蔭重なりて一鳥鳴かざる景色。緑林白波の心遣ひ誰かなからざらん。然あれど此國の習はしにて。道に遺物を拾はず。刈干す田の實なども。道の傍の垣に懸置きて。

守人なければども盗み取る者なし。赧々武夫。玉公干城とかや聞きしも然る事ぞかし。北の方に遠く見ゆる島は。能登の國なり。源の順の能登守になりて下りし時。越の海にむれて居るども都鳥みやこの人を戀しかるべき。と詠じ給ひしも哀れなり。日も夕暮になりけれど。借るべき家もなし。木の間洩る月影いと隈なくて。羽丹生などいふ所を過て。石動と云里に泊りぬ。羽丹生者。木曾義仲出張地也。夜登俱利迦羅峠。討敵軍不意。斃七万余兵。逐平氏。虎視耽。臣太夫房覺明。舊爲勸學院文章博士。號藏人通廣。薙髮爲僧號西乘坊信救。後有_レ故屬_二木曾義仲_一。宜哉有_二材識_一。義仲命令_二覺明裁_一願書。曾所_レ納鏑箭并願書。今猶存。夜過_二華表前_一式去矣。

義仲覺明今則亡。其智其勇一軍張。忽慶七萬有餘士。折戟埋沙古戰場。姫路を出て。日數重りて。十と云て五に成りぬ。道の程も半なるべし。

草枕あまた旅寝ぬはりまがた遠くもきぬるみこじぢの末。望月の影猶有明の心細げに。横雲立別れて人々宿を出づ。子丑の間に方りて見ゆるは。二上山なりと聞て。

王櫛匣二上山の月影もふけてぞすぐる野邊の通ひ路。立山と思しき方より朝日出たり。小松など云所の近きあたりに。岩瀬野などあるよし聞けど。

行手ならねば見ずして打過ぬ。是や秋萩。小鷹狩など詠める所なるべし。森に蟬などよめるや。大和の國の岩瀬ならん。神水河といへるは。白山の方より流れ來る大河なり。まかあれど常に六十餘艘の船を并べて。渡るにたどくしからず。

船橋やうちわたす駒のかず見えて人のちからもかけてこそ去れ
十七日。夜明て富山を出づ。水橋と云所に。尼が瀬といふ河あり。美濃尾張の方より流れ續きたるよし也。東路の濱名の様に。海近くして危し。船にて渡りぬ。大磯の有磯の浦も海も何處なるらん。我戀はよむとも盡きじありそ海の濱の真砂はよみつくすとも。と聞きしも實に然る事ぞかし。行けどもく限りなく。空にも連なれる如く長き真砂路なり。

朝夕にみてこそ過れこしの海をいく日めぐりし濱の真砂路
沖中に雲一叢見えて空搖曇りぬ。すはや又龍の昇るよなど。口々に下部とも言ひ告げる。

越前中後州總稱三越。并加州亦有越稱。舊割越州謂乎。異域南部曰邊。北部曰塞。日本塞越和訓相通。然北陸總稱越路。亦不宜哉。延喜式。以四國二島爲邊鄙。義雖矛盾。古志知訓則相當。予且夕向北海。候其氣象。過驛路。相傳無潮漲退。常漫々巨浸也。甚不同南溟。如泉州攝州境。年々三月三日。潮退爲平砂。人爭取蛤蜊遣興。如異域浙江。八月十五日潮漲。詩人墨客爭觀弄之。皆是海之淺渚者乎。潮無退則知北海至

深也。一日雲氣變遷。濤波激動。忽海中有物。凡五條。墨色而長大也。再々升空。雲氣隨之。里俗皆曰是騰龍也。時々有如是異。春夏甚多。秋冬相見少也。予熟閱之。詳其始終。俄而雲氣散亂而行四方。所龍過爲暴雨。起疾風。夫龍雷火陰中陽。宜也。生海底。其動靜既有古人成說。今不贅此。不過塞北爭見如是異矣。
漫々巨海極陰中。五龍忽見競升空。層雲片片追隨去。電母雷公起暴風。
晴曇りて。道の行方いと困じにたり。滑川おふづなど過て。はやつけ片貝など云へる怪しき河。幾瀬か渡りて。布施の郡櫻井の庄に着きぬ。

越中國櫻井庄。曾北條家所寄與佐野氏義士地。而三箇庄一也。
佐氏義心人皆知。武門誰又可瑕疵。層逢讒佞雖貧困。兵器相携志不衰。
布施の浦も近く。三島野もついでり。

はるくとおとにもききしてみしき野の淺茅が原に鶉なくなり
終夜里は時雨て横雲のわかる、峰に見ゆる白雪。とかや聞えし歌の様に。時雨に夜寒いや増りしが。今朝は立山白妙に雪つもりて見ゆる。
十八日。宿を出づ。夜の時雨の餘波。猶晴れみ。曇りみ。定まらず行過ぬ。桐油打かけ覆ひて。乗物の内いと暗くして。四方の空見も遣れず。浦山とかや云なる里なりと聞て。窓の内より斯

なむ。

うら山も霧にこもりて見もわかずこえ行くかたはいづくなるらん
相本といふ所に河あり。黒邊河と云。深き谷河なり。梯こどくしく仕渡して。東路の猿橋な
どに似たり。濱邊を通れば。四十八箇瀬を渡るべきに。此橋一つにて越ゆる事よなど言ひ渡り
て喜び合ひ。泊など云里はあれど泊らず打過る。越後越中の境川を渡り。泊川など云ひて大河
幾瀬かあるらん。いと嶮しき大山の腰をめぐりて。市振と云所に來ぬ。人の心いざたなく。む
くつけく家居いぶせくて。猶此次の驛まで行かむと思へど。遣るべき人も馬もなきよし言言し
れば。日も未だ高けれど。爲べき様なくして泊りぬ。

十九日。夜をこめて宿を出づ。東路の箱根よりも。猶嶮しき山路を通りぬ。麓の濱邊は荒き浪
打寄せて。馬も人も海に引入るゝに由りて。窟の内に這入り。波の引く跡を走り行く。危きこ
ど何に比ふべき。皆人行かず。秋冬は波の通路ばかりにて。山の巔を越え行く。此岩の狭間
の嶮しさを。親知らず子知らず。となん云よし聞て。其名の鄙しき事。勝母の里。盗泉などの
類なるべし。古の聖の厭ひ給ひしも道理と覺え侍る。

親不知子不知。險崖名鄙道尤危。假令春夏波雖靜。先聖經過可避之。
東の方の麓に下りて。外波といふ在所に泊りぬ。

廿日の朝。つとめて宿を出づ。嶮しき山路を通りぬ。下部も登るに堪がたく。駒を牽なづみて。
馬に負はせし荷物は仰して人擔ぎ。馬は跡に返しぬ。此故に此坂を駒返りとなん云よし聞て。
唐の胡孫愁。蛇倒退などいへる所も斯やあるらん。先君の世にましまさば。かゝる所は過ぐま
じと思へば悲しくて。

なき君のまた世にまさまいさまし都の方に駒をかへして
姫川は船にて渡り。早川は下部ともかすく乗物に取付て。辛くして渡りぬ。此比も乗物を碎
き。人も危ふかりしが助かりぬるよし聞て。巫峡の水船を覆へす例し。斯やと想ひやらる。右
の方に富士の山形したるは。焼山となん云よし。夏の日は強く焼上りて煙の立つなるが。秋は
早く雪降り積るよし。白妙に見え侍りぬ。能生と云る所に着きぬ。主の男又は娘など。心地煩
はしく。又は瘡疾などにて苦むなれど。はかく敷醫師もなくて。空しく打過ぬる由言ひて。
強て願ひければ。望みに任せて薬與へぬれば。験ありとて悦びもてなす。薬方など書て残し與
へぬ。

廿一日。宿を出て濱邊に行て見れば。高潮どかや云ふなる浪荒くして。道も分かず打寄せ。行
くべき先も見えず。冷じき海の景色なり。高浪の打寄するをば。里人。ぬたとなん云ふ。如何
なる事にや。又能生に歸りて昨宵の宿に泊りぬ。主の男喜びて。懇にもてなす。かゝる鄙にも

優しき心有りけんと思ひ思へり。

山賤も哀れはまるやみこし路の國のかたへにすめる身なれど

人心是有靈。百姓又丁寧。煮茗寒泉熟。勸盃醇酒馨。

廿二日。夜明て宿を出づ。波風烈しからねど猶止まざりければ。道まで寄せて返る波の跡を走り行きなどして。辛くして通りぬ。桃河名立有馬河など云へる。長き濱邊の傳ひ道かひなき心地ぞする。名立山追つ立など。名も恐ろしき道の坂を上り下りて行く。沖中に二つの鳥見ゆるは。能登の國と佐渡の國なり。能登は西にあり。佐渡は東なり。此間七十里許りやあらん。内外の海の潮一つに行通ひて。打寄する浪風いと荒きこと限りなし。又能登の國の南の陰。佐渡の國の南の陰と思しき所は。浪風荒からず。二つの國の外を外海と名つけて。春の末夏の日は波穩かにして。鳥の鳴く東の涯より。不知火の筑紫の限りまでも。船の往來あり。秋冬は絶けり。二つの國の南は内海と名づけて。敦賀などより船の通ひ常に有るよし也。蒼々として濶き海原の果しなき詠めなり。

賦五言排律一篇。自慰二億悶。

靜對北溟茫。開吾胸臆隘。晴明岳不搖。陰晦席無挂。鵬擊水應揚。鯤圖南可快。百川學海朝。孤島隔潮界。勝日漁村欣。颶風商舶戒。馳心望大空。決皆忘勞憊。何人

挾岱山。超越浩濤邁。

鴈の一群沖中を渡るを見て。

今ぞみるこしの海顔天津鴈翅やすむる宿もあらぬを

みこし路や海山とをく行く袖を人にもつけよ天津鴈がね

遠き渚を行く人。波間を渡れば。凌波仙子とかや聞しも斯あらんかし。

凌波仙子駕風輕。行盡越州塞外瀛。自羨飛鴻孤我往。緬懷中國故人情。

廿三日。長濱の宿を出で。赤岩犬戾など云へる難所數多過て行く。いふせき賤が窓の内に。黒き土を焼て物を炊く。怪しき事ならずや。黒川などいふ所に。草水の油とかや云ひて。溪水の中に草の葉に着けて取れるよし。是や唐にて。石油石洩などの類ひなるべし。此土も彼の油の氣ありて薪と成るなるべし。

曾聞唐土石油名。今見越州繼暑明。是亦人間存權法。盈々万斛自然生。

中つ國に變りて。怪しき事のみぞ多き。地中より火の出で。火影明らかに燈の如くにして。民の夜産を助るよし。又は奥州には鹽を出せる井あるよし。里人の語るを聞て。鹽井火井など、て。蜀の國には有るよし傳へ聞き侍りしが。似通ひたること哉と思へり。道の行手に春日山といふ山あり。

傳聞春日山。曾上杉謙信城郭也。此時天下相爭。異域猶七國爭雄。就中甲陽武田信玄。勇威震四方。上杉會信州地。張陣爭雄。事實詳載軍志。今不贅此。頓賦一絕。倣扇對體。

謙信築城春日山。水廻嶺時似門關。甲越兩雄爭戰後。星移物換白雲閑。

暮井犀濱など云へるは。廣き濱邊なり。片町を過ぎ柿崎といふ所にて。日暮て泊りぬ。夜更て窓の内より海見遣れば。火影幽かに見えて哀れに心細し。

ふくる夜の空もひとつの海のはても星かどぞみるあまのいざり火

廿四日。柿崎を出て楯村といふ所を通りぬ。昔は此所風俗至りて暴々しく。哀れといふ事は露知らず。人心なき習はしにて。風に放たれて浮沈みて渚に寄る船を見ては。男女の敷を盡して立出で。財寶残らず奪ひ取り。乗れる人をば打殺して濱邊に捨置き。家々に歸りて財寶を分ち取りて。悦ぶ事限りなしと聞く。今は然る事なきにや。鉢の子を伏せたる形したる山の。絶たる様にて列なりたる峰の見ゆるは。鉢崎とかや云なる。あねは。瓶破坂など云ふ嶮しき道なり。

源義經赴奥州時。過北陸。携夫人。到瓶破坂。夫人俄生産。今路傍有浴見井。又有下納胞衣一地。設祭祠。稱胞衣納宮。辨慶盡忠事。詳見軍志。但以瓶破坂爲出羽地。不可考。

君是源公辨慶臣。患難歡喜委斯身。義名不沒照今古。廟算相傳勇智仁。

戲賦一絶示僮僕。

未聞温公來日本。破瓶誰又名斯坂。肉山駕得僕夫勞。往々點心話道遠。予容貌肥大。斤量重。有十八貫有餘。故及肉山事云。又信口述感懷。

下視滄溟仰瞻巖。山如劔戟水如藍。人心日夜危何似。經歷始知此險巖。

道の傍の山焼け上りて煙すさまじく見えける。常に焼けぬるよし。里人語れり。

夫山上炎焼者鬱火也。東海富士可爲證。上古甚炎燒煙無斷。故古歌多詠煙。近世無炎燒。煙亦無見。其山巔。直上炎開一竅。故無抑鬱氣。無火生。故知磐石相壓抑上騰氣。鬱生火。若山上有水。則一湧沸爲温泉。離火在下。坎水在上。爲既濟象。或兼硫黃氣。則治瘡疥。或兼砒石氣。則害物。若有丹石。無火氣。則寒泉也。若無水。惟有火。炎燒發煙而已。人身鬱火爲病。醫療亦其理可符合。

磐石幾重壓峻巔。復陽抑鬱巨超然。痴民妄說地中獄。坐燒捲磨起火烟。

村時雨して空曇れり。所の名も笠島とかや聞けば。濡れずもあらんか。佛坂などいへるも。道の助けなくいと困じにたり。潮を吹立る風冷しく。鯨波など過て柏崎に泊りぬ。

二十五日。風雨終日蕭索。前途有野渡。近海危甚。不得晴難過。行人征馬皆替留。予對

野亭賤子。爲_二爐頭話_一。及_二柏崎諷曲義_一。賤子告云。古有_二郡主_一。號_二柏崎殿_一。有_レ橋名_二竈馬橋_一。宅地今存。餘_二礎石_一而已。

越州柏崎聞_二華夷_一。懷舊傷_レ情賦_二一詩_一。縣令跡空存_二礎石_一。緬知尋_レ子母堂慈。

雨晴ければ芥河を渡りぬ。津の國の河の名と同じければ。過來し跡の方思ひ出でずもあらずかし。

思ふことかきやながさん芥河かへらぬ水に心とめずて

船より上りて宮川と云所に来ぬ。伊勢の國にはあらねど。祓_レする豊宮川の敷島の波の數より君を祈りぬ。など聞えし古き歌など誦して。椎谷石地などいふ濱邊をたどりぬ。

海濱有_二大檣柱_一。人集見。里人云。是逢_二石尤風_一。巨舶摧裂。人并所_レ載資財_一無_レ見。只爲_二波濤_一動搖。檣柱來_レ此。嗚呼。

朔風吹下動_二崔嵬_一。九萬里程巨舶摧。可_レ怜_二群賊多_一人世。三物同_レ情酒色財。

出雲崎といふ所は。佐渡に船渡しする湊にて。民家多く軒を並べり。山田などいふ所を過て。磯際昏くなりぬ。海の方顧ければ。那古の浦にはあらねど。夕日を洗ふ景色哀れに心細し。

白雲も波もへだて、沖中に入日かくろふ秋の海面

日も暮ぬれど借るべき宿もなければ。燈火の光を頼みて道を急ぎ。寺泊といふ所に泊りぬ。

廿七日。宿を出て。地藏堂と云所に行て。船を借りて流れに棹して。彌彦の山後に見なして。大佛と云所にて船より上りぬ。夜已に明ぬれば。暫時人家に立寄りて休息しぬ。

廿八日。山路を上り下りて過ぬ。光智法印とかや。幾年にか成ぬらん。朽ずして座禪の床にあるよし。此近き山の上に堂ありと。里人語るを聞て。怪しき事に覺えぬ。彼の金沙灘頭鎖子骨とかや。傳燈錄など云ものに言へる類ひなるか。佛菩薩などさまの事あるにや。其道に暗ければ道理識りがたし。鹽屋と云所に泊りぬ。

廿九日。つとめて宿を出づ。岩船と云所に先づ假に居るべき宿ありて。主の男出迎ひぬ。村上も程近しなど聞て。はるく來ぬるもの哉と思へり。此岩船と云ふは里の名にして。又は七郡の一つの名なるべし。千早振神代に。天の岩船に乗りて天降ります。など云事あれば。神代の故事まで思ひ出たり。其上陰陽二神先づ淡路の洲を産み給ひ。大和の洲。伊豫洲。筑紫洲。億岐洲。佐渡洲。越洲。吉備洲を産み給ふ。是故に是を八洲とは云へり。今此越の國は。八洲の一つにて。六十餘りの國現れし始めなるべし。八洲の外までも治まりたる御代なれば。斯る浦山幾個か隔て。天さかるひなの長路なれど。やつがれが兄なる人も。又は妻なりけるも。下部に至るまで残らず。何の恙もなくして着きぬ。

三越後州地最懸。北風中土幾山川。八洲安穩扶桑裡。神德永施億萬千。

晦日の朝。村上に着きて。頓て君より給はりし家居に移り。有がたく覺えぬ。御世所の榮行く事を心に籠めて。口々にことぶき合ひ。

元禄申年初冬日

長途のつかれに。身倦み手ふるへ筆執るべき道もわきまふる事なく。夢の裡に夢みる心になん。鳥の跡定かならず。搔遣捨つべき物ならし。

磯氏一峰

こし地紀行終

庚子道の記

武女

女は疆を越えずとこそ。古き書にもいへ。されどそはうるはしき人の上なめり。あまの子のよるべなき身はさそふ水にまかせて。西へ流れ東へさすらひて。つひの終り定めかねぬぞ。あはれに淺ましきわざなる。然りとて如何はせむ。此春は故郷のあづまの花に催されぬ。七年あまりなれし人々の。名残も大方ならねど。猶親のおはさん方に。心いそがるゝを。かのうちとけてしのぶ顔なる心になんあると。人の思ひくださんも。さすがにやさしう。はたわづらはしきすぢなりけり。かくいふまでは猶尾張のくに名古屋なりき。きさらぎ二十日あまりなぬかの曉ふかく旅だちしに。細うかすかなる月の霞のそこに見えたる。例よりもことにあはれなり。

あすも又見つゝをゆかん月ながら此あかつきは涙おちけり

熱田の鳥居濱にいづるほど。夜あけにけり。井戸田といふ所は。いにしへやごとなき人の。まばし住み給ひしあど也。琵琶の音に神のめでたまひけんなど。いとかしこし。鳴海をすぐとて。うきにさへなれてなるみのあまたゝび浦のはま路を行通ひぬる

とはいへど。今は浦づたふ道はおきて上野の道のなほ上をぞ行きかふことになんなりぬる。尾張と三河とのさかひ志賀須香といふ渡りせしよし。古き道の記どもにかけれど。今はさるわたりありとも見えぬ。境川とて細き流のあるに。土橋ひとつかけたり。これまで送りにとて來し人の歸るに。尾張に某人のもとにとて。ふみかきて囁く。

うかりしも今ぞ戀しきしかすがに住こし里をいでぬとももへば
年ごろ尾張をすみうくのみ思ひしに。三河にかゝるほどは。さすがになごりも惜かりけり。ふみの言葉にも。こゝろざす故郷にとくつきてなど書きしを。例のわびしき心よと。あとにさへいふなるべし。八橋は中將のいこひ給ひし所なり。今もかきつばたの咲くにかあらん。道のついでならねば。よそになして過ぎゆくものから。

かきつばたへだつてもあやし心にはかけつるものをぬまの八橋
二むら山はあとなりけん。宮路山は此あたりなるべけれど。矢矧の里すぐるほどより。名さへなつかしからぬ。ひぢかさ雨とか降り出て。簗つけし馬いづらなど。従者ども立さわぐほど。いぶせき駕籠のうちにあるければ。物もおぼえず。藤川といふほどより。日もくれしなるべし。御油の宿に宵すがりてつきぬ。こゝには女どものあまたありて。たはれをの心とるけしきなり。難波わたりなど歌ふにもあらで。たゞだみたる聲して。さかしらにくちとなる物いひ聞ゆ。

おのづからみもひたしけぬ旅やかたはづかしと思ふ人しなければ
あなかま。女のほこりかなるは。人の憎むにをといふ。廿八日。つとめて御油を出づ。吉田といふ所の橋を渡れば。左にをかしき山の見ゆるを。人に問へば。石巻山とぞいふ。このあたり領り給ふ君のうへに。もし不思議の事あらんとては。此山の鳴ることありとぞ。草のかき葉も言やめし世にあることにかはと。あらがうて過ぐる人もあり。高師山は文字にかきけるが。いみじう目だし。いづれの山に何をか教へて。さる名をば負ひにけん。又都さへまだしと思ふに。山の櫻さきたるもあやし。

道いそぐをちかた人もとまりけりたかしの山の花のした陰

潮見といへる坂の上よりは。遠江の海原はるく見わたさる。たかし山ふもとの濱とよめるは。此わたりなるべし。馬あふをのこの語りけるは。十とせばかり昔の事なりけり。難波よりあづまへ通ふ舟のありしに。この白菅の港近くにて。あらしき風にあひ。舟は岩に當りて砕けつるに。帆ばしら楫などの折れたるにとりつきて。十一人乗りたる者。ひとりも沈までたゞよへるが。日敷十九日経しとぞ。廿日に當るあした。荒江の沖にて釣する者どもの見つけて。あはれがりておのが舟に助けのせ。關所にまゐりて斯うくと申しつれば。能くもつかまつりぬとて。おほやけ迄きこえ上げ。祿などかづけさせ給ひけり。さてかの舟人どもの中にも。老たる

が一人亡くなりて。残り皆事なくならへつゝ。今猶難波に還りすみて。年毎にかの釣人のもとに消息し。むくいすとなん。げにかばかりの不思議の命も。あるものにやあらん。濱名の橋は跡だにさだかならず。過來し里の名に。橋本などいふ所のあるや。むかしの名残ならむ。坂田の橋ならば。せめて桁よりも行かんを。

名のみなほ聞こそわたれ東路のはまな橋はあとだにもなし

小宰相の君の歌に。濱名川入しほ遠き山おろしにたかしの沖もあれまさる也。とよみ給へるも此所なるべし。たかしの濱高砂の沖などは。和泉にあるをぞ歌にはよめる。また濱名の橋は入江にかけられし橋なれば。濱名川とよみ給へるもいかにぞやなど。言ふ者のありし。さばれ下れる世の人の。いかでいにしへの事をば定むべき。荒江。ふねにて渡る。けふは風もなく。わづらはしからず。唐に賈島といへる人の。并州といふ國に久しう住なれて後。都にかへり上りける時。桑乾といふ渡りすとて。思ひつゞけたりし詩の。今身の上に合ひたるを。ふと思ひ出て。いよいよあはれにて。幾度か誦しけるに。文字五つ六つ變へたれば。悪う聞ゆるもひとつは興あり。

客舍尾州已七霜。歸心日夜憶東陽。無端更渡新江水。却望尾州是故郷。

かく誦するを。をこなりとて舟舉りて笑ふ。何かさのみはあとしめ給ふらん。才も不才も皆故郷ひとつはもたるをといふを。又笑ふもをかし。舞坂につきぬ。猶ゆき〜て引馬の宿にやどる。

ひめ小松ひくまの野べのかり枕げにねのひするひとぞおほかる

道につかれて人々のいぎたなく臥したるを見て。忍びやかにかくつぶやけば。例の口さがなさよとて。今宵を制す。引馬野は早くより濱松ともいふなり。げに濱邊に松どもの多く生たりしが。風にふかれて颯々となる音の。いみじうめでたく聞ゆ。人のかしづく婿君などの來り給ふに。酒のみたちて。濱松のおとはと。をのこどもの歌ふは。この所よりの事ならんかし。

はま松にあらしふく夜は殊さらに大君きませいざふたりねむ

女どもだちの若く實要なるは。顔うちあかめて。なほわびしかゝるそらる言は。源内侍などこそ言ひつれと憎むに。あらず。よの常の人こそ物はぢはすべかめれ。あそびのものゝ上臈らしきは。今やうならずとて。みさかなに何よけん名決明さだをかかせよけん歌へば。何につけても皆をかしやとて。ほんとさへ笑ふ。廿九日。濱松を夜深に出ぬ。雨ふり出て横さまにしぶくめり。あけぬほどわびし言はん方なし。天龍川わたるとて。

舟さして雲の水脈ゆくこゝちしぬ名もおそろしき天のな川

圓位上人のはづかしめられ給ひけん。むかし人はいかに。棹の車ならでも袂はぬれぬべし。見つ

けの宿。

さらでだに毛をふき疵をもとむ世に見つけといへる里の名ぞうき
懸川葛布おほし。

かけ川にさらす葛布かすならぬ身のうはぎにといざ求めてん
承久のむかしを思ひ出づるに。菊川いとあはれなりや。袖しきかぬると詠める歌のあるに。今
日は雨さへ降りて。げにわたくしの旅ならば。宿らまほしきなり。

今もなほかやがのきばに雨もりてむかしおぼゆる菊川のやど
小夜の中山は名高き所なれば。今いふもさら也。光行朝臣の書き給へるものにも。いと面目あ
るさまに見ゆ。

齡はまだみそぢがほどにゆくど來と八度こえけり小夜の中山
夕ぐれ大井川の水まさりぬれば。駿河へわたらで金谷にやどる。晦日。雨はれて日麗和になり
ぬ。河原へ出て見るに。やゝ水落ちて石いでたり。されどもとつ瀬渡るほど。今やさかまく
水に落ちいらましと。恐ろしさ言はん方なし。辛うじてむかひにつきぬ。後思ひ出るだに筆ふ
るへて。その折の事大かたはもらしつ。ふせ屋の板敷に尻かけて。暫し後るゝ人待つほど。
大井川水おとたかきよひくは岸のとまやに夢もむすばむ

と思ひやらる。島田の入口左りの方へ。並木の櫻うゑわたして。奥よりて玉垣まわたしたる社
の見ゆるを。いかなる神にか。おはすると問へば。大井の神とをしへぬ。いづれの神をまつり
けん。式などにのり給へるか知らず。幾度か廣前をすぎながら。花のたよりにつけて。今日な
ん見いで奉りたる。

なほざりのぬさとは見え神垣に春の手向し花の白ゆふ
瀬戸川を渡るに見ゆるを。烏帽子山と教ふ。柳さびなどのいやしきにはあらで。もろ眉の霞に
こもりたるが。いとおかしと覺ゆ。宇都の山越に修行者ふたりみたり逢ひたり。むかし物語の
けしきにはあらで。馬に乗りて行くなりけり。法師などは。いつも歩行にて寢れたらむが。さ
まよくやさし。此行者どもは。肥えあぶらづきて。常にさうじ物のあしきを食ふとは。見えざ
りけり。彼にそいろなる文など言づけたらば。物ゆかしがりて。おのれ先づ開きても見るらむ
ど。思ひやるも罪深くや。山のそばに壘のさきたるを。

やよすみれ心にまかす旅ならばひとよはねなんうつの山べに
みやま木の中に。櫻の咲たるを見つけたるは。誠にしるべ得たるこゝちして。珍らしくも哀に
もぞ覺ゆる。散りて谷川に流るゝさま。はためたし。
雲と見え雪とちり行くはては又はなの浪たつ宇都の山河

九子の宿のうしろの山に。火の高くもゆれば。うち驚かれて。あれは如何にと問へば。蕨のた
め焼くなりと答ふ。たゞ春のひにと思はるゝに。風さへふけばいと心もとなし。

春の野に下もえいそぐさわらびをさのみは人のやかずもあらなん
阿部川のほとりより暮かゝりて。賤機山も顯證には見えず。

鶯のこゑのあやめもわかぬまで早暮れそむるまづはたの山

今宵のやどりは。江尻といふ所也。そのかみ笄もせざりしほどにて。伯父なりける僧に俱し
て。京へ上りし時。此宿に伯父の僧の知れる人あるが。三保の松原見せし事ありき。家のうし
ろより舟さし出て。富士は更なり。伊豆駿河海に。信濃の山々さへ見えわたるけしき。今
も猶おもかげに立つこゝちす。松原のうちには。三保の御神の御社おはす。戸祝などの妻子俱
したるが。家も廣く従者などの多くて住む也。よそより見しさまは。海原の中に。さゝやかに
さし出たる所なれば。さこそ心細う。すゝなる目のみ見るらんと思ふに。そこに至りて見れ
ば。さもあらざりけり。波のおど風の聲などこそさはがしけれ。それも世の中の渡り苦しきに
比べては。いつも和ぎたるこゝちこそせめ。神の御厨の。昔より寄せられたるあれば。朝夕の
けぶり絶ゆる事なしとぞ。宮司は大田といへるが。ぶんやの助にて六位のものなり。娘ひとり
もたるを。いたうかしづける様なり。まらうどのある時は。必この娘に箏すゝめて其夜もひき

けり。呂律の調べにこそあらね。筑紫箏のいやしげなるも。鄙には有がたう珍らしう聞ゆ。三
保は姫神におはすればこそあれ。彼屋のむねよりおよび給ひけん神などの邊りならば。親のい
かに心もとながらんとをかし。娘はおのれに三つ四つもおよすけし様に覺えたれば。老嫗にや
なりにけん。いかにえにしなど定まりて。子などもたるか。それと互みに。物など聞えしこと
はなかりしも。旅寝の物さびしきにつきて。斯る人の上さへ思ひ出られてこそ。なつかしかり
しか。三月朔日。江尻を出で、興津のあひだ。かの名たゝる松原見えたり。

清見がた霞のまより見わたせば浪にたゆたふ三保の松ばら

深草の上人の。母を俱し奉りて身延へ詣で給ひしに。残月我を送る清見が關と作られしは。か
らうたなれど。えんに聞きなされて。先づ思ひ出らる。今は波のみ關守りて。むかしの跡はな
けれど。猶心はどまるなり。蒲原へかゝる山道の左のかたに。岩もる車の滴るを。清げに物に
うけて。心太賣る者あり。此水は九郎義經の硯の水といひ傳へぬ。冠者にて奥へ下り給ひし時。
此水のもとにて。都への文など書い給ひきと。目のあたり見しやうに言ふを。皆人いみじがり
て。折はまだ寒けれど。心わかう水飲むもありけり。浮島が原より富士の山近くみゆ。いたゞ
きには雲のなたびきて。肩のほとりより雪いと白うかゝり。裾はなべて縁に見ゆめり。今めき
たる濃濃の几帳など立てたらんさまの。筆にも言葉にもいひ盡し難きけしきなり。鹽尻と言ふ

名の。あてにも聞えぬを。京極中納言の。にくしと思ひ給ひけんも道理なりや。
ちりつもる山てふ山をかさねてや名高きふむの峰となりけむ
かくて千本の松原を見やりつゝ。沼津の宿にやどる。二日は關をこゆとて。夜深く宿をたちて。
星のひかりや、白むころ。伊豆の國府につく。三島の神の御社の前にしばし憩ふほど。女はさ
はりがちにて。えまうです。心ばかりのぬさ奉るついでに。

行歸りみしまの神の宮よりもふりぬるものは我身なりけり
箱根山に入るに。初音が原といふ所を過ぐ。枯たる杉のむら立てるうちに。鶯のひなどもの巢
だちたるが。多く鳴くをきくに。春は早おくれたれど。猶めづらしきこゝちす。何某の僧正に
きかせ奉らましかば。郭公ならでもおぼすらんよなど言ひて。すける人々は歌よむもあるべし。
みつやなどいふあたりは。緑の林茂りたる蔭をたのみて。世にしらぬもの、旅行く人をわづら
はせし事。むかしはありしにこそ。今は里人の家居もあまた建續きて。道ひろき御代なれば。
心ゆるして馬の上こしの内などにある限りは。眠りてさへも行く也。山中といふ所に糸櫻の見
ゆるを。

玉くしげ箱根の山のいと櫻あけなばいかゞよるのみぞ見む

といへば。月の夜などはこの歌もあはれならんとて笑ふ。げに旅にていひ出る言は。常のに今

一きは劣りて。われさへ覺ゆれど。後引直さんもものうくて。さて置きし也。午の時ばかり關
にいたる。山のかひには。くぎぬきまわたり。關屋には弓やなぐひなど。きら／＼しう置かせ
たれば。ことなき身にも胸つぶれ。手足さへぞふるふ。かしこき陰とたのみつる笠も扇もどら
れたれば。つくろはぬ面に。ふくだみたる髪のとぼれかゝりて。いかに見苦しからむと。汗あ
えてけり。さは言へ。あそびくゝつの類は。人の外なる定ありとて。聊かのさはりもなく通し
給ひつ。嬉しと言はまし。哀しと言はまし。今日は坂あまた越ゆるに。山駕籠も不要なり
とて。歩み苦しき石の上を。徒歩にてたどりけるまゝ。いといたう疲れ困む。畑湯本風祭小
田原。節は五月とかや。されど彌生の三日こそ。心もはなやぎて。桃のほひに空さへ酔へる
景色は。菖蒲の長きねも。かけて及ぶまじう覺えたれ。早川の瀬渡るほど。巳の日の祓おもひ
出でし。

早川にくだす鹽木をあまの子の身のかたしるど人や見るらん

川を渡れば酒匂といへる里なり。こゆるぎの磯近き宮屋の内にも。離遊する少女どもは。桃
山吹の花など。こちたきまで瓶にさし。今日の日の暮るゝを惜しと思へるさま也。野に出て。
は、こなど摘むもあるは。今日の餅の爲なるべし。七とせのむかし此所を過けるは。九月九日
にて。別れ來し親同胞の事など。思ひ出て哀しかりしに。けふは一二日のうちに逢見んことを

思へば。嬉しき餘り心さへときめきして。それとなく打笑みがちなるを。かたへなる人らは。物狂はしきにやなとも思ふらんよ。明日は府にまれば。公私の用意ありとて。男のかざり皆戸塚の宿に急ぐまゝに。獨りのどかにも行き難くて。同じさまに宿りにつきぬ。三日の夜より雨ふり出でし。翌朝も猶やまず。金川河崎品川などいふ驛々も。たゞ過にすぎ來て芝にまゐる。こゝより大路のさま。貴き賤き袖をつらね。馬車たてぬきに行かひ。はえくしく賑はへるけしき。七とせの眠り一とせに覺めし心ちして。嬉しき言はんかたなし。其夜は御館にありて。三月五日といふに。ふるき家居には歸りぬ。言ふかひなければ。親族のかざり。近きはをばいとこなど待集まりて。とりくし何事を言ふも先づ覺えず。幼き妹の一人ありしも。いつかねびまさりて。髪などあげたれば。我が方には見忘れたるを。かれより打出でんも。つつましくやありけん。をばの後ろに隠れて。なま怨めしと思へるけしきに。見おこせたるまゝ。猶心得ずして。そこにもし給ふは。何れよりの客人にかあはす。ゆゑしげなる言には侍れど過行き侍りし母のおもかげに。あさましき迄似かよひ給ふめるはと問へば。かれはうつぶしになりて面もたげず。叔母も鼻せまりて物言ひやらす。皆はと笑ふにぞ。初めて心づきぬ。かくて盃あぐるほど。老たる父の佐々目にいます。やがてまゐり給へりと妹のいふ。

庚子道の記終

熱海紀行

横井也 有

府君の御母公。浴せさせ給はむとて。延享の今年。江戸より豆州の熱海と云る所へ渡らせ給ふ。御供仕うまつり。葉月の廿九日。江戸を出て。熱海に到るは長月二日なり。

草の葉に月の旅寐も二日から

此里の様。後に山環り前に海近くして。いざ見ぬ須磨の景色も斯や有らんと。折から秋の寐覺も心澄む旅寐には有ける。湯本は殊に我舎の後に近ければ。日夜に六回許。おどろくしく湧出る音高く。山水浦波に響合ひて。鬨ましき物から。世の中と渡り競べて。如何にとか云べき。綱引釣する業もあれど。居立ちて己が世の生業とするものは少し。耳馴れぬ魚の名ども。うづは。ひらこ。はまち。そうたなど。後には自から見覺えて皆言ふ。山田色づく比にて。鹿追ふ小屋に引板引鳴すなど。珍しう哀れなり。鹿の聲は終夜聞えて。夕霧の卷など讀む心地す。夜は湯にぬれさす袖を鹿の聲。宵々の眺えならず。浪寄する浦の景色。我舎の東面よりも。月は殊に海より出て山に入る。

隈なく見え渡れば。明暮欄干に打もたれて。烏帽子着たらましかば。我を屏風の繪に畫くべきをど笑ふ。

ほし棹の是にも月や濡浴衣

尾花ちるかたはへりけり浦の波

打まぜて浪にまけたる砧かな

釣舟や案山子のり行く波の上

亭主の子彦助と云ふ。年十四許。常に來馴れて。蚤の囀りめきて。所の事など聞覚えて語る。彼に案内させて。あたりの宮寺など見巡り。漁家に茶を乞ひ。樵夫に烟草の火借りて。吟歩機を忘るゝ程。言捨てたる句ども。例の知人の許に書付けて遣はす。登歩一里許。日金山に登れば地藏堂あり。駿豆の海山眼下に列り。景色言ふばかりなし。富士は西に限なく。他山の秋に別れて。雪白き姿。衣錦尙細とか云へる。此山の徳に比すべきにぞ。

四方山の錦や富士にはづかしき

都松と云へるは。染殿の後の跡の標なりと。野老の言傳へたりと語る。何れの時にか。柿本紀僧正。染殿の后と密通の事ありとて。さらぬ疑ひの科にて。爰に流されて後失せ給ふ。后は八幡と齋ひ。紀僧正も宮と齋ひしが。其仇名の憂を厭ひて。二ツの祠往昔は互ひに相背きて有り

し。今は八幡は外に移して。其謂れも残り侍らず。常に后の都を戀ひ給ひしが。跡の標の松も。都の方へ枝葉指向ひければ。是を都松と云ひける。僧正の社の際に。大きな櫻の有りし。中比此後に御殿作りけるが。障なりとて此木を伐りしかば。彼松も程なく枯れにけりとぞ。其木の共に枯れたる契ならば。濡衣の名も如何なりけんと思束なし。

松枯れてどの木へ蔦や所がへ

僧正の祠は。特に大きな椎の木二本の挾間にあり。

御所柿の色にこりてや椎が本

湯前権現に我疾を禱る。

新蕎麥や疝氣に利生見せたまへ

伊豆権現奉納。

海と山兩部に月のくまもなし

業平井は里中にあり。爰の男女の常に水汲む影寫して。自から妹脊の媒ともなれば。言習はしたりとぞ。

豆ひきの影や井筒にまめ男

平左衛門湯と云あり。平左衛門かひなしと呼れば湧出づるとて。里の子共の呼びて。旅客に錢

なごもらふ。

子どもいざ呼れ紅葉に立田姫
重陽に會ふ。

選り出して菊を祝はむ草枕
後の月。

山の湯も鯀餽にわくか後の月
木の宮。

木の宮も草からさきへ秋くれぬ
暮秋。

行秋の干魚に残る鳴子かな
天神。

飛石や梅にまけむと霜の花
眞鶴が崎。

まな鶴もみじかき冬の日あし哉
大島は遠く微なり。

大島や片目しぐるゝ遠眼鏡

初島は最小さき島の。向に近く浮べり。沖の小島は是也と云。又は大島を云りとも。里人の傳へも區々なり。

木がらしや片手に撫る島ひとつ

十月十三日。熱海を立たせ給ひて。江府へ歸らせ給ふ。道すがら鎌倉に三夜ばかりおはして。寺社古跡とも御覽ず。隨ひ奉りて遺りなく見巡る程。句など言ふべき所も多かりけれど。事に紛れて皆洩しつ。道を守りの神に申す。

守り給へ神もお旅の道すがら
榎の島。

此神の御手にやにほふ琵琶の花

白菊が淵。

十月やげに白菊の名もむかし

龍穴。

此洞をおもへば神も冬籠

鎌倉にて。

鎌倉の鎌の名さびて枯野かな
梶原が矢筈も冬の案山子哉
何某の寺にて重衡の盃を見る。

盃に銚子もそへず寒さ哉
盛久が首の座。

盛久が命や濱のかへり花

鶴が岡八幡。

御供して鶴も留守なり神の松

十九日。金澤の方に廻らせ給ふ。「能見堂と云へるより八景を見渡す。奇絶の勝景言葉に述べ難し。折から打時雨しに。

八景のうちふたつみつ時雨けり

廿一日。武府に歸らせ給ふ。

熱海紀行終

東行筆記

湯淺常山

岡山。(至藤井驛二里)。

藤井。(至片上驛四里八町)。吉井川船渡し。吉井川を渡りて。道の北に熊山あり。延元二年。新田義貞白旗の城を圍まれし時。脇屋義助の諫めによりて。宇都宮と菊池が勢二万餘。船坂山へ向けらる。彼山と申すは山陽第一の難所也。兩方は嶺峨々として。中に一の細道あり。見上げて日を送りけるを。兒島三郎高德聞いて。使を新田殿に遣はし。熊山に偽兵を擧ぐべし。さる程ならば凶徒熊山に寄せ來らん。其隙に二手に分けられ。一手は船坂山に向ひ。一手は三石山の南の樵路より三石の宿の西に出でられ候へば。敵引方を失はむと謀を合せ。高德其勢二百餘騎。熊山に上りける。熊山の高さ比叡山の如くにして。四方に七の道あり。麓は少し險にて峯は平ら也。やがて敵押寄せて終日戦ひけるが。寄手の中に石戸三郎と云者。案内を能く知りて忍び入り。本堂の後ろなる峰にて関を揚げ攻戦ひしかば。高德内兜に痛傷負ひたりけるを。父範長激勵して。主従十七騎敵の中へ驅入りける間。一立合もせず南面の長坂を。福岡までこ

そ引きたれど。太平記に見ゆ。山の景狀記せし處に違はず。即ち今も巔にある本堂の前。高德が戦ひの所也。鐘樓の隅なる石。高德腰かけて士卒に令せしと言傳へて。高德が腰かけ石とて有り。

片上。(至三石驛二里半六町)。

三石。(至宇根驛二里半十五町)。船坂山は備前播磨の境也。後醍醐帝を。北條氏隱岐に遷し奉る時。備前國の兒島備後三郎高德。志を帝に寄せ奉り。臨幸の路にて奪ひ取り奉らむと謀りて。

船坂山の巔に隠れて待ちたりけるに。播磨の御宿より山陰道にかゝらせ給ひける故。高德支度協はで。美作の國院の庄へ入らせたまひたる御宿の庭の櫻の木に。詩の句を書きたる事太平記に見ゆ。又延元二年。新田義貞兵を船坂に進めて合戦あり。兵を三手に分ち。一手は馬の舌を結び。杉坂の北三石の南の細道より攻入りて軍ありし事。是も太平記に見ゆ。

宇根。(至片島驛三里三町)。宇根川は。宇根の宿の東に有り船渡し。此川の上西に赤松氏が居住せし昔繩の城趾あり。川を隔て、昔繩の東に白旗山あり。

片島。(至姫路四里八町)。沙川あり阿蘇川と云ふ。又鵜村寺あり班鳩寺と稱す。推古帝の御時。

播磨國水田百町。皇太子の班鳩寺に施すと云ふ事日本記に見え。又鎌倉の右大将頼朝卿の下文に。播磨國鵜庄。上宮太子の聖跡法隆寺領。地頭金子十郎妨事停止すべきの事。東鑑に見えたり。

り。青山川。歩渡り。家持家集に。

君こふといも寐られぬにほとゝぎす青山へより鳴きわたるなり。

赤人家集に。

青山のあをみの花のにくからぬ君にはじめやよかれは戀し

姫路。(至加古川驛三里)。姫路は筋摩郡也。方角抄に。筋摩の里は印南野の西也と。新續古今俊成卿。

たのまずばまかまのかちのいろを見よあひそめてこそ深く成ぬれ

其外歌多し。御着は。姫路より一里東なり。

阿彌陀が宿。源尊氏西國より攻上られし時。脇屋義助播磨へ引れしに。兒島備後守範長。子

息三郎高德。三石の南の山路を終夜越えてさこしの浦へ出で。脇屋殿に追付かんとせしが。高德前の軍に疵を蒙りたるが。目暗く成てければ。相識れる僧に托け置き。濱邊を打過ぎけるを。

赤松が兵。路を遮つてければ打破りて。那波より阿彌陀が宿まで十八度戦ひ。主従六騎に討成され。辻堂に入て範長自害しけり。赤松の手の大将宇彌左衛門次郎重氏と云者。葬禮して遺骨

を故郷へ送りし事。太平記に見えたり。賀古川。船わたし。

賀古川。(至明石五里)。續古今後鳥羽院御製。

賀古の島松原こしに見渡せばあり明の月に田鶴ぞ鳴くなる
新續古今國豊。

さしのぼる賀古の湊の夕しほに松原こして千鳥なくなり
賀古は郡の名なり。

印南。郡の名なり。(今賀古川以東賀古以西は印南郡也)。印南は賀古郡にありて明石郡まで懸りたり。此野の名。郡の名に出たるなるべし。然らば印南郡の境。昔と今と更りたる成るべし。賀古川より志水村の邊一里餘り。脇に牛頭天王の祠あり。此南を印南野と云ふ。野中の清水此處にあり。古今詠人志らず。

いにしへの野中の清水ぬるけれどもとの心を志る人ぞなき
拾遺に能宣。

をみなへし我に宿かせいなみ野のいなといふともこゝを過めや

歌林良材に。野中の清水は。播磨國いなみ野にあり。昔はめでたき水にて有りける。末の世にぬるく成りぬれど。むかしを聞傳へたる者は尋ねて飲みけるなり。能因法師の歌枕には。野中の清水は本の妻を云ふといへり。方角抄に。人丸塚をば大倉谷より西に見て下れば。蟹が坂と

いふ所を過ればと云々。又人丸塚は大倉谷より十丁許り西に松など村立て。舊跡今にあり云々。(人丸塚は大和播磨石見三所になん有るなり。人丸石見の國にて卒せられし事萬葉集に見えられば。實に石見の高角山に在るをもて正しき墳とはすべき也。されども石見は都に遠き故にやあらむ。人丸塚の事。中比より聞えず。名所方角抄には見えたり。玉葉集に。清輔朝臣人丸墓に卒都婆立侍るとて書付侍る

世を経ても逢ふべかりける契りこそ昔の下にも朽ちせざりけれ

顯昭が勘物にも。大和栴本寺人丸墓にて卒都婆を立て。此歌をよみて記し付し由。則ち清輔の物語りありし事見えれば。大和にての歌なる事明らかかなり。又寂蓮の。

古きあどを苔の下まで尋ねずはのこれる栴の本を見ましや

と詠みたるは是れも大和にての事なるか。されども其詞に。栴本明神に詣で。とあるを思へば。寂蓮の歌は明石の墓にての事にや。玉葉に記されしは。人丸の墓とあるによりて。一所の事の如くに記されたらんも知るべからず。大和の墓の邊には栴本寺の礎のみ残りし由。清輔も物語ありしと。顯昭も志るし置かれて。宮の事は聞えず。尤も今も歌塚と云ふ塚ばかりにて。社もなければ。寂蓮の歌は明石にて詠れしと覺ゆるなり。(明石。(至兵庫驛五里)。薩摩守忠度の塚。明石の城の東。人家の間に在り。異本平家物語に。忠

度の落足を記して。忠度唯一騎明石を指して落ちられけるに。岡部六彌太忠澄追ひかければ。取つて返し引組んで討たれたまひし由見えたり。此處に墓の有るべき證と覺ゆ。忠澄良首討ち奉りたりとは思へども名を知らざりけるが。箆に付られたる文を取て見ければ。旅宿花と云ふ題に。

行きくれて木の下かけを宿とせば花やこよひのあるじならまし 忠 度
と書かれたる故にこそ。薩摩守とは知りてけれ。と平家物語に見えたり。又岐蘇の義仲平安城に攻入らむとせし時。平家の一族 安徳帝を奉じて西國に落行かれしに。薩摩守半途より引返して。五條の三位俊成卿の許におはして。一門の運命今日早盡果候。撰集の御沙汰有るべき由承りて候ひし程に。一首なりとも御恩を蒙らんとて。百餘首書集められたる巻物を。鐵の引合より取出て奉らる。俊成の卿。かゝる遺れがたみを賜はり候上は。努々疎畧を存ずまじう候。扱も只今の御わたりこそ情も深う憐れも殊に勝れてこそ候へと曰へば。薩摩守。屍を野山に晒さばさらせ。浮名を西海の波に流さばながせ。今は思ひ置く事なしとて。馬に打乗り胃の緒を締て落られし。其後千載集に。故郷の花と云題にて詠まれたりけるを。よみ人志らずとて入れられたり。

さゝ波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山さくら哉

是も平家物語に見ゆ。近比筑波の石正湍が

江山天幕宿ニ誰家。客少芳菲棲ニ亂鴉。龍去六軍行幸日。歌成千載故郷花。無邊風雨摧ニ瓊樹。一片春雲捲ニ赤霞。唯有須磨浦上月。松濤依レ舊落ニ平沙。

といへる詩は忠度を詠したるなり。大倉谷。風雅集に。大納言尊氏。世の中さわがしく侍りける比。三草山を通りて大倉谷と云ふ所にて。

今むかふ方はあかしの浦ながらまだはれやらぬわがおもひ哉
源氏の君須磨に謫居の後。明石の入道臈して迎へまゐらせしかば。濱の館に入らせたまへる事を。源氏物語に詳かにあるして。

はるかにも思ひやるかなまらざりし浦よりをちに浦つたひして。

と詠みたまひ。むかしの物がたりなど入道に聞きたまひ。唯目の前に見やらるゝは淡路島なり。あはと遙かになど宣ひて。(躬恒の歌に。あわちにてあはとはるかに見し月のちかきこよひは所からかも)。

あはと見るあわぢの島のあはれさへ残るくまなくすめる夜の月
久しう手も觸れたまはぬ琴を袋より取出て。はかなく搔ならし給へると云々。廣陵と云ふ手を

有る限りひきすまし給へる。彼の岡部の家も松の響き。波の音に合ひて。心ばせある少き人は身に入て想ふべかめり云々。入道琵琶の法師に成て。最どをかしう珍らしうて。一つ二つ彈出たり。箏の御琴まゐりたれば少し彈きたまふ云々。又十三日(八月)の月の花やかにさし出たるに。御直衣奉り御馬にて出給ひ。道の程も四方の浦々見渡したまひて。先づ戀しき人の御事を思ひ出聞えたまふに。やがて馬ひきすきておもむきぬべく仰す。

秋の夜のつき毛の駒よ我戀る雲井にかけれ時のまも見む

と打こがれ給ふなど物語に見ゆ。

垂見は明石郡なり。方角抄に。此たるみと云ふは。須磨と大倉谷との中道也といへり。志貴皇子の

岩そゝぐたるひのうへの早わらびのもへ出る春にも成にける哉
袖中抄に顯昭云。津の國と播磨の境に。たるみと云所あり。得も言へぬ水出る故。垂水と云ふなり。垂見の明神と申す神御在と云々。式子内親王。

鶯はまだ聲せねど岩そゝぐたるみの音に春ぞ聞ゆる

鹽屋村。平家物語に。一の谷軍に熊谷次郎直實子息小次郎直家。先驅を志し主従三騎。人も通はぬ田井のはたと云ふ古道を経て。一の谷の浪打際へぞ打出ける。一の谷近う鹽屋と云ふ所に

土肥次郎ひかえたるを打過て。一の谷の西の木戸口へ押寄せたる事。詳かに平家物語に見えたり。

淡路島は。方角抄に。南海の上三里也と見えたり。古今。よみ人あらず。

わだつみのかざしにさせる白妙の波もてゆへる淡路島山

金葉。源兼昌。

淡路島かよふ千鳥の鳴く聲にいく夜ねざめぬ須磨の關守

新古今。慈圓。

秋深き淡路の島の有明にかたむく月をおくる浦風

明石浦。古今。よみ人あらず。(柿の本の人丸の歌也とあるせり)。

ほのくくと明石の浦の朝霧に島かくれ行く船をしぞ思ふ

玉葉。西行法師。

月さゆる明石のせとに風吹けば氷の上にたゝむ白波

續古今。爲家。

あかし瀉昔の跡を尋ね来てこよひも月に袖ぬらしつゝ

新拾遺。後鳥羽院御製。

明石がたはる榜船の鳴がくれ霞にきゆるあどの白波
須磨。方角抄に。須磨の里は兵庫より一里あまり西なり。源氏の住たまひし處は。宿より南海
際に打上りたる處なり。西の濱へ出れば南に岸の高くある所也。又須磨の關屋と云ふは。今は
播磨の内と見えたり。古今集に。田村の御時に。事にあたりて津の國須磨といふ所に籠り侍り
けるに。宮の内なる人に遣はしける。

わくらはに問ふ人あらば須磨の浦にもしほたれつゝわぶとこたへよ
行平の歌也。源氏の君須磨に謫居の事を記して。御座すべき所は。行平の中納言のもしほたれ
つゝわびける家居近きわたり也けり。海面はやゝ入りてあはれに心凄げなる山中なりなどある
して。

あまがつむなげきの中に鹽たれていつまで須磨の浦とながめん
心つくしの秋風に海は少し遠けれど。行平の中納言の關吹こゆると言ひけん浦浪は。夜々は實
に最近く聞え。又なく哀れなる物はかゝる所の秋也けり云々。琴を少しかき鳴し給へるが。
戀わびてなくねにまが浦波は思ふ方より風や吹くらん

海見やらるゝ廊に出たまひてたゝずみ給ふ云々。沖より船どもの唄ひのしりて漕行くなども
聞ゆ。ほのかに只小さき鳥の浮べると見やらるゝも心細氣なるに。雁の列ねて鳴く聲。柁の音

にまがへるを打詠め云々。又今宵は十五夜也けりと思し出て。

みるほどぞまばしなぐさむめぐり逢はん月の都ははるかなれども
其夜うへの最なつかしう昔物語などし給ふ云々。恩賜の御衣は今爰にあり。(菅公太宰府にての
詩の句)。と誦しつゝ入り給ひぬ。御衣は誠に身放たず傍らに置給へり云々。又筑紫の五節の君。
此浦を船にて打過ぎける事を記して。五節の君は綱手引過も口惜しきに。琴の聲風につれて遙
かに聞ゆるなど見えて御消息聞えたり云々。

琴の音にひきとめらるゝ綱手なはたゆたふこゝろ君あるらめや
源氏の君の返しに。

心ありて引手の綱のたゆたはうち過ましや須磨の浦波
又彌生の朔日に出來たる巳の日。今日なんか仰す事ある人は御祓したまひき云々。陰陽師召
して祓せさせ給ふ。俄に風吹出て空もかきくれ。ひぢかさ雨どかふり來て。波いといかめしう
立ちて神鳴ひらめく云々。いよゝゝ鳴轟きておはしますに。續きたる廊に落かゝりぬ。炎燃
上りて廊は焼ぬると云ふ事も。物語に見えたり。近頃明石の文學梁田邦美が。

帝京花萼此飄零。瑣闥風光入夢青。南浦寒烟憐夜月。北山芳艸憶春庭。驪駒留別故
人去。綵鸞傳歌仙客經。百丈崩濤天潑墨。可堪雷雨撼茅亭。

と作りたり。驪駒の事は。葵の上の兄三位中將。須磨に來り給ひて。源氏の君の謫居を訪ひまゐらせられしが。歸京の時源氏の君。驪駒献り給ふと云ふ事。物語に見えたるを作れるなり。續古今。行平。

旅人は袂涼しく成にけり關吹きこゆる須磨の浦風

(花鳥餘情に。關吹越る須磨の浦風の歌は。壬生忠見が集に侍るなり。行平中納言の歌の由此物語に載せたり。それを續古今に。源氏に基きて則ち行平の歌と入たる。たしか成る忠見が歌にて侍り。斯様の事如何なる賢き人の上にも。漢家本朝例しある事なりと見えたり。源氏物語に記し又勅撰に行平と載せられたれば。夫より後の世行平と定めたるにこそ。)

一の谷。二の谷。三の谷相連り。平家物語に。一の谷の事を記して。大將軍九郎御曹司義經一万餘騎を二手に分て。土肥次郎實平に七千餘騎を差添て。一の谷の西の木戸口へ差遣す。我身は三千餘騎にて一の谷の後。鵜越を落さんとて。丹波路より搦手へこそ向はれられ云々。平家の城郭遙かに見下して。義經三十騎ばかり真先かけて落されければ。三千餘騎の兵共皆續いて落す云云。悉いく聲を忍びにして。馬に力を付て落す。落しも果ぬに火を出して平家の館を焼拂ふと見えたり。一の谷を鐵柵が峯とも申すにや。邦美が詩に。

侵氛一抹紫微星。海岸忍留舟翰青。冠蓋春寒風度レ谷。劍瓊雪暗夜過レ庭。鄧軍蜀嶺九天

下。宋主崖山幾月經。赤幟光消空返照。無三人對酒泣新亭。

と見えたり。又登鐵柵峯二絶句。

鐵騎三千雲壓山。翠華一去慘龍顏。鐵燵赤幟春風色。留在夕陽松嶼間。

古壘鳥啼不見人。嶺雲澗水共傷春。誰知夜半風前笛。吹落梅花一作戰塵。

敦盛の石塔とてあり。平家物語に。修理大夫常盛の弟御敦盛とて十七歳に成しが。沖なる船に目をかけ。馬を海へ打入れ五六段泳がせられしに。熊谷次郎直實追驅。扇を揚て招きければ取て返し。波打際にて組て討れ給ひぬ。首を包まんとて鎧直垂を解て見れば。錦の袋に入れられたる笛をぞ腰に挿れたる。あないとおし。此曉城の内にて管絃したまひつるは此人々にて御座ける。優しかりける物をとて。大將軍の見參に入れたりける由詳かに見ゆ。但し盛衰記に。敦盛の尸骸を父の許に直實送り遣はしける事見えれば。此處に埋るに非ざるべし。今須磨寺に敦盛の笛とて傳へたれども。笛も送り返せし事見えれば。あらぬ贗物にぞ有るべき。

西須磨。中須磨。東須磨。とて並べり。後拾遺。能宣。

須磨の浦をけふ過行くとこし方へ歸る浪にや言傳へまし

千載。俊成卿。

五月雨にたく藻の煙うちあめり搥たれまさる須磨の浦人

家隆。

旅寐する須磨の浦路のさよ千鳥聲こそ袖の波はかけられ
新勅撰。慈圓。

もしほやく煙も霧に埋れぬ須磨の關屋の秋の夕暮
續古今。藤原隆博。

ま遠にぞ音も聞ゆる須磨のあまの塩やき衣打すさぶらし
續後拾遺。定家卿。

たびねする夢路はたへぬ須磨の關かよふ千鳥の曉の聲

中須磨の片岸の上に内裏屋敷とて。安德帝の行在所の跡あり。今は世の人西の臺と申すにや。
又中須磨の里の中より須磨寺への道あり。此邊り一の谷の軍破れし時の戰場なり。道の北の池
の中に木村源五が塚あり。又通盛の塚あり。盛衰記に。越前三位通盛は湊川の端を下りに落ら
れしが。木村源三成綱と組んで討れ給ひし由見えたり。平家物語に。越前三位通盛卿は山の手
の大將軍にておはしけるが。其勢皆落失せて討死せられしと見ゆ。小宰相の局の段に。君は今
朝湊川にて討たれさせ給ひぬと告たる事見えたり。小宰相の局と申すは。上西門院の宮女なり
しを。通盛に賜りて西海の波の上にも引具せられぬ。小宰相の局。通盛討たれし後人に語りて。

明日打出んとての夜心細げに打歎きて。あすの軍には必ず討れんと覺ゆるほどになど言ひしに。
さるべき事とも思はで有りつること悲しけれ。など後の世と契らざりけむと言給ひつる事を記
して。其夜海に沈みける。一の谷より八島に押渡らんとて。夜半ばかりの事にて人知らざりけ
りなど詳かに見えたり。此事を近比東都の鶴樓の田伯隣が。帳下美人宵對酒。軍前怒馬曉嘶庭
ど。作りたり。

蓮池。刈藻川。共に池尻村にあり。前武州刺史平知章墓と記せる石碑あり。これは近き比並
河が建たる由なり。新中納言知盛卿は濱へ向つて落ち給ひたるを。見玉黨追駈しかば。知盛卿
の男武藏守知章。中に隔て、討死有し也。刈藻川は眞野の繼橋也と云へり。新續古今。權大納
言堯尋卿。

船よばふ眞野の浦浪はるくと月もよ渡る淀のつぎ橋
又萬葉に。吹黄乃自眞野乃浦の與騰のつぎはし。など見えたり。

駒の林。歌枕名寄に。康頼。
古しへの駒の林の松見ればうつしふるはもかはらざりけり

平家物語に。重衡卿の落足を記して。生田の森の副將軍にておはしけるが。渚の方へ落給ふ。
湊川刈藻川をも打渡り。蓮の池を右手に見て駒の林を左手になし。板屋と須磨をも打過て西を

指して落たまふ。と見えたるにて。此所々の名とも見えたり。
和田の御崎。方角抄に。兵庫の南に出たる洲崎の事也と見ゆ。
玉葉。入道前太政大臣。

夕づく日和田の御崎をこぐ船のかた帆に引やむこの浦風
延元二年。尊氏西國より攻上られし時。官軍此處に支へて合戦ありし日。本間孫四郎重氏が
鳩を射たりし所なり。

湊山。湊川。方角抄に。兵庫の北なる宿也と見えたり。湊川。海に近し。
新勅撰。後徳大寺左大臣。

湊山とことには吹くまほ風に繪しまの松に浪やかくらん
千載。刑部卿範兼。

湊川うきねのどこに聞ゆる生田のおくの小牡鹿の聲

延元の亂に尊氏を支へて。楠正成。弟帶刀正季。七百餘騎にて湊川の西の宿に控へて。陸路
の敵と相戦ひ。左馬頭直義の數万騎を追靡け。直義須磨の上野の方へ引かれたる由。太平記に
見えたり。

兵庫。(至西宮驛四里八丁)。平清盛入道淨海。外戚として權を擅にせし頃。平安城より此處

に暫し都を遷されしなり。其時福原と申す。治承四年六月三日。福原へ御幸成し事。平家物語
に見ゆ。同じき六月九日。新都の事始有て。多くの官人召具して。當國和田の松原西の野を轉
むて。九條の城を割れけるに。一條より五條までは。其所有て。夫より下は無きよし見ゆ。十
二月二日。俄に都還り有けりと云ふ事も見えたり。楠正成の石碑。湊川の北坂本村の田の中に
あり。是は水戸の義公。元祿年中に石碑建させ給ひ。碑面には。嗚呼忠臣楠子之墓と識し。碑
陰には。明の遺民朱舜水の文を鐫たり。石壇二つありて龜趺前に向へり。太平記に正成兄弟戦
に疲れしかば。湊川の北に當りて在家の一村有ける中へ走り入り。一族十三人手の者六十餘人
腹切りける時。七生まで人間に生れて朝敵を亡さばやと。言ひける由見えたり。北に花熊の城
趾の山あり。

生田の森。生田明神の祠。生田川あり。平家物語に。一の谷の城を誌して。西は一の谷を城郭
に構へ。東は生田の森を大手の木戸口とすと見えたり。又源氏は生田の森を五万餘騎にて固め
たり。武藏國の住人河原太郎高直。河原次郎盛直とて兄弟ありけるが。弓杖を突いて生田の森
の逆茂木を登り越て先登し。討死しける事も見えたり。又梶原父子。生田の森の逆茂木を取除
させて城中へ攻入り。次男平次先駈しければ。平三使者を立て。後陣の勢の續かざらん先駈
たらん者には。懸賞有るまじき由大將軍の仰せぞと言せければ。

武夫のとりつたへたる梓弓引ては人のかへすものかは

と詠みたる事も見えたり。又梶原二度の駈して武勇を振ひし事ども。詳に平家物語に見ゆ。盛衰記に。此梶原は心の剛も人に勝れ。すきたる道も優也けり。咲亂れたる梅が枝を簾に添へてぞ挿たりける。かゝれば梅の花は散けれども薫は袖にぞ残りける。平家の公達は花簾とて。優なりやさしと口々にぞ感給ひけると見えたり。又延元に尊氏西國より攻登られし時。新田義貞朝臣防戦はれしに。生田の森を後に當て鬪はれたる事。太平記に詳かなり。敏馬浦は。生田川を渡りて東なり。仙覺萬葉の注に風土記を引て。みぬめの神は原能勢郡敏馬山にあり。神功皇后の御爲に船を造り給ひし由見ゆ。後拾遺。頼康。

よそにだに見ぬめの浦のうつせ貝かひなくひろふ袖はぬれつゝ、
新續古今。定家卿。

たのめ來し里のしるべもとひかねて見ぬめのよそにかへる波哉

布引瀧は。生田の森より北の奥の山にあり。海道よりは遙なれば見えず。此瀧の事は。伊勢物語に詳なり。求塚。此事は萬葉。又大和物語に見えたり。太平記に。摩耶の城の南の麓。求塚八幡林と見えたり。延元元年。新田義貞兵庫の軍に利なくして。尊氏の兵追かけしかば。義貞朝臣。求塚の上に下立て敵の射ける箭を。佩たる太刀にて切て落されし時。小山田太郎高家只

一騎馳來り。己が馬に乗せまゐらせ。追かくる敵を防いで遂に討死しける。是は去年西征の時。高家法を犯して青麥を刈らせける事ありしに。義貞其物の具さはやかにて。食物一粒もなかりける事を以て。田の主ゆしに小袖こそでを與へ。高家に兵糧を賜はりし殊遇しゆぐうに報じて也けり。其事太平記に詳なり。

御影の森。御影川あり。方角抄に。雀の松原の内なり。海道際かいだうざいの道なりと見えたり。續古今。基俊。

世にあらばまた歸りこん津の國の御影の松よおもかけりすな
此邊りより摩耶山まゑやさん近く見ゆ。正慶二年。赤松が苔繩こけなはの城より打出て。此山に陣ちんせし由。此山へ上るに七曲りななまがとて。險けんしく細き路ありといふ事。又其軍の事も太平記に見ゆ。蘆屋あしやの里。灘なたの鹽屋しほやとも云ふ。蘆屋川あり。伊勢物語に見えて。昔の歌に。

蘆の屋の灘の鹽やきいとまなみつけのおぐしもさゝす來にけり

此歌を新古今には業平の歌とす。稱名院しやうめいゐんの説。昔の歌とは遠きむかしに非ず。業平の自記にて其始め詠たると云ふを。むかしと書給ふといふ事也と見えたり。

西宮。(至昆陽驛二里)。角の松原。万葉に。

あま乙女いさりたく火の多くしてすみの松原おもほゆるかな

有馬山は。遙に北に在り。後拾遺。大貳三位。

有馬山いなさしはら風ふけばいでそよ人をわすれやはする

武庫川。武庫は郡の名なり。山浦崎渡川海など歌によみたり。川は北より南へ流れ。山は北也と方角抄に見ゆ。歌枕に。基俊。

夕ざれば武庫の浦汐みちぬらしり江の千鳥聲さはぐなり

武庫山の事は。道行ぶりに。せ川小屋野といふ所。川に沿ひて木深く物古りたる山あり。鳥居あり。是は昔足姫の。もろこしの國從へ給ひ。歸りたまひける時。此山に。鑑兜埋みたまひけるより。やがて武庫の山と申すとなん見ゆ。足姫は神功皇后の御事なり。又尊氏卿の執事高武藏守師直。同越後守師泰。兄弟僧と成りてけるを。武庫川の邊にて殺せる事。太平記に詳なり。昆陽。(至瀬川驛二里)。昆野も猪名郡なり。後拾遺。長算。

かもめこそ夜かれにけらしいな野なるこやの池水うは氷せり

津の國のこやとも人をいふべきに。と和泉式部のよめるも此所なり。昆陽の松原なども古き歌に見えたり。

風雅。彈正尹邦省親王。

津の國の井奈の霧のたえくにあらはれやらぬ小やの松原

千載。權中納言經房。

をし鳥のうき寐のどこやあれぬらん氷柱おにけりこやの池水

又増鏡に。先帝。(後醍醐帝)。けふ津の國こやの宿といふ所につかせ給ひて。夕月夜ほのかにをかしきをながめおはします。

命有ればこやの軒ばの月も見つまたいかならん行末の空

瀬川。(至郡山二里)。正慶二年三月。赤松圓心三千餘騎にて瀬川へ押寄て。六波羅の大軍を打破りし事。太平記に見えたり。

玉坂山。八雲御抄に。攝津の國の由。清輔抄にあり云々。忠見家集に。むかしかたらひし人の年頃ありて。津の國玉坂といふ所にありけるを聞きつけてまかりあひて。夕ぐれ鈴虫鳴きければよめる。

たまさかにけふあひ見れば鈴虫は昔ながらの聲ぞきこゆる

玉坂山は。瀬川の南にある山なり。

待兼山。八雲御抄に。攝津國。詞花。太皇太后宮肥後。

來ぬ人を待かね山のよぶこ鳥おなじ心にあはれとぞきく
六帖。よみ人未らず。

津の國の待かね山の呼子鳥なげけどかなしいふ人もなき

玉坂山よりは猶南にあり。

郡山。(至芥川驛二里)。郡山と芥川の間に。藍野陵。藍野村にあり。延喜諸陵式曰。三島藍野陵。

磐余玉穗宮御宇繼體天皇。在攝津國島上郡。兆域東西三丁南北三丁。守戸五烟。と見えたり。

芥川。(至山崎驛二里)。拾遺。承香殿中納言。

人をとくわくた川てふ津の國のなにはたがはぬ物にぞ有ける

こそべ村。能因法師の舊跡なり。こそべ村は北の山際なり。

神南備の森。方角抄に。山崎と云所にあり。拾遺。貫之。

かきくらしまぐるゝ空をながめつゝ思ひこそやれ神なびの森

櫻井村。楠判官正成の子息正行に遺言して。河内へ歸せし所なり。又こゝに待宵の小侍従が墓

あり。烏丸光廣卿集に。津の國櫻井といふ里の西に。彼の待宵の小侍従といひし人の古跡あり。

見るからに袖こそぬるれ待宵の鐘をうらみし人のあととて

小侍従の事は平家物語に詳なり。

水無瀬川。後鳥羽院の御位牌。水無瀬にあり。

山崎。(至伏見二里)。むかし河陽と云ひし也。山崎八幡の祠の在る所。昔の離宮なりしといふ。

河陽橋は水無瀬の渡りに架れる橋の名也。

嵯峨天皇御製。河陽驛經宿有懷京邑。

河陽亭子經數宿。深夜松風惱殺人。臥聞山猿叫落月。誰能不憶帝京春。

凌雲集に見ゆ。又左大將軍藤原冬嗣。和河陽御製。千峰積翠籠山暗。萬里長江入海寬。など

皆凌雲集に載せたり。

關戸院。今の山崎の關戸町にあり。又關の明神の祠あり。拾遺。源公貞が大隅へまかり下りけ

るに。關戸の院にて月のあかりけるに。わかれ惜みて。平兼盛。

はるかなるたびの空にもちくれねばうらやましきは秋の夜の月

平家物語。時忠卿。山城の國關戸院にこしをかき据させ。男山の方を伏拜むといふ事見ゆ。此

地は天正十年の古戰場なり。

狐川。文應元年。七社百首。爲家。

どにかくに人のこゝろのきつね川かけあらはれん時をこそまて

太平記に。名越尾張守高家。久我繩手に討死したる事を誌して。尾張守の郎從七千餘騎まどろ

に成て引きけるが。狐河の端より鳥羽の今在家まで其道五十丁が間に。死人尺地もなく伏しけ

りと見えたり。高家討死は今道の邊なるべし。

邑樂おほあらしきの森は。水垂村淀姫大明神の祠の森也。古今祕抄に。おほあらしきのもりは。能因が歌枕に。山城國にありといふ。新古今東野州抄に。山城淀の近所にある名所也。古今。よみ人志らず。おほあらしきの森の下草老ぬれば駒もすさめずかる人もなし

新古今。俊成卿の女。
おほあらしきの森の木をもちかねて人たのめなる秋の夜の月
淀。古今。よみ人志らず。

淀川によむと人は見るらめど流れて深きこゝろあるものを
拾遺。忠見。

いづかたになきて行くらん郭公淀のわたりのまだ夜深きに
新古今。左近衛中將公衡。

狩くらしかた野の眞柴折りまきてよどの川瀬の月を見る哉
風雅。正三位隆敏。

五月雨に岸の青柳枝ひちて木末をわたるよどの川船

淀をよめる歌數多あり。
伏見ふしみ(至大津驛四里)。方角抄に。菅原の伏見といふは大和なりと云へり。新古今。有家。

夢通ふ道さへ絶て吳竹のふしみの里の雪の下折

とよみたるは此所なり。古今。爲家の抄にも。菅原の伏見は大和にて。吳竹のふし見は山城也
と見ゆ。近比東涯先生。豊公故壘桃花。

叱咤時移覇業空。百年葵麥動春風。金湯變作桃花塢。遠近霞蒸千里紅。

といへる絶句。先生得意の作なりと聞きぬ。

袖中抄に。鳥羽の南に。三栖みす。芹川せりがはと云所あり。後撰に。仁和御門にんなんのみかど。嵯峨さかの御時の例にて芹川
に行幸し給ひける時に。行平。

さかの山みゆき絶にしせり川の千代の古道あとはありけり
續古今。後京極。

せり川の波もむかしに立かへりみゆきたへせぬさかの山風

芹川村は三栖村の北。伏見の西。竹田の南なり。

深草の里。墨染すみぞめ櫻寺さくらでら。古今。堀川太政大臣身まかりける時。深草山に納めて後よめる。上野峯
雄。

深草の野邊の櫻し心あらばことしばかりは墨染にさけ
千載。俊成卿。

夕ざれば野邊の秋風身にまみてうづら鳴くなり深草の里
新古今。道具。

深草の里の月影さびしさも住來しまゝの野邊の秋風

小幡こはたの里。方角抄に。ひつ川と云ふ。小幡の里近き小川なる橋をよめり。伏見の東なりと。新
勅撰。俊成卿。

都出て伏見をこゆる明がたは先うち渡すひつ川の橋
拾遺。人丸。

山しろの小幡の里に馬はあれど君を思へば歩行よりぞゆく

狼谷。此地名古き書には見えす。此道は豊王伏見に城をきづかれし時に開かれけると云り。
音羽山。古今。在原元方。

音羽山もとに聞きつゝあふ坂の關のこなたに年をふる哉
同。友則。

音羽山けさこえくれば子規木末はるかに今ぞなくなる
金葉。俊頼。

音羽山紅葉ば散らし相坂の關の小河に錦をりかく

續古今。光明峰寺入道攝政左大臣。

音羽川瀧の水上雪消えて朝日に吐づる水の白波

新後撰。宗尊親王。

音羽山花さきぬらし相坂の關のこなたに匂ふ春風

新續古今。雅經。

山風の吹きぬるからに音羽川せき入ぬ花も瀧のまら浪

逢坂山。關の清水の事は。長明無名抄に。其頃も絶ぬるよし志るせり。關寺はむかし逢坂の關
ありし所なりといへり。此上の山逢坂山なり。後撰。あふ坂の關に庵室あんしつを作りて住侍すまはべりけるに。
行かふ人を見て。蟬丸。

是やこの行くも歸るも別れては志るもしらぬも逢坂の關
古今。貫之。

あふ坂の關の清水に影見えていまやひくらん望月の駒

拾遺。大貳高遠。

あふ坂の關の岩かどふみならし山立出るきり原の駒

千載。藤原範長。

あふ坂の關の清水にやどりけりこよひはこえし逢坂の關
新古今。太上天皇。

鶯のなけどもいまだふる雪に杉の葉白きあふ坂の山
同。宮内卿。

逢坂や木末の花をふくからに嵐ぞかすむ關の杉村
續古今。爲家。

歸り來んまたあふ坂と頼めどもわかれに鳥の音ぞなかれける
玉葉。能清。

あふ坂の關の戸あくるまのゝめに都の空は月ぞ残れる
又關の小川ともよめり。新千載。家隆卿。

立歸り猶逢坂のいしま行く關の小川の花のまら波

又新千載。思ひの外の事によりて東の方にくだりける時に。逢坂山を越ゆとて思ひつゞけ侍る。
中納言具行。

歸るべき身にしあらねば是やこの行くを限りのあふ坂の關
關の清水を。近比周南縣次公。

幾歲清華開ニ鏡光。重來立レ馬照ニ行裝。關山一夜寒如レ許。不レ識總爲ニ雙鬢霜。

關の明神の事は。無名抄に。あふ坂に關の明神と申すは。むかしの蟬丸の彼藁屋のあとを失はずして。そこに神と成て住みたまふなるべしと見えたり。又あふ坂の盲人。流泉啄木の曲を深く秘して人に傳へざりしを。博雅夜毎に其庵の下に行て待たれける事三年に及びて。風雨の夜盲人感に堪ずして秘曲悉く傳へし事。江談に見えたり。博雅は。延喜帝の孫にて親王克明の子にておはしけるが。世には博雅の三位とも申すにや。縣次公の三井寺登覽の詩に。不レ識關門風雨夜。幾人操レ曲遇ニ知音。と作れるは此事なり。

大津。(至草津驛三里半六丁)。長明道記に。むかし天智天皇の御代。大和國明が香の岡本の宮より。近江の國志賀の都に移り有て。大津の宮を作られけりと聞くにも。此ほどは古き皇居の跡なりかしと覺えてあはれなり。拾遺。人丸。

さい波や近江の宮は名のみして霞たなびき宮木守なし
南郭先生。酬ニ松子潤。

千年上苑百花香。處々江山舊帝鄉。自レ古王風餘ニ禮樂。只今侯服滿ニ封疆。嶽邊城郭迎レ雲起。湖上琵琶浸レ月長。傳道湘靈時鼓レ瑟。曲終詩興待ニ錢郎。

御井寺。又三井寺とも書くにや。園城寺と號す。大津の驛より左の方へ行く。關上より湖水を

瞰む。景物世に勝れたり。尊氏西國より攻上られしに。後醍醐帝は叡山に幸ましめて。奥州の勢坂本に着ければ。先づ三井寺を攻めらるべしとて。源中納言顯家卿。新田左中將義貞。志賀唐崎より押寄て。細川卿律師定禪と軍あり。細川軍敗れて三井寺に火をかけられたる事。太平記に詳なり。

打出の濱。湖水の傍也。新後拾遺。後鳥羽帝。

駒なべてうち出の濱を見渡せば朝日にさはぐ志賀の浦浪

竹生島は。湖水の中にあれども。大津勢田よりは遙かに隔て見え。湖水は瀬田より貝津に至て南北二十里ありと云へり。琵琶湖と名付たる事は。堅田より北十七里。東西廣くて琵琶に似たり。堅田より勢田に至て四里。東西狭く琵琶の鹿首に似たり。勢田より宇治に至て愈よ細ければ。海老尾にたどへたり。又拾芥抄の五奇異にも。竹生島その石皆水晶と云事見えたり。都良香の。三千世界眼前盡。と句を詠せられしに。島の鬼和して。十二因縁心裏空。と吟じたりと言傳へたり。

鏡山も見え。比良山。長等山。堅田。皆見ゆる。比良は高島郡にあり。日本の七高山と拾芥抄に見ゆ。千載。良經卿。さくらさく比良の山風吹くまゝに花に成行く志賀の浦波

新古今。宮内卿。

花さそう比良の山風吹きにけり漕行く船の跡見ゆるまで

又叡山見ゆる。慈圓の。我たつ柚とよめるは此山の事なり。拾遺に。よみ人志らず。

わが戀のあらはに見ゆる物ならば都のふじといはれなましを

是を以て見れば。都のふじとは叡山を云ふにこそ。唐崎の一ツ松は。遠くて見わき難し。新古今。家隆。

志賀の浦や遠ざかりゆく浪間より氷りて出る有明の月

續拾遺。

昔たれあれなん後のかたみとて志賀の都に花を植ゑけん

續千載。鎌倉右大臣。

さゝ波や比良の山風さよ更て月影さむし志賀のから崎

續後拾遺。定家卿。

さゝ波や志賀の花園かすむ日のあかぬ匂ひに浦風ぞ吹く

から崎のひとつ松。古有りしは枯れたりしに。明智日向守光秀。植つけたりしが繁茂せると云へり。後醍醐帝。鎌倉を討滅ぼさるべき初め。笠置に幸せられし時。妙法院大塔の宮。八王寺

に御出有りけるを。六波羅より押寄て。唐崎濱にて軍ありて。海東左近將監討たれし事。太平記に見ゆ。縣次公の江州の詩に。乾坤古壘在。晝夜大江流。といはれし如く。江州は古戰場甚多し。

木曾義仲の墓は。道の傍の人家の中にあり。今井四郎兼平が墓も。田の中にあり。木曾の義仲は。壽永二年都に攻上り。平家の一族西海を指して落られしかば。左馬頭に成て越後國を賜はり。朝日の將軍と云ふ院宣を下されしが。暴逆多かりし故。鎌倉より範頼義經。討手として差寄せられ。宇治勢田を支へ戦ひしに。義經宇治を渡りて京に入りたりしかば。義仲瀬田の方へ落られしが。大津の打出の濱にて。今井四郎に行あひ。其兵を集めて散々に戦はれしに。遂に主従二騎に討成され。粟津の松原へかゝられしが。深田に馬を乗入て。遂に箭に中りて討れしかば。今井も太刀の切先を口に含み。馬より落て死ける事。平家物語に詳なり。粟津の原。又森ともいへり。後撰。よみ人未らず。

關こえて粟津の森のあはずとも清水に見えし影をわするな
新拾遺。頓阿法師。

逢坂の鳥の音遠くなりけり朝露わくる粟津の原
膳所の城。

勢田の橋のかたへより石山寺へ行く道あり。源氏明星抄に。紫式部は上東門院の官女なりしが。大齋院より。めづらかなる物語や侍るとありしに。新しく作りて奉るべき由。式部に仰せられければ。源氏作りたるとなり。石山寺に詣でしに。折しも八月十五夜の月。湖水に映りて心のすみたるまゝに。まづ須磨明石の兩卷を書きたるよし。かくて其後書加へて五十四帖に成して奉りけると言傳へたり。南郭先生。石山覽古の詩に。

石欽留寶地。閣迥接湖天。今古唯餘色。江山復幾年。金闈諸彦語。彤管美人傳。名跡空相照。長教水月懸。

勢田の橋。大橋九十六間。小橋三十六間ありと云へり。太平記に。俵藤太秀郷。此橋を渡りける時。二十丈許なる大蛇横はりて有りけるを踏で越えたりしに。大蛇化して小男と成て。秀郷を龍宮に誘ひ。仇敵を亡さむ事を頼みたりければ。秀郷怪しき物を射たる事ども。詳に載せたり。

野路の里。篠原。玉葉。安嘉門院四條。

うちまぐれ故さと思ふ袖ぬれて行末遠き野路のまの原

野路の玉川。玉川は諸國に同じ名數多見えたり。皆美濃の所に誌し付ぬ。

草津。(至石部驛二里半十四丁)。草津川あり。三上山見ゆる。新後撰。季經朝臣。

玉つばきかはらぬ色を八千代ともみかみの山ぞときはなるべき
石部。(至水口驛三里半)。横田川あり。

水口。(至土山驛二里半)。松の尾川あり。

土山。(至坂下二里半)。白川橋といふ河あり。世に傳ふるは。田村磨賊を戮せし也といへども。正しき物には誌さず。田村磨の祠あり。銅の華表あり。鈴鹿山の嶺は伊勢近江の境なり。昔は爰に關門あり。新後撰。後京極攝政左大將に侍りける時。伊勢勅使にて下り侍りけるに伴ひて。鈴鹿の關を越るとて。花の下にあり居てよみ侍りける。中納言定家。

えぞ過ぬ是や鈴鹿の關ならんふり捨てがたき花のかけかな
新古今。西行法師。

すいか山うき世をよそにふり捨ていかに成行く我身なるらん
新勅撰。有家。

秋深くなりけらしな鈴鹿山紅葉は雨とふりまがひつゝ
新拾遺。荒木田氏忠。

ふり捨て誰かは越ん鈴鹿山關やは夜半の月も入りけり
千載。内大臣。

ふるまゝに道絶ぬれば鈴鹿山雪こそ關の戸ぞしなりけれ

坂下。(至關驛二里二十四丁)。鈴鹿川は左右へ流れ。幾瀬も渡るなり。詞花。治部卿。

五月雨の日をふるまゝに鈴鹿川八十瀬の浪ぞ立ちまさりける

新續古今。よみ人しらず。

すいか川氷やせきと成ぬらん八十瀬の浪も行きやらぬまで

鈴鹿川に八十瀬の浪とよみたるは幾瀬もわたる故なり。

關。(至龜山一里半) 關川。歩行わたり。

龜山。(至庄野驛二里)。

庄野。(至石薬師驛二十五丁)。

石薬師。(至四日市驛二里半八丁)。

四日市。(至桑名三里八丁)。

桑名。海上七里を渡りて尾張の宮驛に至る。伊勢尾張の境なり。伊勢物語に。伊勢尾張の間の海面を行くに。波いと白く立つを見て。

いとゞしく過行く方の戀しきにうら山しくも歸る波かな

宮。(至鳴海驛一里半)。熱田の宮は。素盞烏尊をいつき祭れる也。又草薙の劔をも齋き祭れると

申すにや。素盞烏尊。大蛇を斬りたまひて。其尾より出づる劔を。天叢雲の劔と號けられし。それを。天祖の廟にいつき藏められけるに。日本武尊。東征の御時。御姨の倭姫より賜はらせたまひて。後に草薙の劔と申せしを。爰に藏め祭られし也。天智天皇の御時。沙門道行。盜取て新羅に奔らんとせしが。風雨に迷ふて遂に原の如く返し入れ奉りたるとなり。南郭先生。送宮子雲還張海七言歌行に。

君看千載古神宮。巍然獨存張海東。中藏帝子斬蛇劔。威靈赫々至今雄。といへるは此劔の事なり。

龍福寺。俗に笠寺と申すにや。

鳴海。(至池鯉鮒驛二里半十三丁)千五百番歌合。隆信朝臣。

鹽風や秋は夜さむになるみがたあまのときまやに衣うつなり

千載。下野國にまかりける時。尾張の國鳴海といふ所にてよみ侍りける。中納言師仲。

おぼつかないかに鳴海のはてならん行衛もあらぬ旅のかなしさ

東關紀行に。宮を立出て濱路におもむく程。有明の月に影ふけて云々。やがて夜の内に二村山にかゝりて。山中などを越過るほどに。東やう／＼白みて海の面遙かにあらはれ渡り云々。

玉くしげ二むら山のほの／＼と明行く末は波路なりけり

てんかくがくぼと云ふは。道の南に見ゆる。里民は御屋形狭間と云ふ。軍記にはおけはごま。と誌せり。永祿三年五月。今川義元。四万餘の兵を率ひ。織田信長の地を侵し。所々の壘とも攻落し。桶狭間に酒宴せらる。信長其不意を襲はんと急に師を出し。熱田の宮に詣で。思ひよらぬ義元の旗本に切てかゝり。毛利新助。義元的首を得て。信長大勝を得られたり。義元の墓桶はごまにありといへり。

尾參の塚。川あり。

池鯉鮒。(至岡崎三里四丁)。池鯉鮒は碧海郡なり。

八橋の古跡は。道より北なり。伊勢物語に。三河國八はしといふ所に至りぬ。そこを八橋と云ひけるは。水ゆく川の蜘蛛なれば。橋を八つ架せるによりてなん八橋と云ひける。其澤の邊の木の下居て餉喫ひけり。其澤に燕子花いと面白く咲たり。それを見て或人の曰く。かきつばたと云ふ五文字を。句の上に居て旅の心をよめと言ひければ。

から衣きつゝなれにしつましあればはる／＼きぬる旅をしぞ思ふ

さらしなの日記に。八橋は名のみして。橋の形もなく。何の見所もなしといへば。其頃より橋はほろび失にし也。新拾遺。爲家卿。

旅ごろもはる／＼來ぬる八橋のむかしのあとに袖もぬれつゝ

今は業平の祠ありといふ。又手づから刻まれし佛像の有るといふは心得難き事なり。
天矧川。橋二百八間ありといふ。建武二年。新田義貞。鎌倉を伐れし時。此川を渡して軍ありしに。東の兵敗れる事。太平記に見えたり。矧。作矧とあり。矢はぎの橋の北の方田の中に竹林あり。昔矢矧の長者淨瑠璃が家の跡なりと申傳ふるにや。近比金花の平子和が。長者田廬金管散。王孫踪跡杜衡垂。と作れるは。八橋と長者の故宅の事を言へる也。徠翁も又。送三子和赴三河。

又。送爽鳩子方之三河。東方千騎下關門。澤國江山雨後昏。杜若橋邊春艸色。知君駐馬問王孫。

憶君奉使向三河。路入函關滄海波。杜若水寒芳艸歇。芙蓉峯霽白雲多。吹笙幾訪鳳來寺。置酒誰聽魚麗歌。聞說登臨名蹟徧。嵩山少室定如何。

南郭先生。和答參州源京國。

鳳來山上鳳凰來。瑞氣百年翳鬱哉。岐俗維新周日月。沛宮不改漢樓臺。大風一自留雄略。壯士于今育雋才。想見世家良子弟。登高賦遍碧雲隈。

其二。

大國才豪賈子賢。詞章翻向洛陽傳。山川人傑龍飛地。政治文明鳳集天。驛古滄池餘鯉鮒。

郡開碧海見桑田。更知杜若洲邊色。千載流芳入妙年。

又。送人之參河。

鳳來山色映中天。城郭回看碧海船。試問漢王提劍地。樓臺盡在彩雲邊。

岡崎。(至藤川驛一里半)。太平橋あり。此川より一里許傍に小豆坂ありといふ。天正年中に今川義元と。織田信長合戦ありし地なり。

藤川。(至赤坂驛二里九丁)。盛衰記に。宗盛關東下向の事を誌して。矢矧の宿をも打過ぎ。宮路山を越ゆといへり。方角抄に。矢矧より近し。山は高からずと見えたり。後撰。よみ人しらず。

君があたり雲るに見つゝ宮路山うち越え行かん道もしらなくに
躬恒家集に。

名にしおはゞ遠からねども宮路山越えんたむけのぬさにせよ君

三河守の馬のはなむけせしに詠めると見えたり。盛衰記に。妙音院太政大臣師長公。尾張に流されておはせしが。配所のつれづれに宮路山に分入り。木々の紅葉を見たまひしに。谷の流れ。苔石面に生ひ。嵐尾上にすさまじ。岩の上に虎の皮の敷草しきて。琵琶をしらべ給ひしに。鬼の現れて唱歌せしが。我は水神にてこそあれ。此悦びに今十日の内に歸洛させ奉らんとて失けるが。果して歸京の事ありし由載せたり。

赤阪。(至御油驛十六丁)。

御油。(至吉田二里半)。國府村より北に鳳來寺見ゆる。

吉田。(至二川驛一里半六丁)。吉田の橋。長さ百二十間といへり。晴天には此あたりより富士見ゆるといふ。

二川。(至白菅驛二里)。伊良子が崎。八雲御抄には伊勢。清輔の抄は參河といへり。いらこが崎は。遙かに海中にさし出たる所なり。堀川太郎百首。顯季。

玉藻かるいらこが崎の岩ね松幾千代までか年の經ぬらん

鹽見坂。是より大海を眺望す。

白須賀。(至荒井驛一里十丁)。續古今。九條前内大臣。

松かげのいり海かけて白菅のみなど別れて出る船人

高師山。井蛙抄に。たかしの山。たかしの浦。遠江國なり云々。新勅撰。鎌倉右大臣。

雲のゐる梢ばかりに霧こめてたかしの山に鹿ぞなくなる

續古今。政村朝臣。

高師山夕ぐえ來ればふもとなるはまなの橋を月に見る哉

東關紀行に。參河遠江の境に高師の山と聞ゆるあり。山中に越かゝる程に。谷川の流れ落ちて。

岩瀬の浪ことごとくしく聞ゆ。境川とぞ云ふ。

岩つたひ駒うち渡す谷川の音も高しの山に來にけり

又十六夜の記にも。高しの山もこえつ。海見ゆるほどいと面白し。浦風あれて松の響すごく。波いと高し。

わが爲や波も高しのはまならん袖のみなどの波はやすまで

濱名の橋跡は。方角抄に云。水うみより北の山際なり。橋もとより三里あまり北なり。古しへは。濱名を海道にせられけり。本坂とて高師山の麓に今もあり。橋本は今の海道なり云々。續後撰。前内大臣家良公。

朝ぼらけ濱名のはしはとだえして霞を渡る春の旅人

扶桑略記に。元慶八年。始作濱名橋。長五十六丈。廣二丈三尺。高一丈六尺といへり。うたたねに云。濱名の浦ぞ面白き所なりける。波荒き鹽の海路。長閑なる水うみのおちいたるけしめに。遙々追續きたる松の木立など。繪にかゝまほしくぞ見ゆる。新後拾遺。國道。

いといなほ入海遠くなりけり濱名の橋の五月雨の頃

拾遺。兼盛。

鹽みてる程に行きかふ旅人やはま名の橋と名づけ初めけん

東關紀行に。橋本といふ所に行つきぬれば。聞わたりしかひ有ていと心すぢし。南には潮の海あり。北には湖水あり。人家岸に連り。洲崎遠くさし出て云々。水うみに渡せる橋を濱名と名付く。古き名所なり。

荒井。船にて舞坂に渉る。今切の渡しといふ。

舞坂。(至濱松二里半十二丁) 引佐細江の事。烏丸光廣卿の道記に。まへ坂より濱邊一里ばかり行て海道の左右に。東西へ二十間ばかり。南北へ十間ばかりも有らん。地形のくぼかなるあり。是れ引佐細江といふ。今は田など作ると見ゆといへり。千載。清輔。

逢ふ事はいなき細江のみあつくしふかきしるしもなき身なりけり

濱松。(至見付驛三里七丁)。濱松は。初はひき間の城といひしを。永祿十二年より濱松といへり。

東鑑には引間と見えたり。

箕形原。濱松の城の北なり。

天龍のわたり。方角抄に。北より南へ海へ流れて。天龍灘といふ也。池田のわたりともいふと見えたり。十六夜の記に。天龍のわたりと云ふ。船にのるに。西行が昔も思ひ出られて。いと心細し。くみ合せたる船たゞ一にて。多くの人の往來にさしかへるひまなし。

水の泡の浮世に渡るほどを見よはや瀬の小船棹もやすまらず

建武二年。義貞東國の軍に利なくして。歸り上られし事を。太平記に誌して。天龍川の東の宿に着き給ひ。俄に在家を壊ちて浮橋をぞ渡されける。諸卒皆渡し果て後。船田入道と大將義貞朝臣と二人。橋を渡りたまひけるに。いかなる野心の者かしたりけん。浮橋を一間許綱を切て捨たりける。舍人馬をひきて渡りけるが。馬と共に倒に落入り。浮きぬ沈みぬ流れけるを。栗生左衛門鎧着ながら川中へ飛つかり。二丁ばかり遊びつきて。馬と舍人とを左右の手にさし上げ。肩を越ける水の底を閑に歩みて。向の岸へぞ着たりける。馬の落入たる時。橋二間ばかり落て。渡るべき様もなかりけるに。船田入道と大將と二人。手を取組ゆらりと飛渡り給ふ。なぞ見えたり。又梅松論に。義貞天龍に橋かけさせ。打渡りて後凡そ敵に向ふ時。小勢にて川を後に當て。戦には退くまじき謀に。橋を切るは武略の手段なり。敵とても架て渡るべき橋を切落して。敵に急に襲はれむと。周章ふためきたると云れん事。口惜かるべし。よく橋を警固せよとて。渡られし事見えたり。

池田の宿。平家物語重衡海道下りの段に。池田の宿にも着たまひぬ。彼宿の長者熊野が女侍従が許に。其夜は三位宿せられけり。一首の歌を奉る。

旅のそら赤土の小屋のいぶせきにふるさといかに戀しかるらん
中將の返しに。

ふる郷も戀しくもなし旅の空都もつひのすみかならねば
中將殿。梶原を召して。只今の歌のぬしいかなる者ぞと宣へば。あれこそ八島の大將殿のいま
だ當國の守にて渡らせ給ひし時。召されまゐらせて候ひしに。老母を是に留置き。常に暇を申
しゝかども給はらざりければ。

いかにせん都の春もをしけれど馴しあづまの花やちるらむ
と云名歌仕り。いとまを給はりて罷下り候ひしと。梶原答へける由を載せたり。盛衰記には。
八島の大臣宗盛關東に下向の時。池田の宿に宿し給ひしに。侍従といふ遊君。東路のはにふの
小屋のいぶせきに。といふ歌よみてまゐらせ。内大臣の返し。故郷も戀しくもなしといふ歌給
はりたる事見えたり。太平記に。俊基關東下向の事をしるして。池田の宿に着きたまふ。元暦
元年の頃かどよ。重衡の中將の。東夷の爲に捕はれて。此宿に着きたまひしに。東路の殖生の
小屋のと。長者の娘がよみたりしと見えたり。何れか是なる事を知らずといへども。大やう平
家物語を正とすべし。池田の宿は天龍川の西なりしと見ゆ。今と異なり。
見付。(至袋井驛一里半)。名寄。宗尊親王。

うかりけるみか野の橋の朽もせで思はぬ道に世をわたるかな
是は鎌倉より歸り登らせたまふ時の歌なり。

長明海道記に。懸川の西に細き川あり。其川を隔て、西なるをば。せ川と云ひ。東をばはら川
と云ふ。名寄。雅經。

はら川やせ川の水の底清みすむ里人の心をぞしる
袋井。(至掛川驛二里十六丁)。

掛川。(至日坂驛一里廿九丁)。
日坂。(至金谷驛二里)。小夜の中山。方角抄に云。只小夜の山とも。西の麓を新坂といふ。八

雲御抄には。さやの中山と云々。新古今。西行法師。
年たけてまたこゆべしと思ひきやいのちなりけり小夜の中山

新勅撰。家隆卿。
光そふ木の間の月におどろけば秋もなかばの小夜の中山

千載。八條前太政大臣。
夜な／＼の旅ねの床に風さえて初雪ふれるさやの中山

釋宗久都のつとに。さやの中山にも成りぬ。さよの中山。さやの中山と云ふ。説々あるにや。
中納言師仲。當國の任にて下られけるに。土民さよの中山と申し侍りけるとて。中古の先達な
ども。さやうによまれて侍るにや云々。源三位頼政は。長山とぞ申しける。此たび老翁に尋ね

侍りしかば。さやの中山と答へ侍りき。承久記。承久三年七月。中御門前中納言宗行は。小山新左衛門尉具し奉りて下りけるが。遠江の菊河に着たまふ。爰をば何とぞ問ひ給へば。きく河と申す。前に流るゝが。さん候と申しければ。硯乞出て宿の柱に書つけたまふ。昔南陽縣之菊水。汲下流延齡。今東海道之菊河。宿西岸失命。東鑑も同じく此事を記したり。太平記に。俊基關東下向の事をしるして。宿の名を問ひ給へば。菊川と答ふ。承久の軍に光親の卿。院宣書たりし罪によりて。關東へ召下されし時。此宿にて昔南陽縣菊水といふ四句を書きたりし事を思ひ出て。遠き昔の筆の跡。今は我身の上になり。哀れやいとまさりけん。一首の歌を詠して。宿の柱にぞ書かれける。

いにしへもかゝるためしを菊川の同じ流れに身をや沈めん

東鑑に據るに。院宣を書たるは光親なり。されども菊川にて四句を書たるは。中御門宗行なり。太平記の説。誤なるべし。東關紀行に。小夜の中山は。古今の歌に。よこをりふせると詠まれたれば。名高き所也とは聞置たれども。見るにいよく心細し。此山を越えつゝ行くほどに。菊川といふ所あり。去にし承久三年の秋。中御門中納言宗行と聞えし人の。罪ありて東に下されけるに。此宿に泊りけるが。昔南陽縣菊水。汲下流延齡。今東海道菊河。宿西岸終命。とある家の柱に書かれたりけりと聞置たれば。いと哀にて其家を尋ぬるに。火の爲に焼けて。

彼言の葉も残らずと申す者あり。今は限りとして残しおきけんかたみさへ。跡なくなりけるこそ果敢なき世のならひ。いとあはれに悲しけれ。

かきつくるかたみも今はなかりけりあとはちとせと誰かいひけん

諏訪の原村。武田勝頼。馬場美濃守。典厩兩大將に命じて經營せられし。諏訪の原の城趾なり。即ち金谷の臺なり。

金谷。(至島田驛一里)。金谷島田の間を大井川流る。駿河遠江の堺なり。遠江風土記には。大井川。或作大猪川。長明道記。

日かずふる旅のあはれは大井川渡らぬ水も深きいろかな

又大井川の川下を伊呂といふ。

島田。(至藤枝驛二里)。烏帽子山北にあり。古き歌見あたらす。

鏡の池。北にあり。八雲御抄。清少納言枕草紙にも載せたり。この池の事にやしらす。

瀬戸川。かち渡り也。堯孝富士紀行。瀬戸山と申す所にて。

うらかるゝ尾花の浪にかへるなり鹽路は遠きせとの山風

藤枝。(至岡部驛一里半廿六丁)。

岡部。(至丸子驛二里九丁)。新拾遺。法印定圓。

露しげきつたのしげみを分すぎて岡べにかゝるうつの下道

宇津の山。伊勢物語に。ゆきく／＼て駿河國に至りて。宇津の山に至りて。我入らんとする道は。いと暗う細きに。葛楓しげり物心細く。すいろなるめを見る如く思ふに。修行者あひたり。かかる道はいかでかいますと。いふを見れば見し人も見し人も。其人の許へとて文書をつく。

駿河なる宇津の山べのうつゝにも夢にも人にあはぬなりけり
新古今。定家卿。

都にも今や衣をうつつ山夕霜むすぶ葛の下道

續古今。參議雅經。

ふみ分しむかしは夢かうつ山あとも見えぬ葛の下道

新續古今集に云く。左大臣。富士見侍らんとて。東に下り侍りし時。同じくまかり下りしに。宇津の山を越え侍るとて。參議雅經。ふみ分しむかしは夢かう津の山。とよみける事を思ひ出て。權中納言雅世。

昔だにむかしといひし宇津の山こえてぞ忍ぶ葛の下道

丸子川。小田原の東にあり。この所のまりこ川は古き物にはしるさず。

丸子。(至駿府一里半)。北に遠く甲斐の白峯見ゆ。平家物語に。重衡海道下りの段。宇津の山べ

の葛の道。心細くも打越えて。手こしを過ぎて行けば。北に遠ざかりて雪白き山あり。問へば甲斐の白峯といふ。其時三位中將。

をしからぬ命なれどもけふまでにつれなきかひの白ねをも見つ

方角抄に云。安部川とて。駿河の府と丸子川との間。川あり。其水上五六里ばかり北に。木枯の森あり云々。今尋ね問へば。七八丁許ありといふにや。新古今。定家卿。

消わびぬうつろふ人の秋のいろに身を木がらしの森の下露

手越。いざよひの記に。宇津の山の次に。今宵はてこしと云所にとまる。廿六日。葉科川とかや渡りて。興津の濱に打出と見えたり。又太平記。建武二年十二月。義貞手越河原に押寄せ。午刻より酉の下まで。十七度戦ひて。鎌倉の兵敗れし事見えたり。又平家物語に。狩野介が重衡の中將に申せしに。手越の長者が娘。此二三年佐殿に召置かれて候。名をば千手の前と申し候とぞ申しけると見えたり。(是は重衡。鎌倉に下りたまひて。狩野介宗茂預りまゐらせし時。頼朝公より千手の前をまゐらせける。それを尋ねられし也)。丸子の乾に當りて。天柱山あり。高き山也。東に吐月峯あり。安部は郡の名也。川は歩行渡りなり。新續古今。爲明。

いとしくあべの市人さわぐらし坂越えかゝる夕立の空

など。歌にもよみたり。いざよひの記に見えたる藁科川は。今の安倍川なり。
志豆機山。續古今。法性寺入道。

今朝見れば霞の衣をりかけてしづ機山に春は來にけり
風雅集。知家。

たが爲としづ機山の長き日に聲のあやをる春のうぐひす

駿府。(至江尻驛二里十二丁)。昔は今川の館也。永祿十一年。甲斐の武田の兵。江尻を越え宇八原まで攻入りたる時。今川氏真。土岐の山家へ引籠られし故。信玄。今川の館に火をかけて焼

拂はれしなり。

狐崎。東鑑。正治二年梶原平三景時。當國一宮に城を構へしが。子共相俱し上京す。駿河の清見關にて。其近所の甲乙人。的を射るとて集まりしが。途中に行遭ひ。是を怪しみ箭を射かけたるに。それより軍に成りけるに。人々競ひ集まりし程に。景時父子を始とし皆射られける由記せるは即ち此地なり。

草薙の祠とて。日本武尊をいつき祭れる祠あり。草薙村。草薙川もあり。堯孝富士紀行にも。高橋繩手など過ぎて廣き野山。此處やかの草薙の神劍。靈瑞を現し侍りしあたりならん。いどかしこくぞ覺え侍る。と見えたり。日本武尊東征の御時。夷賊野に火を放ちて。尊を焼失ひ

奉らんとせしに。天叢雲劍自らぬけ出て。燃來る草を薙ぎはらひける故に。草薙の劍とは名付られける。其野を焼つめの野と云ひける由。國史に見えたり。

江尻。(至興津驛一里一丁)。菴原川。かち渡り。
袖師の浦。出雲に同名あり。後拾遺。藤原國房。

唐ころも袖師の浦のうつせ貝むなし戀に年のへぬらん
といへるは出雲にや。又此所なるにや知らず。

東鑑に。文治三年七月十八日。仁田四郎忠常が妻。豆州三島社に參りて洪水に遭ひ海に浮び。江尻渡戸にて水に沈みて失せぬ。同じく沈める人々は助かりけるに。忠常が妻一人は死しけり。是は夫の忠常重病の間。此妻願書を三島の神に奉りて。命に代らんと祈りし故なる由見えたり。

三穗の松原は。方角抄に。西より東へ一里許り海中へ出たる松原なり。南は江尻に續きたり。清見瀉より三穗は南なり。富士も三穗よりは白々と雲間に見えたり云々。新後撰。爲氏卿。

清見がた打出てみればいほ原の三穗のちきつは波しづかなり
近比烏丸光廣卿。
世にしらぬながめなればや天人のあまくだりにし三保の松原

天の羽衣などの事申し傳ふるにや。正意東行紀錄に。尾州亞相義直卿。三保の祭神の事尋問せらる。三保の明神は。仲哀天皇也と申す。神書を考れば三穗津姫なるべし。高産靈尊の御女にて。大己貴尊に嫁し給はんとて。天上より下したまへば。名詮相かなひ。天の羽衣かけほす天女の。天くだりしたる物語是なめり。神主に申せば。何とは知らず。我父大宮の神主より傳へたる縁起一卷。仲哀天皇たる由傳へたり。いかさま此國には。日本武尊を祀り申す所多ければ。其御子にて天下治めたまふ天皇なりしかば。祀り申す因縁も有るべしと誌せり。田籠の浦。方角抄に。三保の入江より浮島が原つたひの浦を。あしなべて田の浦と惣名に云なり。清見沖津なども其中の小名なり。田子の浦。越中にも同じ名あり。新古今。越前。おきつ風夜さむになれや田子の浦のあまのもしほ火焼まさるらんとよみたりしは。此所なるべし。

清見が關。八雲御抄に。駿河海邊富士のすそ也と見えたり。方角抄に。清見寺は南向なり。關は此門前なりと云へり。清見寺は巨鼈山と號す。東關紀行に。昔朱雀天皇の御時。將門と云者東にて謀反おこしたりけり。是を平らげん爲に。民部卿忠文を遣しける。此關に至りて止まりけるが。清原滋藤といふ者。民部卿に伴ひて。軍監といふ官にて行けるが。漁舟火影寒焼浪。驛路鈴聲夜過山。といふ唐歌を詠ければ民部卿涙を流しけると聞くも哀れ也。袋雙紙にも此

事載せて。將軍拭涙云々。新古今。參議雅經。

見し人の面かげとめよ清見がた袖に關もる波の通ひ路

玉葉。後鳥羽院御製。

清見がた富士の煙やきえぬらん月影みがく三保の波なみ

詞花。顯輔朝臣。

夜もすがら富士の高根に雲消て清見が關にすめる月かけ

清見瀉の歌甚だ多し。

沖津川。

興津。(至油井驛二里)。和名抄に。息津としるせり。

薩埵山。將軍尊氏。弟の直義入道誅罰すべき宣旨を蒙りて。東國に向はれし時。觀應二年十一月晦日。薩埵山に陣を張られたり。高倉禪門。(直義)。鎌倉を立て薩埵に向はれけり。彼薩

埵山と申すは。三方は嶮岨にて谷深くされ。一方は海にて岸高く峙てり。取巻く寄手は五十萬

騎。千重万重に取巻たりしに。後攻押寄來りしかば。散々に敗北して禪門も降人と成たまひし

と云事。太平記に見えたり。

風早浦。許奴美濱。など此所なりといへり。薩埵より伊豆の崎午に當る。富士は卯に當る。此

山より田子三穂の松原。よく見下して勝景也。

由井。(至蒲原驛一里)。一方は海濱を行く道なり。鹽竈多し。古き歌には見えぬにや。

蒲原。(至吉原驛一里廿八丁)。富士川は。蒲原と吉原との間を流れて田子の浦へ出る。源平盛衰記にも。川の廣さ或は一丁許。或は二丁ばかり。水濁りて波高し。流の早き事立板に水がかかるに似たりと云り。さらしなの日記には。富士川といふは。富士の山より落たる水なり云々。源三位頼政家集。

夏もなほ雪げの水の未なれば富士の川こそ冬こちすれ

續古今。知家卿。

ながれてとおもひし物をふむ川のいかさまにしてすまず成けん

治承四年。頼朝義兵を起されし時。福原より討手の大將軍小松の少將維盛。副將軍薩摩守忠度。侍大將には上總守忠清を先として三万餘。新都を立て。十月十六日。先陣は蒲原富士川に進み。後陣は手越宇津の谷に支へたり。頼朝は鎌倉を打出て。駿河國浮島が原にて勢揃へあり。廿四日の卯の刻に富士川にて。源平の矢合せ有るべかりしに。廿三日の夜半ばかり。富士の沼に幾許も有ける水鳥ども。何かは驚きたりけん。一度にはつと立ける羽音の。雷大風などの様に聞えければ。平家の兵ども。あはや敵の向ひたる。富士の裾からめてや廻り候ふらん。取籠

られては叶ふまじとて。取る物も取あへず騒ぎて。我先にとぞ落行きけると云事。平家物語に詳なり。蒲原の城は。北條家の北條新三郎。狩野新八郎。兩將にて成りしを。永祿十二年信玄攻落されし事。甲陽軍鑑に見えたり。

吉原の方近くなりて久津と云所に。福泉寺といふ寺あり。曾我兄弟の墓石碑ありと云。

吉原。(至原驛二里十六町)。竹取の翁といふ者有て。竹を取りつゝ万の事に使ひける。其竹の中に三寸ばかりの人あり。最美しければ養ひたるに。うつくしき事限りなし。屋の内は光満ちたり。此子おほきに成て。名を赫奕姫といふ。其形の世に似ず。めでたき事を帝聞し召し。御使有りけれども對面だにせず。翁参りて宮仕すまじき由を奏しければ。御狩に出たまふて。赫奕姫の家に入り給ひけれども宮仕せず。其後月に向て泣けるを問へば。己が身は月の都の人なり。今歸るべきと言へば。帝復多くの人を以て。竹取が家を守らす。空より雲に乗りたる人數多來て。かくや姫は罪有て斯く卑しき許に暫時おはしつる也。今は迎ふる也とて車に乗て空に登りぬ。壺の薬を奉りたりければ。いづれの國か天に近きと問せ給へば。駿河の國に有るなる山を奏す。薬の壺を山の巔にて火にて焼けど仰せければ。兵者數多山へ登りけるより。其山を富士の山とは名付けゝる。其煙いまだ雲の中に立昇るといふ事。竹取物語にくわしく見ゆ。伊勢物語に。富士の山を見れば。五月のつごもり雪いと白うふれり。

時しらぬ山はふじの根いつとてかかのかまだらに雪のふるらん
南郭先生。こゝの心を。臨_ニ高臺_一。送_ニ芥子豐還_ニ西京_一の七言歌行に。

臨_ニ高臺_一。高臺百尺天涯開。就_レ中西望長安道。羨君万里能即回。芙蓉五月如_ニ麿斑_一。玉鞭
直指白雲間。送_レ君翻然共_レ鳥過。明朝忽隔萬重山。

と作りたり。

東關紀行に。貞觀十七年の冬の頃。白衣の美女二人有て。山の頂にならび舞ふと。都_ニ良香_一が富
士の山の記に書たり。いかなる故にかと覺_レ東_ニなし。拾遺。人丸。

ちはやふる神も思ひのあればこそ年へてふじの山はもゆらめ

新古今。西行法師。

風になびく富士のけふりの空にきえて行方もしらぬ我思ひ哉

新古今。赤人。

田子の浦に打出て見れば白妙のふじの高根に雪はふりつゝ

續後撰。家隆卿。

朝日さす高ねのみ雪空はれて立ちもおよばぬふじの川霧

其外不可_ニ勝計_一。

いざよひの記に。富士の山を見れば烟もたえず。むかし父の朝臣にさそはれて。いかになるみ
の浦なればなど詠みし頃。遠つあふみの國までは見しかば。富士の烟の末も朝夕にたしかに見
えし物を。いつの年よりか絶えしと問へば。さだかに答ふる人だになし。

たが方になびきはてゝか富士の根の烟の末の見えずなるらん

徠翁。望嶽。

何物芙蓉落日寒。關中霽迥綵雲端。青天一柱崢嶸出。白雪千秋突兀看。誰指仙衣懸_ニ縹緲_一。

自疑玉女割_ニ琅玕_一。于_レ今石跡山陰地。喚_ニ取驪駒_一問_ニ大丹_一。

富士は八葉の蓮花に似たる故。芙蓉峰といふなれば。かくは作りたる也。又玉芙蓉とも作れり。

南郭先生。望嶽。

雲臺玉女昔朝_レ天。東指_ニ芙蓉_一帝所旋。豈有_ニ秦時徐福識_一。不_レ令_ニ漢代少君傳_一。雪垂闔闔晴

齊對。日動扶桑曉倒懸。瀛海瑞祥常五色。三峰高標拱_ニ群仙_一。

富士の詩。此二律を以て勝_レたりとすべし。過にし頃より朝鮮_ニの使臣_一の詩あまたあれども。觀
采にたらず。

浮島が原。新拾遺。有長。

白妙のふじの高根に月晴れて氷をしげる浮島が原

富士の沼。水鳥の羽音に驚きて。平家敗走しける沼は。其所今は善福寺といふ寺となりたりと云へり。

出の屋形。これは右大將頼朝公の。富士のすそ野に狩し給ひて。卒を屯したまへる所にて。曾我十郎祐成。同五郎時宗が。一族の工藤左衛門を。父の仇なりければ。忍び入て切殺し。兄弟名乗てければ。人々さわぎ討留んと出合たりしに。兄弟思ふさまに相戦ひて。十郎は仁田の忠常に討たれしかども。五郎は猶も右大將に一太刀恨み申さんどて。切て入りしを生捕られて。頼朝公自ら直に對問有て。終に失はれける。其始終曾我物語に詳なり。同し物語に。祐成が心をかけし虎といひし女の。井出の屋形を尋ぬる事を記して。三島の祠拜殿に通夜申し。明れば三しまを出て車返しに立やすらひ。千本の松原心細く歩過ぎ。浮島が原にも出ぬ。井出の里に近付ぬ。おきなを誘ひて北へ六七町はるかに野を分行けば。あれこそ井出の屋形の跡に候へ。十郎殿の討たれさせたまふ所。爰は五郎殿の御生害の所。あれに見え候松の中こそ。二人の尸骸を隠しまるらせたる所よと教へけれ云々。虎。涙のひまより。露とのみ消えにしあどを來て見れば尾花が末に秋風ぞふく

原。(至沼津驛一里半)。千本の松原。六代御前と申せしは。平維盛の男なりしを。囚人にして千本の松原にて斬るべき處に。文覺上人請受て出家したまひし事。盛衰記。平家物語に見えたり。

又長門本平家物語。正治元年二月。文覺上人の猪熊の宿所へ押寄せて。六代御前を召捕り關東へ下し。駿河の國の住人岡部三郎太夫好康承まはりて。千本の松原にて斬てけり。十二歳にて北條四郎時政の手にかゝりて。爰にて斬られたまふべき人の。今年二十六まで生たまひける事は。長谷の觀音の御利生なり。終に駿河の國千本の松原にて斬られたまふ事も。先世の宿世と覺えて哀れ也し事ども也と見ゆ。平家物語には。相州田越川の端にて。終に斬られにけりと見えられたれども。今此松原に。六代の石塔とてあり。又鎌倉志には。田越川に六代墓ありと見えたり。

沼津。(至三島驛一里半)。黄瀬川。治承四年十月。弱冠一人鎌倉殿に可奉調候由申して。黄瀬川の陣に來る。是れ源九郎義經也。即ち御前に進んで往事を談ぜられしに。懷舊の涙を催す由。東鑑に見えたり。又中納言宗行此所にて。

今日すぐる身を浮しまが原にてぞ露のいのちは捨さだめつる承久記に見えたり。終に藍津原にて白刃に伏すと。東鑑に見ゆ。

東關紀行に。車返しと云里ありと見ゆ。林子の東行日録の説には。車返しは即沼津の由見ゆ。新葉集には。駿河の國より信濃へ越えける時。浮島が原を過ぎて車返しといふ所より。甲斐の國に入て信濃路へかゝり侍りけるが。さながら富士の麓を行きめぐりけるに。山の姿何方より

もたぐひなく見えければ。よみ人しらず。

北になし南になしてけふ幾日ふむの麓をめぐり來ぬらん

三島。(至菅根關三里三十六町)。伊豆の府にて菅根山の西なり。長明道記に。三島の明神は。伊豫の國三島の大明神を遷し奉ると聞くと見えたり。盛衰記に。治承三年足柄山打こえて。伊豆の國府に着て三島大明神を伏拜むと見えたり。又太平記。建武二年十二月。官軍伊豆の府にて手分して。竹下へは中務卿親王。菅根路へは義貞宗徒の一族。大手に向はれけると見えたり。いざよひの記にも。伊豆の國府にとまり。三島の明神へ參るといふ事見えて。伊豆の國府を出て菅根路にかゝる云々。永祿十二年。武田信玄兵を率いて北條を討つとて。六月に三島を焼き。川なり島に陣せしに。一夜の中に大水出て。八幡大菩薩の小旗を波に引かれたる事。甲陽軍鑑に見えたり。かはなりの島何の所にや。三島より蛭が小島見ゆる。是れ頼朝卿の配所にて。二十有四年おはせし所也。

建武年中。義貞。尊氏を討たれし時。菊池肥後守武重。菅根の軍の先驅して。敵三十餘騎を遙の峯へまくり上げ。坂中に楯を築き雙べたるなど。太平記に載せたり。今何の地にやしらず。大將軍義貞は一段高き所に。諸卒の舉動を實檢せられし由載せたる。皆其地を詳にせず。寂蓮集に。十月ばかりに。東の方にまかりけるに。菅根といふ山をなん越えける。所の有様怪

しく尋常にかはりけり。遙に峰に登りては海をわたり。谷に下りては雲を踏む。さる程に風に木の葉を捲りあげて。時雨の麓よりのぼりければ。

旅の空雲ふむみねを越えゆけばしぐれは袖の下よりぞする

菅根。(至小田原四里)。嶺に關門あり。嶺より伊豆の海見ゆ。嶺に又湖あり。湖に向ひて富士山見ゆる。夫木集。慶融。

玉くしげはこねの山の峰ふかく水海はれてすめる月影

東關紀行に。山の中に至て水海廣くたゞへり。箱根の湖と名つく。又蘆の海といふ。

今よりはおもひみだれしあしの海のふかきめぐみを神にまかせて

又鎌倉右大臣。

はこね路をわれ越えくれば伊豆の海や沖の小島に波のよる見ゆ

南郭先生。西躰函關排律。

神州開大略。靈嶽道西關。峰頂郊雲外。天門驛樹間。湖分銀漢水。崖浸玉函山。征馬蹴

巖裂。行人鑿空攀。誰何嚴詰盜。罔兩知避姦。日閱棄王入。時看裊載還。王侯因設

險。客子不爲歎。既過長轡盡。回頭破旅顏。

徠翁。送蔚宗游函谷。

蓬萊仙子騎龍還。千載長留玉笥山。笥裡白雲今猶在。君能持贈與吾看。
南郭先生。石叔潭之函關。留別諸子。和此即寄。

思君忽望夕陽曛。何意偏分玉笥雲。似是猿啼三峽水。到時風雨不堪聞。
箱。篋。訓同じき故通じ用ひて。笥も又同訓なる故。玉笥關とも詩に作りたり。
南郭先生。送君岳遊函關二首。

關門險路彩雲邊。闔闔躋攀欲到天。掌裡芙蓉擎白雪。鏡中湖海冷蒼巖。洗頭玉女分盆浴。挂幘珠花著樹鮮。知爾山陰逢道士。寫經兼更學神仙。

岩壑大嶽擁關東。地關神都瑞靄通。不比泰山臨魯小。從來函谷據秦中。秋探石室巖雲白。夜宿天門海日紅。匹練動時看上國。應須速下自西風。

又。遊玉笥山七律六首。其中。

玉笥山東溪谷分。仙羊化石路成群。迷蹤漸寤黃初起。壯志聊酬宗少文。停屐雷轟巖下電。拂衣烟亂嶺頭雲。已驚投宿多村落。且喜尋源洗世氛。

傳言此地勝驪山。靈液殊開大嶽間。一自始分神女澤。至今長駐里人顏。注來不盡疑香灑。浴罷何妨共玉環。肌骨并除塵垢事。便應輕舉踏雲還。

人家鳥道極崔嵬。處々躋攀試步回。九折溪流東澤水。千尋樹杪太平臺。海天龍氣蒸遙起。

嶽裡雲根雨忽來。歸舍解衣堪避暑。山中更有濁醪杯。

峭壁攢峰陟近隣。摧林蹴石道愈新。捫蘿自怪驅山鬼。叩牖誰知養谷神。但恐始寧門下客。復驚臨海郡中人。謝家已是多狂態。曲蓋相携遺此身。

宮下堂洲艸木鮮。樓臺幾處擁溫泉。丘中已遇鳴琴客。溪上何來采藥仙。隱霧斑毛窺豹穴。投珠明月墜龍淵。翔遊總是人間外。不怪名山有洞天。

西風昨夜復驚秋。地限關門不可留。非有真人揚紫氣。何嫌我輩跨青牛。雙生色夾峰雲送。孤照天懸岳日收。回首慙慙煙靄裡。山靈亦似待重遊。

箱根に温泉あり。故に驪山の事を述べたり。且つ東澤も地名。雙生はふたこ山也。ふたこ山は左に見ゆ。縣次公。函關七律。

關門百里倚龍崕。十二東秦車轍通。天色幾餘黃霧外。人家半住白雲中。湖分銀漢星辰湛。峰並芙蓉冰雪同。一自終軍棄繻入。于今士氣此間雄。

箱根權現の事は。東鑑に賴朝公。相摸國早河本庄を寄せられし事とも載せたり。
早雲寺は。北條五代の墓石碑あり。南郭先生。早雲寺覽古。

臺殿松杉入空翠。巋然獨存知何寺。云是黃金長者園。唯有青苔布滿地。古木森々歲月長。野人爲說全盛事。綺羅春殿舊時花。墓草碑苔冢壘々。空伴名號一列五公。剝石一看皆涕淚。

憶昔永正元龜中。天下車書久不同。萬邦瓜剖相吞滅。龍戰虎爭誰不雄。就中勃興北條氏。一朝割有海沂東。累世子孫功業繼。八州草木共偃風。大城列峙精兵饒。晝擐金甲夜鳴弓。氣籠山岳風雲起。勢捲波濤江海通。何意中原出霸王。一旦長驅入封疆。石垣山上臨闔境。震擊天雷不可障。計窮面縛悲瓦解。地池社稷共喪亡。即今四海日月新。此地爲餘供香人。關門行路通大嶽。吊古且過溪水濱。野店山橋無情甚。往來屢送馬蹄塵。

北條五世は。元祖早雲。平清盛の後と申すにや。備中の國の人にて伊勢新九郎長氏と申す。其次氏綱。其次氏康。其次氏政。其次氏直也。早雲は其初め流落しておはせしが。主將務攬英雄之心。といふ語を人の語りけるを聞きて。我關東を掌の中に握るべき事を知りたりとて。遂に伊豆の國を切取り。それより關東八州を治められしが。氏直に至て亡びけり。盛衰記に。兵衛佐三百餘騎を引具して早河尻に陣を取る。早河黨爰は軍場にはあしく侍り。湯本の方より。敵山を越えて。中に取籠めばゆゑ敷大事なりと申しければ。それより米嶺石橋と云所に陣取りたまふ事見えたり。いざよひの記に。ゆさかどぞいふなる。からうじてこえはてぬれば。又ふもとに。はや川といふ川あり。まことにはやしと見えたり。曾我物語にも。ゆもとの宿を打すぎ。ゆさかの峠に駒をひかへて弓杖つきて云々。そのうちよこめもせず。うちけるほどに。大きくづれにこそつきにけりと見えたり。

小田原。(至大磯驛四里)。此城は。北條家世々保ちし所なり。

盛衰記に。治承四年八月二十五日。和田小太郎義盛三百餘騎にて。鎌倉通りに腰越稻村八松原大磯小磯打過ぎて。二日路を一日に酒匂の宿に着く云々。いざよひの記に。まりこ川といふ川を渡り。こよひはさかはと云所にとまると見え。又平家物語。重衡海道下りの段。足がら山うちこえて。こゆるぎの森。まりこ川。大いそ小いそと見ゆ。又盛衰記に。相摸國圓子川を渡りたまふ時。梶原が。鎌倉殿に水をさすと蹴かけ奉り。睨み返りたるに。梶原。まりこ川ければぞ波はあがりける。と申せし。曾我物語に。兄弟宮根にかゝりけるが。まりこ川を渡りつゝ。手綱かひくり申しけるは。あどの三つ。祐成五つの歳より二十餘の今まで。此川を一月に四五度づゝも渡りつらんと言ひし事見ゆ。丸子川は。今の酒匂の川と見えたり。又按ずるに。中頃相摸川といひしを。畧してさかわといひしにや。永祿三年。上杉輝虎十二萬の兵を率い。先軍は大磯小磯。後備脇備は藤澤田村などいふ所に陣し。輝虎は高麗寺山のふもと山下に陣して。蓮池まで亂入しといふ事。甲陽軍鑑に見ゆ。蓮池といふ所未詳。小餘綾磯。方角抄には。大いそ小いその邊を云ふなりと見えたり。後撰。右近。

思ふ事待つに月日はこゆるぎの磯にいでもや今はうらみん梅澤。古き物語にはしるさず。

曾我の里。海道より十町ばかり山の中にあり。曾我兄弟が住みし所なり。
今嶋立澤といふ跡ありといふにや。西行法師。

心なき身にもあはれはしられけり嶋立澤の秋の夕暮

と詠みたりしは。新古今に載せられたり。此あたりの事とて名づけ云ひしを。飛鳥井雅章卿。

秋ならぬあはれも袖にしられけり嶋立澤のむかしたづねて

とよみたまひしを。嶋の羽打ならし秋の夕暮にたちたらんは。いづれの所にてかあはれならざらん。此地にのみ限りて。あはれなるにやと。勅定ありしとかや。其後冷泉爲久卿。此地にて。

爰をのみ嶋立澤と思ひあかばげにこゝろなき身とやしられん

とよみたまひしと人の語り侍りき。詳なる事を知らず。

大磯。(至平塚驛廿六町)。南郭先生。此地にて眺望の詩。

驛路西連玉筥關。關雲半引海雲還。只餘沙磧堆如雪。更見波濤崩似山。

曾我祐成。父の仇を報ひし後。祐成がこゝろをかけし虎と云ひし女。尼となりて念佛せし菴の跡。此あたりの山にありといへり。曾我物語に。とらは大磯に歸り。高麗寺の山のおくをたづね入り。柴の菴にとごもると見えたり。
花水橋。長き事四十三間といへり。

諸越が原。堀川二郎百首。源忠房。

名にしおはゞ虎やふすらん東路に有りといふなるもろこしが原

此ほどより富士よく見ゆる。

平塚。(至藤澤驛三里十四町)。馬乳川。是は甲斐の猿橋より流れて爰に來るといふ也。古へは

此川を相摸川といひけるにや。東鑑。文治四年正月。三浦介義澄浮橋を相摸川に構ふ。など見

えし是なり。俗相傳へて。建久年中頼朝卿。稻毛三郎重盛が妻の追福の爲に。橋を渡されし時。

馬駭きて川に飛入たりし故に。馬入川と名づけられしなどいへども。未だ誌せる物を見ず。鎌

倉の畫のしま。南の方へ見ゆ。すべて此あたり富士よく見ゆる。

藤澤。(至戸塚驛一里)。鎌倉山見ゆ。

戸塚。(至程谷驛二里)。武藏相摸の境なり。

程谷。(至金川驛一里)。

金川。(至川崎驛二里半)。鶴見橋あり。この橋の名古き物には見えず。

川崎。(至品川驛二里半)。六郷川。船渡し。

此一巻は。過にし年あづまに赴きし時の筆のすさみなり。もし世の人。酈道元が水經を注せしに似たりと賞せんは。われをしる人といふべからず。牛刀用ゆる事を得ずして。空しく

筆を藝苑に玩ぶと笑はれなんは。是わが知己なるべし。

明和二年乙酉七月

湯 元 禎

東 行 筆 記 終

秋 山 の 記

上 田 秋 成

秋の山見にとにはあらで。此三年が間。足曳のやまひに懼づろひて。世のわたらひも何もはかしくしからぬ。斯るを。昔は但馬の城の崎の温泉に効驗見しかば。此度も亦思し立るを。後に立て来る人も。年比深うそみし事あれば。ともにとて。は、そ葉の仰せのまゝに召連るゝなりけり。長月の十日あまり二日といふ日首途す。親しき友垣の女の許より。明日なんと聞え給ふにぞ。不意も思ふたまふる。玉鉾の道も絶えくゞにどか。覺東なさゝへ添ひて。胸つぶるゝぞわりなき。

朝な夕なゝれにし君が出でゆかば何わざをして月日過ぐさん
秋風も甚う身に入む頃にしも侍れば。最能ういたはりて。御事もなく彼處に到り給ひね。此あつごえたる物。最麗々しげなれど。山里の朝宵凌がせ給はんにはとてなんと。聞え來しに。
情ある人のこゝろをつくし綿身に添へゆかば寒けくもあらむ
宜しも天の羽衣と奉りぬるは。志す處なん。山陰の國にて。最甚う寒き所なりける。須磨の海

面如何に眺むらん。明石の泊はさぞなど。誰々も羨み聞ゆるにぞ。先づ彼邊歴つゝ往かばやとて。西を指す。草の枕のをかしきは。蘆屋川の松陰に暫時下居て。土田かななるに。小石を積て。木葉松笠打くべつゝ。茶を煎て遊ぶ。鶴煙を避るといふ句の意したり。賢くも小瓶一個は持たせたりけり。

蘆の屋の蟹の焚く火のそれかどて道ゆき人も過がてに見む

日高けれど。住吉の里に宿りぬ。須磨の浦傳ひする今日は。海の面和やかに。百船の交通。荊菰の打亂れつゝ。渚には釣ほこりて遊ぶを見れば。この磯山松の色も。人々の眼も一様緑なる。才有る人も口閉るわたりを。况て打出づべうもあらず。此連たる人の。古へ光源氏の君の。罪なくて流浪たまひしと云跡は何處ぞ。巳の日の高汐とは。此海の荒たるにこそ。今日にはよきには。然ること争でかと思ゆるを。かゝる處にも。年月念じ過させけんよなど。打呻き哀しがる。最聞にくしとにや。齡の程五十に足らぬ法師の。同じ松陰に在るが。疾視る様の面相して此の都人よ。さる妄言を。眞實げに打物語りたまひそ。彼の式部とかは。空言ゆゑくしく作り出たる報に。恐ろしき所に繋かれ。永劫の苦しみを受たるぞかし。唐土にても。斯様の事書ける者の報ひなん最罪深しかし。羅氏が三代まで啞子を生しなども云。かまへてく信ずまむき文ぞと聞ゆ。思ひかけず。目覺しうこそ有けれ。法師も同じ道行く人なれば。行く物

語りしつゝ慰む。最忝なき事多かりけり。只今の御諭こそ。世に珍らしくも承り侍れ。されば彼の物語は。佛の教の尊きにも。旨自から通ひ。現の世にも。畏き誠と成りぬるよし。昔の人々の論じ掟つるを。如何様に思し分きて。かうまで下し給ふらむ。其道理。片端許も承らばやと云。さればよ。道々の文の道理釋く人は。強ちにも其旨深からんとては。兎さま角さまにも付けて言しらふ程に。果々は。本つ意にもあらぬ私言をさへ取難す也。此物語の道理云なん。別て嗚呼なる。加之。式部は石山の佛の變化也と。最狂はしきまで譽なせるを聞けば。己が畏む道の案内にもやと。可惜眼を費えたるが。今は取返さまほしき年月なりけり。然るをかゝる實事。いかで女業ならん。父の爲時が筆加へしと云は。強て吾佛と崇むる人の。主なき眼なりき。抑も詳にかへし見ば。我言俟たずも。自ら悟りぬべきものぞ。其一つ二つを語らん。先光君の人品如何にぞや。容姿の愛たきは言も更也。才の程も古へに競ぶべきは難くぞある。本性のまめ立ちたる。交野の少將には笑はれ給はんよと云。能く見れば。非ずなん。只管に情深く。親きにも疎きにも。萬に行渡ひて覺ゆれど。下には執ねく。俵けたる性なん在す。薄雲の御事は。人皆罪深しとこそ見れ。空蟬の蛻の衣も。猶壯き程と怨すべきを。前齋宮。玉葛の。うたてもて煩ひ給ふは。親さま悪きわる人なるを。世の中まつりごちては。文王の子。武王の弟と准じたる。最聞にくし。右衛門督の唐猫の通路は。心とまらぬ邊にさへ。如何岩根

の松よ答へん。免しなき眼に。人の心を疾ましめ。野分の朝の垣間見は。親子の中らひにだに。執ねき心遣ひも何事ぞや。夫が餘りのわれたる戯言も。此君の情しきは。世の人には過けんかし。さるを。須磨の流浪。己れ罪なしと思したるは。教なき山賤の心とや云ん。又桐壺の帝の此世ばかりは扱もあらめ。神ざりましても。猶愛慾の眼明らかならず。汝は罪なき身を。争で斯る荒磯に朽んとやすると。都に天翔りては。朱雀の帝の曇りなきを。憤り睨みて。御光を惱ませたまふは。さしも悟なき御神にぞまします。朧月夜のまひたる私語。王命婦を迫りくなどは。厳めしき國つゝみならずや。夜居の僧が饒舌。老や惚たる。光にや媚びたる。大學の君ぞ。いみじき有職にて。まめ人の名を譽るかど見れば。小野の夕霧分迷ふは。友垣の實なし。見よ。筆の遊びの賢しきまゝに。此源氏の君ぞ。他の國なる聖達にも。をささく劣らじの負む心もて言なしたる。戀の山にはくしだをれ。口賢きがうたてけれ。かう様の筆つきなん。女のめしき本性にてこそあれ。されど言の文に妙なる。志操の巧なる。此類の物には。和漢にも比びなきを。若し強て是が徳見んとならば。雨夜の物語に。大概の人の心の隈。名残なくあなぐり出たれば。却りて讀見ん人の。しづ心の穢なきを誠むる教ともなるべき。大凡萬の事も。私言もて斷り爲さむには。怪しう僻める心も。直くまめくしく執成すべかめり。さる業のうたてさよ。我佛の道も。怪しう珍らかに説なすはかたはなり。此物語も。其世の様の

羞明限りを。きらくしく寫出たれど。其遠からぬ世に亂れたるを見れば。まめ人の争で推戴くべき。今の御ほん時ばかり忝なきは。往古よりも稀なれば。君を仰ぎ奉る餘りには。己が同士喜びする暇には。讀みて遊ぶべけれど。さばかり心いりて讀むとも。何の益なき徒文なり。かまへてく感ふべからずと。最すくしく聞えたり。志す方の違へるには。行手に別れぬ。猶後へに立て往かまほしく。言問ひ學ぶべき法師なりけり。鳥崎とか云邊の。清き渚に下居て。時過るまであさり居り。日も山の端ならんはと云に。

暮るゝともいとはんものか燈火の明石の浦にむかふ旅寐は。大藏谷といふ所に宿る。今宵なん世舉りて月見る夜なる。所がら徒にやあらんとて。濱邊に出たれば。月花やかにさし出て。風波いさゝかも立たず。流石に海面は。青にびの衣着たるには。彼の這ひ渡るほどいへど。來し方は。夜霧立籠めて見えす。あはと見ながらも。淡路の島は只差向ひて。行路や有ると思ふばかり也。濱づとにとて。

うら風に雲吹はれて長月のながき夜わたる月のさやけさ
或人も詠める。

いづこにも露おく袖をこよひしも月にあかしの浦の旅寐は
さてしも濱風を感じかば。朝は歩行苦しくて。遠近尋ねも見ず。曾根崎の社に詣づ。今日ぞ新

嘗奉る日なりとて。最賑はし。遅く詣れば。何わざも得拜み侍らず。此廣前の松陰に。潮の湧くが如く人立籠て。叫び罵む。何事ぞ見たれば。相撲が場の。今ぞ手合せすと聞ゆ。此國の手力男は。けふと待ちつけたれば。競立ち。西東と。百手番ひ定めたるべし。見る人もえいや聲を作りて。各自が引くかたを頼む。最勇ましな。足弱き者は岡に登り木の枝に下りて。危氣なり。或が中にも。老たる人の。幼なき者を背に負ひて。いかでと見んとする。人ひしと立並びたれば。巖を壁くに似て。幼稚が甚う物おびえして泣く。いといたう危うし。残の齡いつまでとか。斯る物見はする。此愛子白玉とも傳くらん。壓打たれば。如何許か泣感はん。世に憎き者の限なりける。頓て事果てしよ。雲井轟く聲して。人立騒ぎ。山も動き出る如くなるも。別れに散行きぬ。それが中に今日の抜出ならめ。勝誇り。大路踏はらし。最猛に。人押分き行く。ねるは誰が子ぞと言問はまほしく。見る人も是羨むなん。いみじき面目なりける。今宵豆崎の宿にて。夜べの濱風名残なやましきに。此家の總角が。乞丐者ど。何事をかからがひて。聲高なる程に。隣向ひなるも出来て。口々なるは。雨蛙の様にて。あはれ互みに疵付やすと。心ならねど。仲裁わざも由なければ。障子引閉て籠り居り。いつしか心の限り言果て。別れに打鎖まりぬ。昨夜も今宵も。寝られぬ草の枕なりけり。行きく。播磨の國何の郡とか。西光寺野とて。最廣き曠野に來たる。行手百丁許と云。西も東も南

も。山立並びて。目もはろくになり。行くく稲葉そよぐ風も吹立たず。小草花咲き。小松生ひ。芝生隠れの澤水に。鳥どもの浮きて魚を喰ふ。此景色得も言ず面白し。雨いさゝか打注ぎ來るに。遠山は見るく雲立籠て。風交に降りみふらずみ。人の往還もあらずなりぬ。色々の花ども。露を帯びて麗し。くら龍膽。女郎花の名残なる。よめが萩の花。白菊のよるほひながら芳しき。大和撫子は濃からねど。時過したるが哀れなり。躑躅花。薊の狂花。言續くれば。春夏秋の草々を。花一時の眺めしたり。尾花ぞ繁く招き合たる。折知り顔にてなん。さるどり茨の赤玉耀かしけれど。取らば拇指や傷はん。彼是摘はやして。手束に餘りぬ。厭かず面白きに。立ぬるゝ憂も忘れて。

雨そよぎ風吹立て秋の野の花のひもどく時は來にけり。家もあらずにど。人々わびしがるにぞ。人里求めて。晝の物喰ひなどして。出れば日は早西に傾けり。辻川と云は。市川の上流にて。最大きなり。瀬々の岩むらに。咽び流るゝ水の音の凄じきは。雨のやがてにやある。左右に山立並て。眺望最好し。嵐山。大井の渡りの面影よといへば。吉野川。六田の淀瀬にやと云。孰れに寄するとも。鮎は此頃降りぬらんどいへば。否ず。此川なん生野の谷々より落來れば。彼山の白銀吹く氣の滴りには。絶て得栖まぬと云。されはこそ是が劣りたると云。館と云は。いともわびしき山里也。家どもむづかしげなれど。暮

果しかば。爰にと定む。打見しよりも。住たる様よしめきて。萬心ありげに。粥なども供して喰はす。此處を館と云は。誰殿の夢の跡にや。赤松山名の昔語あるべし。主人呼出て求むれば。只此國の頭の殿の。往しへ此處にどのみに委しからず。臥すべき所は端の間なれば。山風吹入てすゝる寒氣なれど。望の夜の影あらはにさし入て。尾上の松風。軒端行く水の音に響きあひて。おかしき旅寐なりけり。明石の浦の夜あそび語り出れば。或人。

浦波のゆたに見し夜の月よりも猶山里はのどかなりけり

波風こそたね。最はるけうて。しづ心もなかりしと云。いと幼稚めきて。山ふところなる所は。月早く見えずなりぬ。翌朝。雨の餘波の道芝露けく。身にしみて覺ゆ。但馬の國に入りぬ。粟賀と云郷に。よき茶ありと聞て。其家に入る。寔や。仙靈と云名は。懸まくも畏き。藐姑射の山のかひより賜はせしと聞侍るには。道行づとに求めて出づ。

朝寒にめざまし草をもとめては山路の露金おきてゆくなり

扱故郷出で七日と云に。志す所に來たる。なやと云所より。輕き舟もとめて漕れ行く。此間山も川も。舊見したゝずまひながら。昔は春山の霞こめたる空の氣色も。己が齡も。最若かりし程なりき。今や二十年經し心には。朝立つ河霧の。覺束なさへ添ひて。古きを忍ぶ涙ぞ。秋の時雨めきたる。江山皆舊遊と誦んむつゝ行く。古へ堤の中納言の。爰に浴すとて來られし

時。夕月夜おぼつかなきをと詠みませし二見の浦は。此わたりなりと云を聞て。或人。

けふ幾日とりも見なくに玉くしげ二見の浦のあさ明の空

夫は播磨なるをこそいへ。往しへ爰に來る人は。難波津の船びらきして。彼處を經つゝ。加古の島など云邊より。陸路を此處には來ぬらん。所の様を見るに。若名づくべきにもあらず。見渡せば。霧の間出る蟹舟の。權棹とりくに。何處に漁業すとか漕出る。最凄まじき秋の江には。是ばかり賑はしき詠もあらずなん。城の崎に來て見れば。宿舎は昔ながらにて。舊見し人はあらず。偶ま君我を忘れずやと云を見れば。昔の人なり。髮髭半白なる翁の。彼方よりも。我を如何に淺ましどか見らん。主人と云も。卵なりし人の。今はおよづけて。昔物がたりなす。例の扇して住ます。故郷人も此處に在て。訪ひ來たるにぞ。旅心地すこし忘るゝ様なり。爰に集ひたる人は。都なるも田舎なるも。男も女も。朝夕に訪交し。馴睦びて。打混り禮なきは。かゝる世界とぞ覺ゆ。向ひの局に住む人あり。難波人と聞ゆ。四十有餘と見ゆる女君に。六十過たる皺ほる人一人傳きたり。此翁。あるじの許に來て。我頼める人は。男君に別れ給ひて。三年以來甚う思ひくづをれつゝ。人に立交り給ふをうたてきものに。山住など思し立せ給へりき。太郎子の慰めかねて。己れにあつらへ。爰に賺い出立せたまへる也。事どもあらば後見させ給へと云。何事をも承らん。後やすく思せと答ふ。此女何様にも世を倦むたると見え

て。人に見ゆる事をもせず。ひた家籠に籠籠て。湯浴などもをさくせず。萬につましましう操ある人どぞ見ゆ。容などもかたほならず。ひたぶるに嫺媚に。瘡々と色白く蒼みて。睦月の半の梅の。垣根に散蹴れたらん香したり。此鄰下めしは。並びの國の峯山といふ所の法師なり。齡高く自重にて。聊かも猥りたる事なく。朝夕べにも。湯壺の中にも。阿彌陀佛の御名を稱へ止まず。有難き行ひ人なり。湯あむ隙には。此山に立せませす薬師如来。觀世音の御堂を拜み巡り給へりき。ひた家籠の君も。今日は物の氣の開ありとや。此法師に誘はれて。彼處に詣づ。道の程。後の世の事など忠實に教へ諭し給ふに。罪科の恐ろしとにや。縁言果しなく問ひ奉りつゝ。歸りて。皺ほる人。何事にかあらん。最腹あしく。凄むき眼相して。此二心人よ。何處に中宿りやし給へる。斧の柄今はすげ代ふべし。あの木の端にすかさされ給ふよ。さるあだくし。さも知らず。心の限り御宮仕へし奉る事の悔しさよ。今は益なき己れが。爰に侍りて何爲ん。唯今只難波に出立ち侍らんとて。旅はしぎ取出て。最あはたしく。聲しは涸れ。戦ふく面相ほてりたるに。猶鼻の尖に。ひら柿ばかりの物膨あがりて。紅く熟えたるには輝まけたり。女驚き惑ひつゝ。我君く。何事をかゆくりなく聞え給へる。故郷出て道の空より。御心の嬉しさを聞え給へるに。千賀の浦波寄かゝる心地して。乾間なき袖も。君が思ひに干して日比歴るものを。村雨過るばかりの間に。然る仇波のかゝるべきかは。理由なき濡衣打被せて。終の

世見果むとや。あはつけく捨て給はは。爰の海にも入りね。彼の法師いみじき行ひ人なり。すずろなる物疑ひして。佛の御罰蒙りたまはん事。御爲いと哀しさをと。をくく泣く。あの木の端が頭どりたりとて。何の報ひかある。ひく方に宣へるが。彌よ後めだきとて。赤鼻いららぎ。蜂ぼきたる。いと淺まし。此宿舍なる人々。是を見聞て。皆惘れ惑ひて。頓て此郷に。千名の五百名は立ちにけり。最むくつけ。爾後は人にも這隠れず。面なげにもあらで。唯離立並べたる様にてぞ有ける。此女何許の人ぞ。衣など馴たれど。賤氣にもあらず。いつき子も、たりとや。けいしなども具し。うから族も廣しとや。さる人々迄いみじき耻與ふるなん。女ばかり許し難かりける者はあらじ。女將た此頃は目を痛く病みて。いぶせく膨あがり。物などもつやく言はず。打臥したり。氣の逆上たるにこそ。峰山の法師ぞ。前の世の報ひにやと。打叫き居る。最いたはしき事と云。壯き人は。されど後めたくや在すらむなど云。斯るはてくの國にても。人の物言さがなさまよ。雨は時じくに降りて。日數經にけり。今日幾日ぞと問へば。夜には九夜と云。山下風梢吹鳴らしつゝ。ちどろく敷。幾夜寐覺がち也。

山里は雨さへ夜さへあらしさへ世に似ぬ憂のひまなかりけり
又思ひつゝけて。
いを寐ねば夢てふものも夜がれしてたよりほどふる故郷の空

はそ葉のいかに寂々しくてやおはすらん。斯う捨て奉りて來ぬる罪畏し。彼方にも山里如何にわびしからんなど。思ひおこせ給ふべし。最添けなき事を。こゝなる人と歎く。此人も打詠めつゝ。

中空の雲のまよひにたぐへつゝ旅寐の袖は時雨ひまなきとぞ嘆つ。冬はまだきに霰のたし／＼と音して。いといたう寒し。昨夜は霰なども降りたると云。物の音も聞分くべからぬ宿なりけり。

染めもはてず散りもはじめぬ山陰に早くも冬のけしき立けり

神無月に成ぬ。風吹荒れ。雨は夜晝降る。日の影今は忘れにたりと。人々わぶる。丹後の國の人の語れるは。なべて此並びの國は。西の風吹來れば。冬は必しもかくて日頃降るなり。さなきだにも。雨は都あたりよりも多く降るを。私雨とは言慣はす。又雪降れば。三尺五尺も降積むと云。聞くにさへすゝる寒しな。夜半過る程。鴈の啼渡るを聞て。

小夜中に鴈啼わたるとこよ出て列におくれし鴈啼わたる

五日といふ朝。辛うじて日のさし出たるを。影忘れし人々。立騒動きつゝ。山に攀ぢて岡見やせんと云。河邊に釣や垂ましと云。心々に定め兼つるを。荒磯の小貝拾はんと云に。皆かたまげて出立つ。涯もなく濶き海の。雲と浪のけぢめも見ぬ濱邊に來たる。はやくの人の。雪の白

濱とよみし所と聞ゆ。げにも眞砂はそれか降積たるやうになん。里人は高野の濱と呼べり。今日は長閑にて。海は平かなりと云も。寄來る浪は。山もこゝに動き來るやうなり。かゝる境は見ぬ人のみにて。只あきれにあきれて打望めり。白き帆數多見ゆ。此見るが中に千里や行く。雲に入ると見れば。又追來るが見ゆ。心魂も空にたぐへ行くかと思ゆ。浦の神の丘に登りて。檜割籠小瓶取散して遊ぶ。此寄する浪は。只爰もとに打懸らるゝ心地す。例の人に如何にながむやと問へば。恐ろしきに。氣の昇りてとのみに。物も言はず。

天の原八重の汐路を吹こしてなごろ高野の濱の夕風

浦人教ふ。此東にさし出たるを鹿島山と申す。又あの黛なすは。隣の國の經が岬なり。是が支へて猶其方は見えぬ。後なる山に登れば。西の方は。隱岐の島雲居に見ゆると云。萬里の秋に驚くと云しは。かゝる境にやによほひけんと思ゆ。渚に下りて貝ども拾ふ。色々の染物して。世にも清うらなり。人皆飽なげにて。袂裕かに裁てといはましをどつゝしり唄ふ。老も壯きも幼心して競べ争ふ。負くる人一人もあらで。最かひ有る遊びとやいはん。

わだつみの手向のちぬさ散みだり渚に秋の錦をぞしく

心地悪しと云し人も。是に立出て。

とめくれば雪のしら濱名のみして千くさに玉の色は見えけり

こゝに驚かるゝは。蛭少女等四人して。小き舟漕返りたるが。頓て下連れて。この浮寶を。容易と潜に引上ぐるど見し程に。おほなく荷ひ持て来て。此真砂の上に置据えたり。浪の取て往ねば斯くはすなりとぞ。鬼の集きて爲すにや。いと目醒しくぞある。かへる山。七日の夜の月にきほひつゝ。競ぶの山路ならで越來。いと嵯峨しな。

山高みあらしの上をのせて空にさやけき月を見るかな
又の日の夕ざりより雨降りて。昨日なん優曇華の遊びせしと。人々喜び合る。住む軒の楓の紅葉。夜の間に淺ましう散果ぬ。山もはた。

苔深き庭はもみぢの散りしきて紅くゝる冬の山里
夕月の面白きに。笹の浦まで歩む。爰に庖丁が家あり。此樓の欄に肘を懸けて眺むれば。山の影江に沈みて。水の面の小暗きに。鷗の立居る聲々。釣舟の漕ぎて歸る。是や滿壁山水の堂と打誦んむつるにも。唐詩習はねど。

水國陰山秀。江村楓樹稀。日晡風浪湧。漁父收魚歸。
俄に雲起りて。霰降り。風も烈しう吹く。

冬の夜は雲の絶間に月さえてあられ音あるさゝの浦風
月又さやかに。時雨も打注ぎ。道の程可笑き夜なりけり。初夜過るより。吹く風家を揺り。雨

も霰も只降りに降りて明けぬ。

木の葉浮く山下水の厚氷心とけずも日數經にけり

又。

かくてのみ住みはつべくば山風のはげしき音もうたてからまし
どぞ思ふ。今日も同じ空にて在わびぬ。十一日の夜。猶景色立て寂々しきに。何くれの物語して遊ぶ。里人何某訪ひ来て。いでや新らしき草はひ一つ奉らん。頓て木曾の夜の事なれば。我郷の者すら。此夕づけて承るを。客人の御前に。己れより先に語れる者は待らじ。先日詣で給ふ竹野の濱に住て。最貧しき者の娘の。まゆごもりにて有るが。此里の何某が家につぶ寝する男と。何の程よりか。最哀しう言語らひけり。男時々通ひけるを。主の翁腹悪き人にて。聞付て。許さうりけり。さは心にもあらで。かれなく成にけり。女甚う思ひ煩ひつゝ。今は露ばかりのあだものを。あふにしかへばとて。最嶮しき山路を。母の前能く言拵へて。出立來る。春の夜の月の朧なるに立隠れて。亥の一つ許に。辛うじて爰に來けり。男いと嬉しうて寐にけり。短夜なれば。物らいふ程もなく起きて行くを。男覺束なさに後に立て行けど。此邊の坂路を隔てたれば。彼處まで得行か。山の手向に手を別ちて歸來。斯てぞ時々通ひける。いと哀しき契なりけり。早月雨の晴間ある夜。例のたどしからで越來るに。山の手向過るほ

ど。草高く茂り合て。風戦げるよと見る。巖なりと見しもの。むくく起上りて。此方
どまに向ふを見れば。あないみじ。あな恐ろし。大口の眞神といふ者なりけり。あなやと言へ
ど。人氣遠ければ如何はせむ。唯戦く。後邊にるざるを。神許すまじき眼相して。喰付く
どぞ見る。限り也と思ひて此前に俯伏し。額に手を摺合せて。最悲しき聲して。大神聞し召せ。
生ての世に。命ばかり美しき物はあらぬを。其に代へん物は。思ふ男に逢ふ事の嬉しき也。蟹
の子なれど手弱女なるを。神の占め給ふ嶮しき岩根踏越えて。夜とも晝とも分かず往通なん。
身を惜らしにも非ず。されど道の空にて喰れん事の口惜さ。男の許に往きて歸らん程。暫し
給へ。よぎ道だになきものから。明ぬ前に爰に詣でて。必ず奉らん。神にて在ませば。偽ると
も將通るまじきを。國の守に訟事申すが如く。泣く。言ふ。聞入れたるにや。打緩び。嚙
付かん氣色なし。扱こそ尊き御神にて在ますれ。頓て奉らんとて。這々も其處を逃去る。虎の
口免れしと云は。正しう此事なるべし。扱男に逢ひて。此事打出んには。將た丈夫心して送ら
んに。請ひし事背けりとして。男をも俱に喰はんが最愛しき。只等閑にて別れんをと思ひ定めて。
又逢ふべきにあらねば。限りなりと思ふにぞ。さめくと泣く。男不審て問へど。能く念
じて明さず。只母の重き勘當に曰へば。暫時は得こそ參らむ。さは浦よりおちに忘れなんこ
どの哀しき事と。涙禁めかねたり。男。然る事争で思ひ知るべき。あな果敢なげ。天の川瀬は

隔つるとも。誰故にか亂れん。己れ一向に身を偷みて。疎からず問行かん。そも遠からぬ程に
ど。言慰めて別れぬ。都の人ならば。哀れなる言の葉なども詠交すべきを。さる言詞も知らね
ば。明ぬ前にと出立つ。女。今宵なん夢路廻る様にて。泣く。来る。心魂も消々なり。此
手向に登り着くに。かきけちて物も見えず。如何に聞分きつらん。不審けれど。命得たる嬉し
さに。山を早く下りぬ。流石に恐ろしうて。少時は絶る様なりしが。猶はた得在らで。或夜又
出たつ。人に聞きつる事や有けん。葦笠と云物に。鮮けき物。何やくれや取入れて。擔きもて
來て。彼手向なる巖を掃ひ清めて机代となし。此贅つ物を置並べ。峰に向ひて。手を摺り額
つき。獨語に誓言する様は。我が大神。畏き御耳振立て。聞し召せと申す。今詣づるは。
親の賜にあらず。寔に神の賜はりし命なり。前の夜の御徳には。何業して報ひ奉らん。貧し
ければ。聊かの寶も有たらず。此捧ぐる大饗は。物の穢なく。己が心の限なり。冀ふは御心を
和して聞しめせと。千度誓首つ。爰に越て。扱例の曉待たで歸り來るに。取並し物残りなく。
葦笠のみぞ打散らしたる。最頼もしうて。今夜も又奉らんとて。躍り勇みつ。歸り來。此後は
往復ごとに。捧物の數を盡して。擔ぎ詣づるに。明日は跡なくなん將有ける。爰に竹野の濱の
此方なる。松本と云里に。山賤の鰥男住にて有るが。此女を懸想して。時々言寄れど。然るま
め人持りしかば。甚く綱びきて。一言をも答へず。山賤いとつらしと思ひて。此女の彼處に通

ふと聞て。或る夜。手向の岩陰に待伏したり。女。斯るをも知らで。例の物擔きて此處を過るを。山賤不圖捕へたり。聞えつる事何日までか。最さがしき御心の。猶思ひ堪え難くて。今宵定かに承はらばやと。強ちなるにぞ。爰に人と云ふべくもあらず。内々親の許せしにぞ。斯う忍びに通ふ所の侍る。君があそき御心に。今は應へがたくなん。此處許して通させ給へと云。今宵の關守いかで過し遣らん。強ても本意遂げんとて爰に待ちつれ。一向に心強くは。命失ひてんど。恐ろしき眼して言驚かしつ。強く捕へたり。命めすとも争で従はむ。我御神く。此仇追ひたまへと叫ぶ。山賤事の情も知らねば。猶強言聞えむとするを。此丘上より走り來る物有て。山賤が胼の邊を。骨まで痛く嚙付たり。あなやと叫びて倒る。女。我御神く。と申す。山を逸下る。山賤は空しく喰盡されしとなむ。最珍らしき談柄ならずやと。最口速く語り出たり。聞人皆驚きあへるに。彼は猛き者の中にも殊に性悪く。最頼もしげなしとこそ云へ。されば世を推知る悪人の上に喩へて云ふめるを。又かゝるも有けりといふ。あはれ然る悪き類の人も。枉て打頼まんには。其爲に眞實だちたる所爲も有とや。さりとも。其人永く寄る蔭とも頼まれ難くなん。昔 欽明天皇の御代の始め。山城の國深草の里に。秦の大津父と云人。商物數多積持て。伊勢の國へ行く時。道に二つの神囓合ひて。血に塗れしに行合ひたり。大津父志有り難き人にて。馬より下りて。情しく此鬪を扱ひ。血に塗れしをまで拭ひつ。

引分ち遣りしとなり。其比 帝の御夢に。此人なし上し給へと。神の告を見そなはし。かば。國々に求めて召上され。何の徳をか爲しつると問はせ給ふに。知らず侍る。唯此頃斯る事なん侍りきと奏す。聞召して。夫が報ひしたる也と知召して。大藏司に召させ給へりしとぞ。かゝる性なき者も。我爲悪からぬには。斯く報ひよくすなり。况て世の爲善からぬ人も。おほけなく袖打覆はんには。あな尊と陰頼むらんかし。されば大き聖の君は。尊き卑き善き悪きも。なべて木草の花の咲香へるを見そなはし給ふが如く。美しきを愛で。虫食るを切透しなどしてこそ。恵ませ給ふらめ。最有難き御心意ならずやと云へば。皆いみじがる。己れぞ博士めきて嗚呼がましかりける。雨は彌よ降續きて。頭さし出べくもあらず。朝。山の井の下に來て見れば。雨ふかみ今朝は岩井の水こえて山下しづく音まさるなり。十五日は。産土神の神諫する日なり。一郷立騒動きて賑はし。例は九月の九日なるを。其前宵八日の夜に。里人同士酔心地に。逸速く過失し出たれば。頓て官家に召捕られけり。さる障にて。怠らせしを。今日なん行はせらる。午の時に渡らせ給へり。今朝より雨霽れて。日の光さへ添ひたれば。きら／＼しく拜まれさせ給へりけり。例はみやびかなる事ども多かるを。此度は謹むべきにて。何事も穩しくて止みぬとなり。神も官家にはけあさるゝ事とて。別當の痛う打呻かるゝとなん。山里人は萬に古代にて。最有難かりける。十六夜の月最良く磨かれ出たり。

親の賜へりし日數今は満ちぬれば。猶疾しさの名残有るにも。明日なん出立つべきにて。宿の別れさへ今更に覺えて。夜更くるまで月を眺め居り。

冬枯の梢にかけて久形の桂の花を軒に見るかな

早朝宿を出づ。雨も間ある空なり。久美の入江に來たる。最面白き所なり。例の物おぢする人隣れがるは。波てふ物の聊かも立たぬがうら安しとや。蟹舟二人して漕出づとて。あなうたて。あの雲なん只今降りく。あはれ宿世なき渡らひ哉と侘言するを聞て。此心怯き人の。

見るめにもまづぞ涙はさしぐみの入江にぬるゝ蟹ならぬ袖

雨猶名残惜むか。追來るが如くに降り來。最佳し。野中と云郷の岡の邊に。秋の色濃く薄く。群松の中に立交りたる。是も見過しがたくて。

時雨には袖こそしほれ紅葉ばよ風よりさきに我見はやさむ

柏木ならでも守ます神は有けり。天の橋立。まだ見ぬ人々の案内して。此道芝は分るなりき。あふちの嶺より。與謝の海原最能く見ゆ。岩瀧と云浦邊に。小さ舟借りて漕渡り來て。此橋立の上を歩むく物語す。此國の風土記に。與謝の郡林の里に。天の橋立と云は。長さ二千二百二十九丈。廣さ九丈餘と記されたり。さて是を天の橋立と云所謂は。伊弉諾伊弉册の大神。天の浮橋に立せまして。瓊予もて海の底を搔なし給ひ。此國土を造り創め給へりと云。其浮橋の

天より落ちて。爰に跡止めしと云へり。昔も來て。今日又此崎の成れる形を見るに。さる緣由有るべき物とも見えす。こは人の力もて造り成せる。今の世に波戸とか呼べる物よと見定めつるは如何に。早くの世より嗜好む者の。斯るおよづれ言して。世を惑はずぞかし。心あらん人來て見よ。石を疊みて積める狀。内海の有形。國の利にこそなしつらめ。又是に付きては。天の眞井も爰に有と云。彌よ受けられぬ稚言なれば尋ねも見ず。廿年の昔爰に遊びし事あり。今日又來るも命なりけり。或人は甚う愛て。

踏みゝんとおもひがけきや白波の上にわたせる天のはし立

都なりせばとは。昔も願事せし。うべも言給へるはと隣れがる。才のほどこそ競ぶべからぬ。めししさのみは異らざりけり。兎角こそ云へ。此處を措きて何處ならんとて。

いくそ度松の千年もおひかはりとこ波よする天のはし立

夕日の浦は。文珠師利の御寺のあたりを云とや。名のをかしさに。

あきつ風さむき日ねもすいざりして夕日の浦にかへる釣舟

西の方をば枯木の浦と云は。昔細川の法印此邊り領し給ひし時。吉野山の櫻を移し植ゑさせしが。其後跡なく枯朽ちしかば。然る名呼初めしと云。花と人と共に空しかれど。猶今の世に忍びまゐらす君也けり。往手の磯廻に綱引する子等が。えいやさらなど。をかしき聲合せてた

ぐ繩線寄する。最珍らしみて。是見果つべく佇立めば。月出るまでもといふに。さまでは争でど。此腰うたげし石に。書付て立去る。

與謝の海や夕しほかけて引く網の綱でのゆたに物もひもなし

今宵宮津に宿りて。有明月の夜ごもりに越ゆるは。此國に二つなき高嶺なり。ふかうの嶺と云。降来る雨に競ひつゝ分登る。竹輿の中だにしとゝにて。登り果れば風に晴て。憂を寒さに換て下りく。爰に昔し鬼の住みしと云大江山は。八重山隔て、奥まりたる方に。繁山高く見さげらるゝ。變化の怪しく恐ろしかりし事。源の頼光朝臣の猛かりし事どもを。物擔く者等が語り續くれど。耳留めて書付くべきにもあらず。越ての此方に。天照す大神の。岩戸籠りませし跡なりと云は。したゝかなる巖に咽ぶ瀧浪の音凄まじし。往古大神の御座の岩床なりと云へり。こゝも附會言にて。尊とくも覺えず。神山ののみぢ葉今は散盡きしも。猶數々見ゆるさへ。嵐に競ひて目も文なり。

神風にいぶきちらして紅葉せし山より冬はふかくなるらん

大神の宮居有り。又豊受の大神も立せませす。社傳也と云を聞けば。此國の鎮座を初めと申せど。不審きは。垂仁天皇の御代に。倭姫の命。大神の鎮もり座すべき國求め歩き給ふに。近江美濃の國々を歴て。伊勢に到ります時。御神。姫命に告げ給はく。此神風の伊勢の國は。常世の浪。

敷浪寄する國なり。かたつ國のうまし國なり。此國に居らまく思すと諭し給ふまゝに。百船度會の郡。さく鈴五十鈴の河上に。宮造りし給へりしと云事。日本書紀を始め。何くれの古き文等に載せて著かりけり。又こゝの謂れは。延暦の儀式帳に見えたり。天照大神。眞木むく玉木の宮の御代に。伊勢の國度會の宇治の五十鈴川の邊に。大宮造りまし、後に。雄略天皇の。大御夢の諭。蒙り給ひて。丹波の國。比治の眞名井が原より移らせまし給ふ由を記されしかば。疑ひなく。爰は豊食の大神の御跡なるべし。見渡せば。山開け。川長く流れて。天の眞井が原てふ。往昔を留めし國がたになん有る。社傳寺記に記せる事ども。國史古記録に違へるが少からず。しかすがに幣ちらして。今日までつゝみなかりしを。ゐや申し奉る。福知山の宿のむづかし氣さに。居ぎたなき朝出しつれば。今朝おく霜は別て身にしみて思ゆ。吉見の竹田と云郷は。家作の實によしめきたるに。都遠からず思ゆるは。昨夜のわび寐の心づからにやあらん。爰なる人の。物言ふとはなしに。

よし見の竹田過ぎがてにする

ど。さゝやかに聞ゆるに。

難波人蘆火焚く屋をしのぶにも

ど。取敢ず書付く。右手の山に沿ひて。煙の立つが賑はしく見ゆるを問へば。氷上の黒井と云。

此聞ゆる郷は。父祖父達の住み給ひし古郷と。豫て聞きしものから。斯るついでに付て尋ね往ましを。母刀自の如何に待わび給ふらんと思ひ棄て。國領の坂道にかゝる。丹波の國には二つなき高嶺と云。誰もく足なければ。昇かれて越ゆ。又の晨。霜の痛く降れるを。例の物託する人。

あく霜の白きを見れば旅路へし我なれ衣のいと物憂き肩の迷ひも淺ましけれど。秋過ぬれば。綴りさせとも聲せぬ。枯生の道を分迷ふにも。いと故郷の遙けきに。今一夜二夜も。八千夜し經べき心地してなむ。

秋山の記終

幣 ふうくろ

枇杷園士朗

終夜つらく臥して思ふ事の。起出ては皆異様になる物や。夜明けなば潮も叶ひなん。熟田の邊に船乗らんと。卯月も六日なる。曉の窓のしらむを待ちつゝ寝るに。早明鳥のかうくど啼て。三ツより二ツ往くに唆かされ。朝戸推開きて打見渡せば。西に東に雲覆ひて。ほろくど降る雨の。根笹の下に音募りたり。斯ては熱田の船は出さじ。佐屋の渡に急ぐべきや。都貢は女の童など具しつ。家の子をも二人三人率いたれば。首途の装ひ思ふより漸く間取りて。城の鐘の己を告る比になん。琵琶の古橋は渡りき。妙音の佛御座す鳳凰山に立寄り。暫しとて憇へる間に。女の童が戯れに。法師の狀の形代に紙衣裁み着せたるを。松の上枝に引掛け下枝に切掛けたる眞似して。君今の程に雨を歇めては。舊の御座に還し奉らん。然らずは下さじと云なる。後の篁風戦ぎ。遠の山根晴渡りて。直ちに日の差出る。皆人言ふ。時にも合ひたる所かなど。且祝ひ且怪しみ。是迄送りせし人々にも。懃懃に言を含めて還し遣れば。始めて旅心せられて。珍らしくも物哀しくも思ひなしぬ。往くく船集ふ津島の川傳ひ。水鶏啼く佐屋の

驛に入て。爰に芭蕉翁の墳を拜す。あたりなる老法師の立向ひて。其許たちは俳諧てふ事好き給へるな。發句言出で給はし。里の長吟山が家に往きて止めよどか。言ひ教へけるが。渡守早喚き來て。日や入りなん急ぎ乗り給へど。權擲み行く。船の行く事一里許。四方のけはいも稍鎮まりて。柄短き筆をなん取出して。

水鶏聞けど導びける僧も懐かしき

水際や水鶏晝ゆく日の曇り

士 朗
都 貢

書きて船人に渡しぬれば。今宵なん吟山の許へ届け進らせんと。己が揮の間に挟みて置きぬ。桑名の城白く。松の木立は烟の中に見え隠れて。物象歸ニ餘清。林巒分ニ夕麗。と言ひけんも。頓て水上暗くなりて。螢の焚く火の覺束なく。犬の遠吼の灰聞えて。うら寒く情沈みて漕れ行く程。船着きぬと云。手近き物だに取れも敢ず。舍りの者が迎ふるに任せて入りぬ。都貢曰。子東が餞別に。

歸り見せよ扇日記のふたおもて

海のみかひの(貢)月を訪ふ夏 (朗)

そも古郷の門より此方。只伊勢の神宮へどこそ思ひしが。爰に來りてゆくりなく。都見まほしき心の發り。只管懐かしみ思へば。いざや先づ都へ馬の鼻引向んは如何に。日に限りある祭を

も拜み參らんと云ふを。同じ心に點頭きて。又更に旅立る心地して臥しぬ。昨宵の雨清く晴れて。朝明の川の邊に至りぬ。

朝日見えて菜種の露の光り哉

都 貢

富田の茶店にて。良き酒の候ぞや。いざ一盃聞し食せと。ほのめかしけるに。二ツも三ツも重ねたり。

蛤を焼く女みな芥子の花

士 朗

今宵は關の驛に宿る。根越し山越し吹く風に。板戸を鳴す音。短夜の終宵。只難寐にのみ明しつ。けふは鈴鹿の山踏するなればとて。夙く起て行く程。其邊家毎に。藤に躑躅に折掛けて。軒のかざしとなし置ける。例ある事にやと里人に問ひ侍れば。今日は佛生會の花摘にあなりと答ふるに。指を折て算ふれば。實に然り。未だ幾程も過ざる旅ながら。早其日をさへに忘れたり。

灌佛やけふは花なき里もなし

都 貢

山過る日に逢ひにけり佛生會

士 朗

頂近く登り進みて。

岩かどや日さしにうとき夏童

都 貢

石部山段々と元並ぶ中に。獨り蒼々たる物を望む。

三上山のみ夏しれるすがた哉

士朗

石山に詣でんと思ふ人々は。船借りて皆乗り合ひ。予も疾くく此船に乗移らむと。舷を傳ひ行くに。船揺退きて。あはや轉び落るよと。乗合へる人の肩を力に身をからみつ。辛うじて溺れず。扱船の後。物暴らかに罵る者あり。夫は前の男の上衣。垂るばかりに破裂つと。敦圀して罵腹立つなり。吾從者只管にことうちし。吾も頓て立寄りにつ。兎様角様言宥むれば。聲つくらひつゝ面打解けて。さなん詫言宣へるにぞ。心は打和ぎぬと言ひつ。船ゆ上りて去ぬ。されど心の中。何許かも恨み怒りつらんを。いざや衣一重をも送らんをと。追行きけれど。何地往けん見えぬなんなりにける。最本意なかりき。いでや古に謂らずや。旅行人の古郷に過誤あれば。必ず旅にても事ありとぞ。彼が故郷に怪事にも有りしや。我家にも怪事なきやと感ひつ。其等の御佛に願ぎ參らせて。少しは心も安き方に成り侍る。

都貢

石の肌花咲く苔も見えざりき
兼て聞く。此等の石打かきな取りそと云へる。戒め有りと聞く。然るを膽太き男の。密かに打虧きて。文の鎮めにせよと與へたるを。其志の黙し難くて。心ならずも懐にせしなりけり。夢の浮橋とか云る所を歸り過て。瀬田の橋轟る踏鳴して。斜陽の中に立つ。前に陸奥國の丈芝。

此所を過るとて。

青嵐瀬田一方へ吹き落ぬ

となん云る發句を。玉章の便して聞えたり。此句の實あるに愛られて。爰に口を噤みて止みぬ。今宵は宵の月あかく。隈なき影を此所にして見過さむをと。強て夜泊す。

都貢

ほととぎす聲のゆくへや鴉の月
木曾寺に行て。故翁の墳前に跪きぬ。

椎の花扇に落るなみだかな

都貢

生はせむと小草ぬきよる塚の夏

士朗

三井寺にまうづ。

英り葉や三井の佛の光りさし

士朗

女の童は都べの早く見まほしとて。一里く指折行くなり。鬼貫が曰る。旅にして道の程尋ねたるに。遠き様に言ひなし教へたるこそ最憎けれど。實に然なりかし。扱意の如く洛に着て。

鴨川の水に目のつく四月哉

都貢

今宵は紐解く宿りなれば。心泰けく。翌日は又其翌日はなど。とりく見所の心配を。今日の勞れをしも打忘れつゝ言どよむ。扱橋の間よりするくと宰馬出來りぬ。是は如何にくと言